

上信越自動車道関係発掘調査報告書XIV
道灌遺跡
向原遺跡

2004

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道関係発掘調査報告書XIV

道 灌 遺 跡

向 原 遺 跡

2 0 0 4

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として、群馬県藤岡インターチェンジから分岐し、群馬県・長野県を経て新潟県上越市に至る全長203キロメートルの高速自動車道です。平成11年に開通し、関越・磐越自動車道と並び、日本海側と太平洋側を結ぶ大動脈として、沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

新潟県教育委員会は、昭和63年度から建設用地内の埋蔵文化財について調査を開始し、平成7年度には長野県境～中郷インターチェンジ間の発掘調査を、平成9年度には中郷インターチェンジ～上越ジャンクション間の発掘調査を終了して、県内全線の現地調査を終了しました。

本書は平成9年度に行った新井市に所在する道灌遺跡・向原遺跡の発掘調査報告書です。

道灌遺跡は縄文時代中期初頭～前葉の集落跡で、出土した土器には北陸地方、関東地方、中部高地などの影響が見られ、信越国境の地域性が現れています。この時期の竪穴住居が2軒発見され、土器を埋めた埋甕炉が設けられていました。この地域・この時期の集落及び竪穴住居は類例が少なく、貴重な発見となりました。

向原遺跡では、平安時代の炭窯と近世以降の炭窯が検出されました。

今回の調査成果が、歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助を賜った新井市教育委員会、並びに地元の方々をはじめ、日本道路公団新潟建設局（現、日本道路公団北陸支社）・同上越工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成16年8月

新潟県教育委員会

教育長 板屋越 麟一

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県新井市大字志字道灌1724番地ほかに所在する道灌遺跡と新井市大字首沼字向原307番地ほかに所在する向原遺跡の発掘調査記録である。発掘調査時点では道灌遺跡と向原遺跡を「道灌林遺跡」南区・北区としていたが、報告書作成中に別々の遺跡として登録されていることがわかった。『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成9年度をはじめ、「道灌林遺跡」として報告されたものは、道灌遺跡と向原遺跡である。
- 2 本調査は上信越自動車道建設に伴い日本道路公团（以下、公团）から新潟県が受託したものである。発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が平成9年度に実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成15年度に埋文事業団が県教委から受託しこれに当たった。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は道灌遺跡は「ドウカン」、向原遺跡は「ムカイハラ」とし、出土地点・層位を併記した。
- 6 本書の図中で示す方位はすべて真北である。
- 7 遺物番号は種別にかかわりなく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、自然科学分析部分を除いて巻末に一括して掲載した。
- 9 自然科学分野に係る分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。なお、本書には再編集したものを掲載した。
- 10 造構図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、デジタル化した造構写真と合わせて編集を行った。なお、図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。
本文・挿図：テキスト形式・エクセル形式のデータ、トレース原図・貼り込み版下
造構図面図版：原図（修正済）・レイアウト図・文字データ
遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図
写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図
- 11 本文の編集は、小田由美子（埋文事業団調査課長）が担当した。執筆は、第Ⅲ章4C・D、第Ⅵ章5は高橋保雄（埋文事業団調査課長）、そのほかは小田が担当した。
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）
酒井重洋　佐藤雅一　清水克彦　関根慎二　田中耕作　谷藤保彦　塙本師也　寺内隆夫
長澤辰生　野村忠司　早津賛二　綿田弘美

目 次

| | |
|--------------------|----|
| 第Ⅰ章 序 説 | 1 |
| 1 調査に至る経緯 | 1 |
| 2 調査の方法と経過 | 1 |
| A 一次調査 | 1 |
| B 二次調査 | 2 |
| 3 整 理 | 3 |
| 4 調査体制 | 3 |
| 5 整理体制 | 3 |
| 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 | 4 |
| 1 地理的環境 | 4 |
| 2 遺跡の位置と立地 | 4 |
| 3 歴史的環境 | 5 |
| 第Ⅲ章 道灌遺跡 | 7 |
| 1 調査の概要 | 7 |
| A 遺跡の立地と微地形 | 7 |
| B グリッドの設定 | 7 |
| 2 基本層序 | 7 |
| 3 遺構 | 9 |
| A 概要 | 9 |
| B 遺構各説 | 9 |
| 4 遺物 | 12 |
| A 土器 | 12 |
| B 土製品 | 22 |
| C 石器 | 22 |
| D 石製品 | 28 |
| 第Ⅳ章 向原遺跡 | 29 |
| 1 調査の概要 | 29 |
| A 遺跡の立地と微地形 | 29 |
| B グリッドの設定 | 29 |
| 2 基本層序 | 30 |
| 3 遺構 | 30 |
| A 概要 | 30 |
| B 遺構各説 | 30 |

| | |
|---------------------|----|
| 第V章 自然科学分析 | 32 |
| 1 道灌遺跡のテフラ分析及び層序対比 | 32 |
| A 試 料 | 32 |
| B 分析方法 | 33 |
| C 結 果 | 33 |
| D 考 察 | 34 |
| 2 道灌・向原遺跡の樹種同定 | 35 |
| A 試 料 | 35 |
| B 方 法 | 35 |
| C 結 果 | 35 |
| D 考 察 | 36 |
| 第VI章 道灌遺跡まとめ | 40 |
| 1 はじめに | 40 |
| 2 住居形態と炉 | 40 |
| 3 土器編年案 | 43 |
| A 遺構出土の土器の検討 | 43 |
| B 土器編年案 | 44 |
| C 系統組成 | 47 |
| 4 中空土偶について | 48 |
| 5 石器について | 48 |
| A 中期初頭～前葉の石器組成 | 48 |
| B 器種と石材選択 | 50 |
| 《要 約》 | 52 |
| 《引用・参考文献》 | 53 |
| 《観察表》 | 55 |
| 道灌遺跡土器・土製品観察表 | 55 |
| 道灌遺跡石器・石製品観察表 | 64 |

挿図目次

| | | | |
|---------------------------------|----|--------------------------|----|
| 第1図 上信越自動車道ほか路線図 | 1 | 第15図 磨製石斧分類図 | 25 |
| 第2図 調査範囲と一次調査トレント位置図 | 2 | 第16図 敷石石類分類図 | 26 |
| 第3図 道跡の位置 | 4 | 第17図 砥石分類図 | 27 |
| 第4図 道跡の調査地点と周辺の景観 | 5 | 第18図 向原遺跡 グリッド設定図・基本層序 | 29 |
| 第5図 新井市の縄文時代・平安時代の遺跡分布 | 6 | 第19図 基本層序及び試料採取位置 | 32 |
| 第6図 道灌遺跡 グリッド設定図・道跡起伏図・ 基本層序 | 8 | 第20図 火山ガラス・砂分の状況 | 34 |
| 第7図 整穴住居配置模式図 | 9 | 第21図 炭化材(1) | 38 |
| 第8図 出土土器重量比率 | 12 | 第22図 炭化材(2) | 39 |
| 第9図 土器部位名称 | 12 | 第23図 縄文時代中期初頭～前葉の整穴住居(1) | 41 |
| 第10図 文様の名称 | 13 | 第24図 縄文時代中期初頭～前葉の整穴住居(2) | 42 |
| 第11図 縄文時代中期初頭～前葉土器出土分布 | 14 | 第25図 縄文時代中期初頭～前葉の遺跡分布 | 44 |
| 第12図 平安時代土器出土分布 | 20 | 第26図 道灌遺跡土器編年案 | 45 |
| 第13図 石器出土分布 | 23 | 第27図 信越国境付近出土の中空土偶等 | 49 |
| 第14図 打製石斧分類図 | 24 | | |

表目次

| | | | |
|----------------------|----|------------------|----|
| 第1表 新井市の縄文時代の道跡 | 5 | 第5表 樹種同定結果 | 36 |
| 第2表 新井市の平安時代の道跡 | 5 | 第6表 道灌遺跡土器編年案表 | 43 |
| 第3表 器種別石器・石製品・搬入標出土数 | 22 | 第7表 石器・石製品器種別石材表 | 50 |
| 第4表 テフラ分析結果 | 33 | | |

図版目次

【図面】

| | |
|---|--|
| 図版1 道灌遺跡 道構全体図 | |
| 図版2 道灌遺跡 道構個別図(1) 1号整穴住居 | |
| 図版3 道灌遺跡 道構個別図(2) 2号整穴住居 | |
| 図版4 道灌遺跡 道構個別図(3) 2号整穴住居、1～3号埋葬炉 | |
| 図版5 道灌遺跡 道構個別図(4) 1～7号土坑、1号炭窯 | |
| 図版6 向原遺跡 道構全体図、道構個別図(1) 1号土坑、1・2号炭窯 | |
| 図版7 向原遺跡 道構個別図(2) 3号炭窯 | |
| 図版8 道灌遺跡 縄文土器(1) 道構 | |
| 図版9 道灌遺跡 縄文土器(2) 道構・包含層(中期初頭～前葉) | |
| 図版10 道灌遺跡 縄文土器(3) 包含層(中期初頭～前葉) | |
| 図版11 道灌遺跡 縄文土器(4) 包含層(中期初頭～前葉) | |
| 図版12 道灌遺跡 縄文土器(5) 包含層(中期初頭～前葉) | |
| 図版13 道灌遺跡 縄文土器(6) 包含層(中期初頭～前葉) | |
| 図版14 道灌遺跡 縄文土器(7) 包含層(中期初頭～前葉) | |
| 図版15 道灌遺跡 縄文土器(8) 包含層(中期初頭～前葉) | |
| 図版16 道灌遺跡 縄文土器(9) 包含層(中期初頭～前葉、早期・前期) | |
| 図版17 道灌遺跡 縄文土器(10) 包含層(中期・後・晩期)、平安時代土器(1) | |
| 図版18 道灌遺跡 平安時代土器(2)、土製品(土偶) | |

- 図版 19 道灌遺跡 石器（1）
図版 20 道灌遺跡 石器（2）
図版 21 道灌遺跡 石器（3）
図版 22 道灌遺跡 石器（4）
図版 23 道灌遺跡 石器（5）
図版 24 道灌遺跡 石器（6）、石製品

【写 真】

- 図版 25 道灌遺跡 遠景、完掘・基本土層・2号竪穴住居・2号竪穴住居埋甕炉、縄文土器出土状況。
向原遺跡 完掘・3号炭窯
図版 26 道灌遺跡 1・2号竪穴住居
図版 27 道灌遺跡 2号竪穴住居・1～3号埋甕炉・2号土坑
図版 28 道灌遺跡 3～8号土坑・1号炭窯
図版 29 道灌遺跡 遺物出土状況・作業風景、向原遺跡 西側完掘・1号土坑・1号炭窯
図版 30 向原遺跡 2・3号炭窯
図版 31 道灌遺跡 縄文土器（1） 遺構・包含層（中期初頭～前葉）
図版 32 道灌遺跡 縄文土器（2） 包含層（中期初頭～前葉）
図版 33 道灌遺跡 縄文土器（3） 包含層（中期初頭～前葉）
図版 34 道灌遺跡 縄文土器（4） 包含層（中期初頭～前葉）
図版 35 道灌遺跡 縄文土器（5） 包含層（中期初頭～前葉）
図版 36 道灌遺跡 縄文土器（6） 包含層（中期初頭～前葉）
図版 37 道灌遺跡 縄文土器（7） 包含層（中期前葉・早期・前期・中期・後晩期）、平安時代土器（1）
図版 38 道灌遺跡 平安時代土器（2）、土製品（土偶）
図版 39 道灌遺跡 石器（1）
図版 40 道灌遺跡 石器（2）
図版 41 道灌遺跡 石器（3）
図版 42 道灌遺跡 石器（4）
図版 43 道灌遺跡 石器（5）、石製品

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

上信越自動車道は、藤岡市で関越自動車道と分岐し、長野市などを経て上越市で北陸自動車道と接続する延長203kmの高速自動車道である。本路線は、関越自動車道と北陸自動車道を結ぶ基幹輸送体系として、また、沿線地域の各種開発整備計画と関連して社会経済活動に大きな役割を果たす。

上信越道の新潟・長野県境から上越市までの34kmは、昭和48年11月に基本計画が決定された。道灌遺跡・向原遺跡にかかる第11次施行命令区間（中頸城郡中郷村～上越市）20kmは、平成元年1月に整備計画が決定され、同年3月には、建設省（現国土交通省）道路局長から公團新潟建設局（現北陸支社）に対して、調査開始指示が出された。これを受けた県教委と公團との間で、法線内の遺跡分布調査・試掘調査などに関する協議が本格化した。

県教委は公團の依頼を受け、平成2年4月に中郷村～上越市間の埋蔵文化財分布調査を実施した。これにより、この区間に周知の遺跡18か所、新発見の遺跡10か所の計28か所の埋蔵文化財包蔵地のほか25か所の遺跡推定地が存在することを確認し、この結果を公團に通知している。新発見の道灌・向原遺跡は両遺跡を合わせ、上信越自動車道No.34⑦遺跡推定地として、39,500m²の一次調査が必要である旨を伝えた。

2 調査の方法と経過

A 一次調査

平成7年から8年にかけて上信越自動車道No.34⑦遺跡推定地として39,500m²を対象に一次調査を実施した。調査は、対象範囲内の任意の位置に合計182か所のトレンチを設定し、バックホーと人力によって堆積土を薄く掘削・精査して、遺構・遺物の有無、土層堆積状況を確認した。

初回の調査は、平成7年11月27日から12月8日にかけて対象範囲の中央部の山林26,610m²について実施した。設定した113か所のトレンチのうち9か所から縄文土器片18点、土師器片2点、陶器1点、近世火鉢など9点が出土したが、少量であることとこの地域に



第1図 上信越自動車道ほか路線図

多い縄文時代の陥穴状遺構も検出されなかったことから、遺跡の可能性が低いとして二次調査対象範囲から除外した。

第2回目の調査は平成8年10月7日から10月18日の間に行われ、初回の対象範囲内で未伐採の地区と貯木場で調査できなかった12,890 m²を対象に実施した。これは道灌遺跡と向原遺跡の範囲で、初回調査の山林の南と北の端に当たる。任意に設定した69か所のトレンチのうち、道灌遺跡（南端）では土坑と思われる掘り込みが4基、縄文土器片158点、土師器片17点が出土しており、遺物の分布は南端側対象範囲全体に見られた。向原遺跡（北端）では縄文土器片が138トレンチから1点しか出土しなかつたが、150トレンチからは平安時代以降の炭窯と推測される掘り込みが1基検出された。一次調査の結果、二次調査対象面積を道灌遺跡2,300 m²、約500mの山林を隔てた向原遺跡1,800 m²と確定した。県教委はこの結果を公團に通知した。

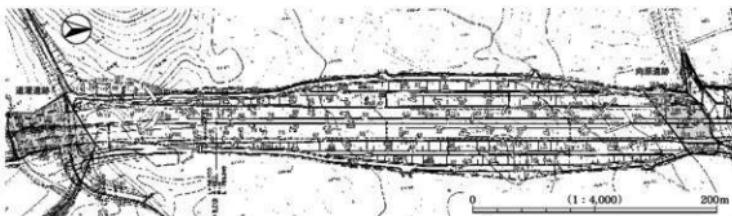
B 二次調査

二次調査は道灌遺跡2,300 m²、向原遺跡1,800 m²の合計4,100 m²を対象として、平成9年4月14日から8月1日まで実施した。両遺跡が約500mの山林を隔てているために往来用の道路整備に時間を要した。表土除去はバックホーを使用し、遺物包含層直上まで徐々に掘り下げた。包含層削削は人力削削を行った。遺物は、層位別に小グリッドごとに取り上げ、遺構精査は地山面で行った。

以下、各々の遺跡の調査経過を記述する。

【向原遺跡】 公團から工事用道路建設のために、部分的にでも早急に引き渡しを願いたいとの要請があったため、道灌遺跡よりも先行して4月14日から調査を行った。一次調査の結果から、遺物の分布が極めて希薄のためトレンチ調査を行った。トレンチ内からは遺構・遺物が検出されなかつたため、トレンチ間の未発掘部分については削削を行わなかった。検出した遺構は炭窯2基（一次調査時に検出されていたもの）、土坑1基であった。また、調査範囲外に延びる炭化物・焼土を含む層を確認したところ、近世の築窯製炭法の石積み窓を検出した。5月20日、工事用道路部分の調査を終了し公團へ引き渡し、6月10日には北区1,800 m²のすべてを終了し公團へ引き渡した。

【道灌遺跡】 4月22日から調査を行った。I・II層から縄文時代中期前葉の遺物が多量に出土し、縄文時代の埋甕が4基検出された。埋甕の周囲から多量に土器が出土したことや、ピットが周囲に巡り、埋甕周囲には焼土や炭が広い範囲から検出されたことなどから地山面で2基の竪穴住居の存在を確認した。このほか、平安時代の遺物が13・14B・Cグリッド周辺からまとまって出土した。III層・IV層については、遺物包含層でないことから重機による削削を行った。8月1日2,300 m²の調査を終了し公團へ引き渡した。



第2図 調査範囲と一次調査トレンチ位置図

3 整 理

出土遺物の水洗・注記作業は、発掘調査と並行して行い、基礎整理は平成9年度の冬季を行った。報告書作成に関わる本格的な整理作業は県教委が埋文事業団に委託して、平成15年度に埋文事業団朝日分室で行った。

4 調査体制

平成7年度【一次調査】

調査期間 平成7年11月27日～12月8日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
（理事長 平野清明）

| | | |
|-----|------|-----------------|
| 管 理 | 總 括 | 藍原 直木（事務局長） |
| | 管 理 | 山上 利雄（総務課長） |
| | 庶 務 | 泉田 誠（総務課主事） |
| 調 査 | 調査統括 | 龟井 功（調査課長） |
| | 調査指導 | 藤巻 正信（〃 調査第一係長） |
| | 調査担当 | 田海 義正（〃 主任調査員） |
| | 調査職員 | 星 泰津子（〃 文化財調査員） |
| | | 三ツ井朋子（〃 文化財調査員） |
| | | 山田 异（〃 嘱託員） |

平成8年度【一次調査】

調査期間 平成8年10月7日～10月18日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
（理事長 平野清明）

| | | |
|-----|------|-----------------|
| 管 理 | 總 括 | 藍原 直木（事務局長） |
| | 管 理 | 山上 利雄（総務課長） |
| | 庶 務 | 泉田 誠（総務課主事） |
| 調 査 | 管 理 | 龟井 功（調査課長） |
| | 調査指導 | 藤巻 正信（〃 調査第一係長） |
| | 調査担当 | 坂坂 勝泰（〃 文化財調査員） |
| | 調査職員 | 山崎 忠良（〃 嘱託員） |
| | | 龍澤 誠（〃 嘱託員） |

平成9年度【二次調査】

調査期間 向原遺跡 平成9年4月14日～6月10日

道灌遺跡 平成9年4月22日～8月1日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
（理事長 平野清明）

| | | |
|-----|------|-----------------|
| 管 理 | 總 括 | 須田 益輝（事務局長） |
| | 管 理 | 若柳 勝則（総務課長） |
| | 庶 務 | 泉田 誠（総務課主事） |
| 調 査 | 調査統括 | 龟井 功（調査課長） |
| | 調査指導 | 藤巻 正信（〃 調査第一係長） |
| | 調査担当 | 江口 友子（〃 文化財調査員） |
| | 調査職員 | 野水 仁（〃 文化財調査員） |
| | | 石田 守之（〃 嘱託員） |

5 整理体制

整理期間 平成15年9月1日～平成16年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越嶺一）

整 理 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
（理事長 板屋越嶺一）

| | | |
|-----|------|--|
| 管 理 | 總 括 | 黒井 幸一（事務局長） |
| | 管 理 | 長谷川二三夫（総務課長） |
| | 庶 務 | 高野 正司（総務課班長） |
| 調 査 | 整理統括 | 藤巻 正信（調査課長） |
| | 整理指導 | 高橋 保（〃 整理担当課長代理） |
| | 整理担当 | 小田由美子（〃 班長） |
| | 作 業 | 齊藤 文子 齊藤 由香 高橋 聰美 本間 智子 山上 敏子（以上嘱託員） |
| | | |

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

道灌・向原遺跡の所在する新井市は新潟県の南西部に位置し、南は長野県飯山市に、北は上越市に接している。新井市は東を関田山脈、南を妙高山、西を頸城連山に囲まれ、北は日本海に面した頸城平野に向いて開いている。市の中央部には関川と矢代川が北流している。関川は焼山を起源として妙高山の南麓をめぐり、関田山脈の裾野を流れて頸城平野に至る。矢代川は妙高山、火打山、容雅山、不動山などの山々から流れ下り、頸城平野に至り関川に合流する。両河川の形成した扇状地や氾濫原は当地に肥沃な土地を提供している〔立木（土橋）ほか1997〕。

2 遺跡の位置と立地

道灌遺跡は矢代川右岸の妙高山麓からつながる低い丘陵の先端部分に位置し、中郷村と境を接している。周辺は矢代川岩屑などれ堆積物に覆われている地域である（第V章1参照）。丘陵は枝分かれし、幅約1kmと狭い。丘陵の最高地点の標高は243.9mである。周囲の水田部との比高差は約10mである。道灌遺跡はこの丘陵の南西の縁に位置している。

向原遺跡は北東の縁に位置し、矢代川に面している。遺跡の存在する地点は丘陵の緩傾斜地で、標高約215m前後である。矢代川側に向かって急な崖になっている。



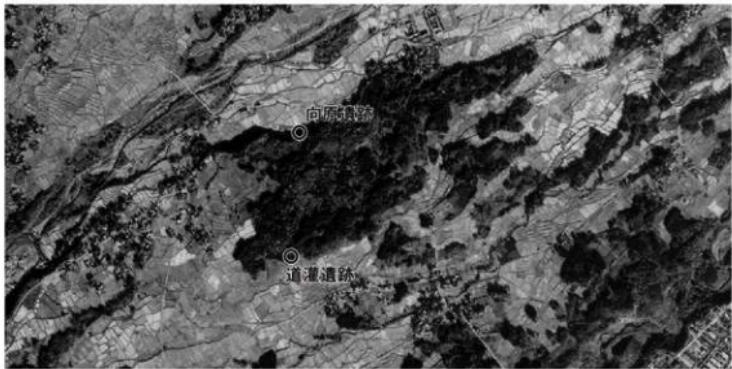
第3図 遺跡の位置
重倉山・関山 [国土地理院1:25,000 [重倉山]・[関山] 平成3に加筆]

3 歴史的環境

新井市では、327遺跡のうち、縄文時代の遺跡は17か所、平安時代の遺跡は21か所と少ない。遺跡の多くは国指定史跡の観音平・天神堂古墳群などの古墳が占めている。このほか中世の遺跡が比較的多い。

縄文時代の遺跡は各時期のものが見られ（第1表）、遺跡の立地する地点は、山麓部が中心である。特に多く分布するのは伏木川右岸の妙高山麓からつながる低い丘陵部分である。道灌遺跡もこの丘陵に位置している。発掘調査が行われた遺跡には、大貝遺跡〔立教大学博物館学研究室1967〕・原通ハツ塚遺跡〔小野ほか1982〕・萩清水遺跡などがあり、道灌遺跡と同時期の遺跡には原通ハツ塚遺跡がある。

平安時代の遺跡のほとんどは関川の沖積面に立地している。点々と山麓部に見られる遺跡は諂訪窯跡や道灌、向原遺跡で検出された炭窯などの生産遺跡である。こうした状況から、沖積面には集落が営まれ、山麓部には生産遺跡が築かれた様子が見える。



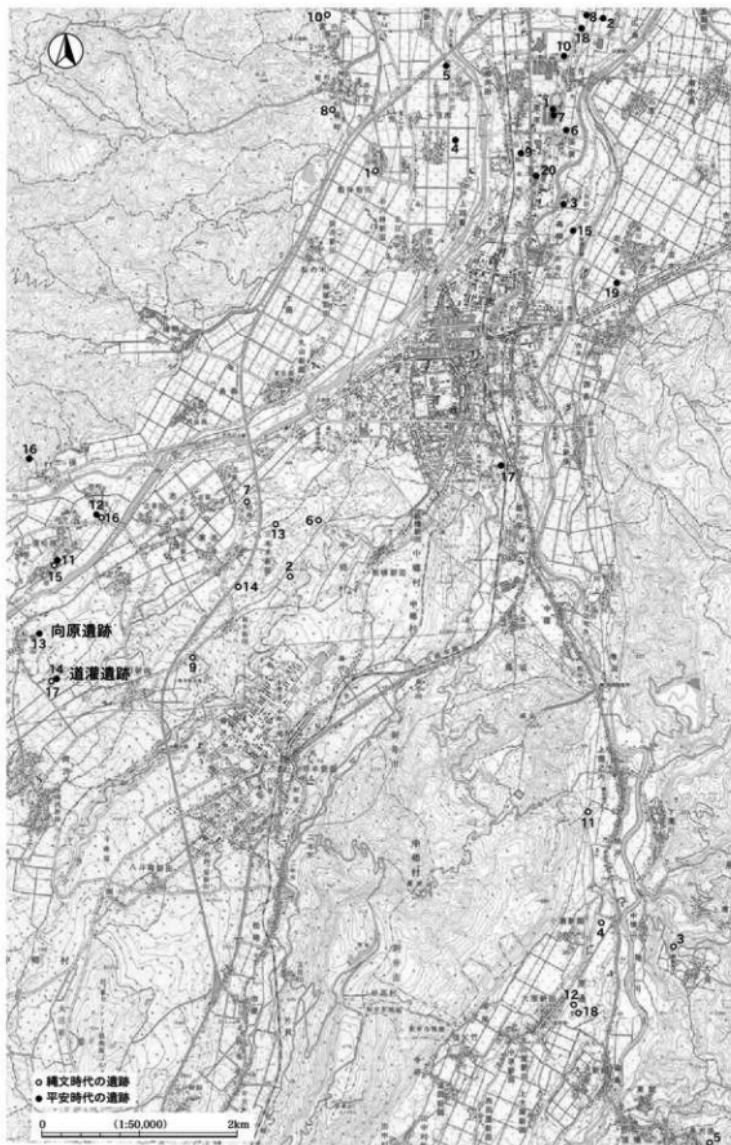
第4図 遺跡の調査地点と周辺の景観（上方北）（建設省国土地理院1976年撮影空中写真）

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 時期 |
|-----|----------|------------|---------|
| 1 | 新保遺跡 | 新保新田字松根 | 前期未 |
| 2 | 松山A遺跡 | 小出字新田2083 | 中期 |
| 3 | 人只A遺跡 | 人只字知林 | 中期 |
| 4 | 小原遺跡 | 小原新田字小原 | 中期後半～後期 |
| 5 | 長沢加瀬遺跡 | 長沢 | 中期～後期 |
| 6 | 松山B遺跡 | 小出字松山 | 中期～後期 |
| 7 | 村地遺跡 | 志字村地 | 後期 |
| 8 | 天神寺遺跡 | 藤町字天神寺 | 後期 |
| 9 | 新井田B遺跡 | 新井田 | 後期 |
| 10 | 鶴合A遺跡 | 羽内字鶴合平 | 中期不明 |
| 11 | 猪戸遺跡 | 猪戸 | 中期 |
| 12 | 人原新田遺跡 | 人原新田 | 中期～後期 |
| 13 | 萩清水遺跡 | 三木本新田 | 前期 |
| 14 | 三木本新田B遺跡 | 三木本新田 | 前期 |
| 15 | 高畠遺跡 | 柳松字南原1701他 | 中期 |
| 16 | 松之木遺跡 | 柳松字松之木281他 | 時期不明 |
| 17 | 道灌遺跡 | 志字道灌 | 中期後半～後期 |
| 18 | 原通ハツ塚遺跡 | 大原新田字ハツ塚 | 中期後半 |

第1表 新井市の縄文時代の遺跡

| No. | 遺跡名 | 所在地 |
|-----|--------|------|
| 1 | 国賀通耕 | 国賀 |
| 2 | 上百ヶ浦耕 | 上百ヶ |
| 3 | 高柳通耕 | 高柳 |
| 4 | 甲斐通耕 | 甲斐 |
| 5 | 伊那谷通耕 | 伊那谷 |
| 6 | 朝日寺通耕 | 朝日寺 |
| 7 | 山田通耕 | 山田 |
| 8 | 元島通耕 | 元島 |
| 9 | 八反田通耕 | 八反田 |
| 10 | 利明通耕 | 利明 |
| 11 | 高原通耕 | 高原 |
| 12 | 船之木通耕 | 船之木 |
| 13 | 西条通耕 | 西条 |
| 14 | 高瀬通耕 | 高瀬 |
| 15 | 弓ノ木通耕 | 弓ノ木 |
| 16 | 西田30通耕 | 西田30 |
| 17 | 広田通耕 | 広田 |
| 18 | 舟田通耕 | 舟田 |
| 19 | 田中通2通耕 | 田中2 |
| 20 | 玉穂子通耕 | 玉穂子 |

第2表 新井市の平安時代の遺跡



第5図 新井市の縄文時代・平安時代の遺跡分布
〔国土地理院1：25,000を縮小（〔新井〕平成4、〔猿橋〕・〔重倉山〕・〔圓山〕平成3）〕

第III章 道灌遺跡

1 調査の概要

A 遺跡の立地と微地形

道灌遺跡は矢代川右岸の妙高山麓からつながる低い丘陵の先端部分に位置している。丘陵は枝分かれし、幅約1kmと狭い。丘陵の最高地点の標高は243.9mである。周囲の水田部との比高差は約10mである。道灌遺跡はこの丘陵の南西の縁に位置している。遺跡の存在する地点は頂上付近が平坦な小山状をなしている。この小山の標高は227.9mである。この小山と周囲の緩傾斜地に縄文時代中期初頭～前葉の集落が営まれ、北側の緩傾斜地では平安時代の遺物が多数出土し、同時期の炭窯が検出された。遺跡の現況は山林であった。

B グリッドの設定

国家座標を基準にグリッドを設定した。Y軸 (Y = -25800.000) を基準線とし、10m方眼を組み大グリッドとした。座標値は、E13杭 (X = 110180.000, Y = -25800.000)、E15杭 (X = 110160.000, Y = -25800.000)、E17杭 (X = 110140.000, Y = -25800.000) である。大グリッドの呼称は調査区の東西南北方向をアルファベットのA～I、南北方向を算用数字の11～17で区分し、両者の組み合わせにより「11A」のように表示した。さらに大グリッドを2m方眼に分割して、1～25の小グリッドとし、北西隅を起点「1」、南東隅を終点「25」とし、大グリッド表示に統けて「11A25」のように表記した。

2 基本層序

調査区は中央が小山状になっているが、その頂上部は平坦である。西から東へ緩やかに傾斜し、その比高差は約4mである。現況は山林であるが、1～2m大の石が点在する。また、調査区全体は矢代川岩屑なだれ堆積物に覆われている。地形が複雑で、場所によって土層の堆積状況が異なっているので、調査区内23か所の層序を記録した。第6図に示した柱状図はその一部である。基本層序は以下のとおりである。

I層：暗褐色土。表土。腐葉土が堆積している。大量の木の根が入り込んでいる。粘性弱く、しまり強い。層厚は10～50cmと均一でない。 I'層：黒褐色土。

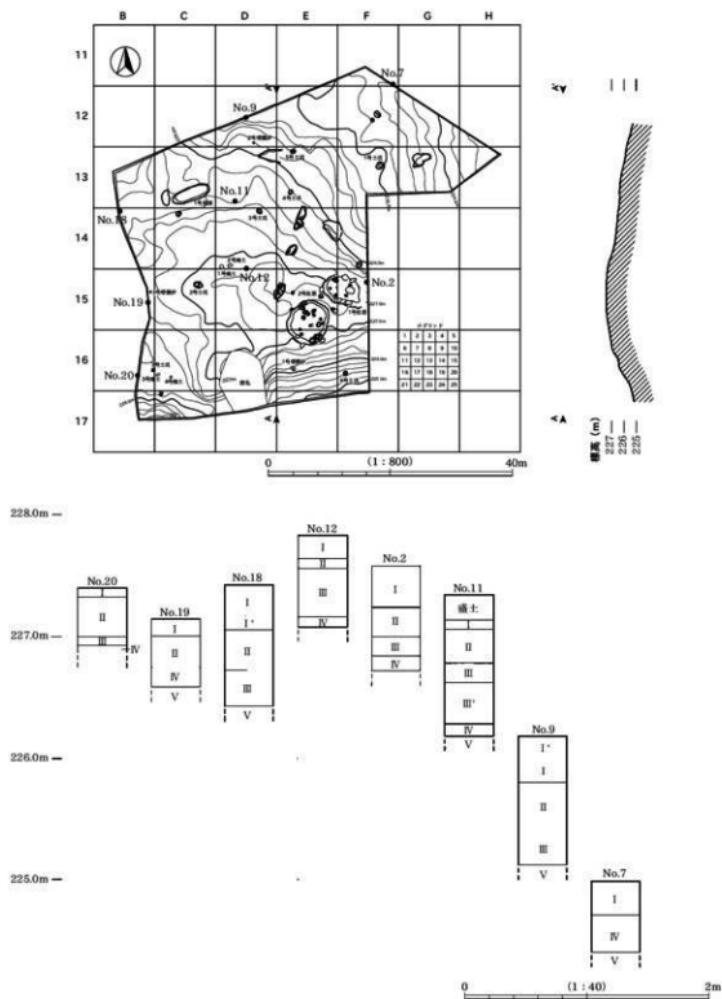
II層：暗黄褐色土。多量の根があり込み、3～5cm大の礫を少量含む。粘性弱く、しまり強い。層厚は10～50cmと均一でない。縄文時代中期初頭～前葉と平安時代の遺物が出土する。

III層：黒褐色土。5mm大の小石を多量に含む。粘性弱く、しまり強い。層厚は5～30cmであるが、場所によっては存在しないこともある。無遺物層。 III'層：にぶい黄褐色土。

IV層：暗黄橙色土。黒褐色土が混じる（漸層層）。5cm大の礫を含む。粘性弱く、しまり極めて強い。層厚は2～40cmと均一でない。

V層：明黄褐色土～にぶい赤褐色土。礫を多量に含む。粘性弱く、しまり極めて強い。地山。矢代川岩屑なだれ堆積物。

遺物包含層はII層で、縄文時代中期初頭～前葉と平安時代の遺物が出土した。II層中で分層はできなかつた。III・IV層でも遺物の出土が見られたが、これは遺構に伴うものであった可能性がある。



第6図 遺構遺跡 グリッド設定図・遺跡起伏図・基本層序

3 遺構

A 概要

道灌遺跡からは縄文時代中期初頭～前葉の集落が検出された。竪穴住居が2軒、うち1軒は埋甕を、もう1軒は埋甕を伴っていた。このほか3基の理甕が出土したが、周囲から遺物が多く出土することや長野県の縄文時代中期初頭～前葉の遺跡の調査事例などから¹⁾、竪穴住居に伴つたものと判断した。埋甕の所在する位置には傾斜地もあり、竪穴住居を建てることが可能か疑問な場所もあるが、地山面の等高線に乱れがあり、切り盛りを行った可能性もあると考えた。合計5軒の竪穴住居が存在したと考えられる(第7図)。このほか地床炉の可能性のある焼土が検出されているが、本報告では竪穴住居には含めなかった。竪

穴住居の立地は小山の頂上の平坦部分と小山の周囲の緩斜面に環状を呈するように並び、遺物の分布状況も環状を呈する。また、調査区中央の小山の斜面14・16Eグリッド部分が捨場として利用されていた様子がうかがえる。このほか遺物を伴わないため時期は不明だが、縄文時代に属すると考えられる土坑が7基、平安時代の炭窯が1基検出されている。

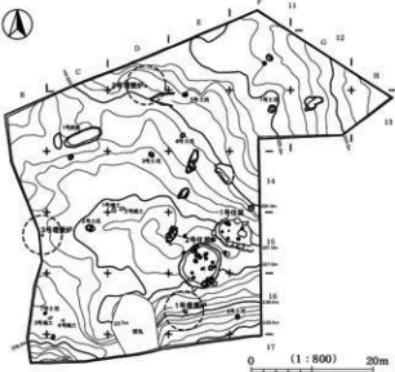
B 遺構各説

1) 竪穴住居

2軒の竪穴住居とも、掘り込みに伴う覆土を確認することはできなかった。検出面は地山面のV層である。おそらく基本層序のⅡ・Ⅲ層で同色の覆土を見分けることができなかつたと考えられる。中期前葉の頸南地域の遺跡には、遺構を確認しにくいという傾向が見られることが指摘されている[小池ほか1996]。しかし、遺物が集中して出土するという状況があり、遺構検出にもう少し注意を払うべきであった。

1号竪穴住居(図版2、写真図版26)

15E・Fグリッドに位置する。推定長径約7m×短径約5mである。地山面への掘り込みが浅く、平面形態をはっきりと確認できなかつたが、長椭円形に近い不整円形と考えられる。周囲には大きな石が存在し、竪穴住居とすべきか迷う所もあったが、5基のビットがほぼ等間隔で円形に配置され、中心付近に埋甕(図版8-1)が存在するなど、竪穴住居の条件に近いと考えた。埋甕の存在する位置は理甕が存在しても良い位置であるが、残りが悪く、周囲が全く熱を受けていないことから、埋甕とした。5本主柱穴の竪穴住居と考えられる。



第7図 竪穴住居配置模式図
(円形破線は、竪穴住居想定部分)

1) 千曲市尾代遺跡群下層 [寺内ほか2000]、小川村茂遺跡 [千曲川水系古代文化研究所1991] などによる。

2号竪穴住居（図版3・4、写真図版25～27）

15・16Eグリッドに位置する。長径約7.8m×短径約6.45mである。検出面はV層（地山）である。地山への掘り込みが浅く、平面形態ははつきりしないが、1号竪穴住居と類似した長梢円形に近い不整円形と考えられる。中心に埋甕を持ち、周間にピットが配される。ピットは5本主柱穴と考えられるが、それぞれ対になるものが多く、建て替えが行われた可能性がある。竪穴住居の掘り込み内には主柱穴より一回り大きな1m前後のピットが5基検出されている。P15は主柱穴のP10に切られている状況にあるが、性格は不明である。埋甕炉は一回り大きな掘り方を持ち、口縁部と底部を意図的に打ち欠いた深鉢が正位で埋められている（図版8-2）。深鉢は径約25cm、高さ約15cm、掘り方は幅約33cm、深さ約17cmである。深鉢は強い熱を受け、器壁がもろくなっていた。深鉢の外側に焼土が張り付いている。埋甕炉の周囲には焼土が確認された。

2) 埋 甕 炉

3基検出され、概要で述べたようにいずれも竪穴住居に伴ったものと判断した。周囲からは多くの遺物が出土したが、柱穴などは確認していない。発掘調査時点では竪穴住居に伴うものという認識はなかった。

1号埋甕炉（図版4、写真図版27）

16E17グリッドに位置する。検出面はIIまたはIII層である。比較的大きな掘り方を持つ。深鉢は径約20cm、高さ約7cmで、口縁部と底部を意図的に打ち欠いたものである（図版8-8）。周囲には焼土や炭化物が広い範囲で確認できた。深鉢内には炭化物を含む黒褐色土が確認された。

2号埋甕炉（図版4、写真図版27）

12D24グリッドに位置する。検出面はIV層である。一回り大きな掘り方を持つ。埋甕は二重構造で、外側に縄文施文の深鉢（図版8-10）、内側に鉤の手状に垂下する隆帯文が付く深鉢（図版8-9）が埋設されていた。口縁部・底部は意図的に打ち欠いた状況であった。

3号埋甕炉（図版4、写真図版27）

15B10グリッドに位置する。検出面はII層である。掘り方は土器の大きさに合わせて削除されたと考えられる。埋設されていた深鉢は径約25cm、高さ推定33cmである（図版9-13）。やはり口縁部と底部は意図的に打ち欠いた状況であった。胴上半部は炉内部に崩れたような状態で出土した。

3) 土 坑

調査範囲全体から検出されている。検出面はおよそIV・V層である。遺物が出土しなかつたため、時期は不明であるが、多くは縄文時代に属するものと考えられる。集落の中での位置、竪穴住居との関係などは明確ではない。深さの浅い土坑が多いが、遺物包含層がII層であったことを考えると、竪穴住居と同じく実際はかなり上層から掘り込まれていたと考えられる。

1号土坑（図版5）

13F8グリッドに位置する。長径約128cm×短径約104cm、確認面からの深さ約40cmの不整円形の土坑である。

2号土坑（図版5、写真図版27）

15C9グリッドに位置する。長径約145cm×短径約90cm、確認面からの深さ約15cmの不整形の土坑である。覆土に大きな石が入っている。

3号土坑（図版5、写真図版28）

14D4グリッドに位置する。長径約80cm×短径約70cm、確認面からの深さ約40cmの不整円形の土坑である。覆土に炭化物を含んでいる。

4号土坑（図版5、写真図版28）

13E17グリッドに位置する長径約80cm×短径約60cm、確認面からの深さ約20cmの不整円形の土坑である。

5号土坑（図版5、写真図版28）

13E2グリッドに位置する。長径約83cm×短径約45cm、確認面からの深さ約22cmの不整円形の土坑である。

6号土坑（図版5、写真図版28）

16F16グリッドに位置する。長径約70cm×短径約65cm、確認面からの深さ約15cmの不整円形の土坑である。

7号土坑（図版5、写真図版28）

16B20グリッドに位置する。長径約50cm×短径約40cm、確認面からの深さ約25cmの不整円形の土坑である。

4) 焼 土（図版1）

1～4号の焼土を確認した。いずれもII層内で検出されている。黒っぽい土が熱を受け、酸化し、赤橙色を示しているものが多い。しかし、遺構に伴う地床炉かどうかは判断できなかった。縄文中期の遺物の出土状況などを見ると、3・4号焼土の付近（16Cグリッド）に遺物が多く見られ、竪穴住居に伴った地床炉の可能性は否定できない。1・2号焼土の周辺（14Dグリッド）にも分布の濃い部分があり、これもその可能性があると言えよう。また、長野県千曲市星代遺跡群下層〔寺内ほか2000〕では、竪穴住居跡の周辺に焼土跡が点在し、屋外での調理や火を使う行為が行われたことが指摘されている。しかし、いずれも道灌遺跡では確証がないため、そうした可能性を示唆するのみとする。

5) 炭 窯

いわゆる伏窯であり、平面形が梢円形を呈する炭窯である。頸南地域は上信越自動車道・国道18号バイパスなどに關係して多数の遺跡が発掘調査され、隅丸長方形や長梢円形の炭窯が多く検出されている。この形態の炭窯は覆土中に焼山火山灰（KG-c、10世紀後半噴出）の認められるものがあり、平安期の遺構と推定されていた〔早津1994〕。その後、関川谷内I遺跡の報告で、炭化物の放射性炭素による年代測定が行われ、10世紀の年代が与えられた〔小池1998〕。道灌遺跡の炭窯の覆土にも火山灰が含まれ、炭窯の構築年代は10世紀代と位置付けられる。

1号炭窯（図版5、写真図版28）

13C16・17・21・22グリッドに位置する。長径約6.4m×短径約2.2m、検出面からの深さ約22cmの長梢円形を呈する。1層に火山灰ブロックが見られた。下層には炭が多く残っていた。覆土から土師器・須恵器の細片が多數出土した。この周辺には土師器・須恵器の出土が多く見られ（第12図）、炭窯を構築した際に紛れ込んだものと思われる。遺物の年代は10世紀前半である。また、この炭窯から出土した炭の樹種同定を行った。広葉樹3種（ブナ属・コナラ属・ケンボナシ属）が検出された。詳しい分析

内容は第V章を参照のこと。

4 遺 墓

A 土 器

1) 概 要

遺物は浅箱換算で46箱の出土があった。内訳は土器29箱、石器15箱、炭化材など2箱である。土器は、縄文時代中期初頭～前葉と平安時代が主体で、このほか縄文時代早期前葉の押型文土器、前期・後晩期などの土器が若干出土している。重量は縄文時代中期初頭～前葉125,560g、平安時代17,787g、縄文時代後晩期871g、縄文時代前期91g、縄文時代早期25gであった。重量比率は第8図のとおりである。主体となる

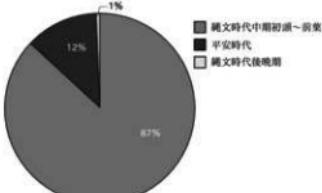
縄文時代中期初頭～前葉と平安時代についての出土分布状況は第11・12図に示した。縄文時代中期初頭～前葉の土器は調査範囲全体から出土し、特に竪穴住居部分などに集中が見られる。平安時代の土師器・須恵器は1号炭窯を中心に13・14B～Dグリッドに集中が見られるが、調査範囲全体に広がってはいない。縄文時代早期前葉の押型文・前期・後晩期はまとまりに欠け、散布している状況であった。遺物の出土層位はI・II層で、II層が遺物包含層と考えられる。時代・時期による分層はできなかった。

2) 分 類

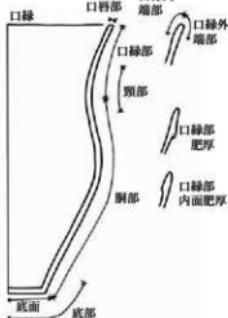
土器を時代・時期ごとに分類し、その中で系統・器形・文様などによって細分した。縄文時代中期初頭～前葉・その他の縄文土器（早期・前期・後晩期）・平安時代に大きく分類し、それぞれ各説で細分を行った。

3) 観察表の記入項目

- | | |
|--------|--|
| No. | すべて通し番号である。遺物実測図・遺物写真・観察表のNo.は対応している。 |
| 出土地点 | 遺構出土以外はすべて小グリッドと層位で示している。 |
| 法量 | 口径・底径・器高が、実測図で復元できたもののみ記入した。部位名称は第9図のとおりである。 |
| 調整・施文等 | 施文の工具が推定できるものについては記載した。縄文の方向は施文時の方向である。縄文時代の隆帶・半隆起線の文様分類などは第10図に示した。隆帶は、粘土紐の貼付による文様。半隆起線は、半截竹管の腹側を押しつけカマボコ形の断面形を示す文様である。 |
| 焼成・色調 | 肉眼観察により識別した。 |



第8図 出土土器重量比率



第9図 土器部位名称



第10図 文様の名称

混入物 胎土に混入されている鉱物などを記した。特定できた鉱物は雲母・石英・角閃石・長石などである。粒子の粗い砂が多い場合は粗砂、砂や細かな鉱物の多い場合は砂礫と記入した。鉱物と判断できないものは白色粒子（白）・褐色粒子（褐）などのように色調で表した。

胎土 内眼観察により識別した。粘土や混入物の種類によって7種類にグルーピングした。土器の系統によって特徴が認められたため、各説で説明を加えた。

- ① 白色粒子を多く含む
- ② 半透明な石英を多量に含む
- ③ 粘土精良。粗砂が混じる。鉱物少ない
- ④ 雲母を多量に含む
- ⑤ 石英を多く含む
- ⑥ 角閃石を多く含む
- ⑦ 白色粒子を少し含む。鉱物少ない

備考 炭化物やススの付着、赤彩の有無などを明記した。

4) 各 説

縄文時代中期初頭～前葉

集落が営まれた時期で多くの土器が出土した。遺構及び遺構周辺から多数の遺物が出土したが、確実に遺構に伴ったと判断できる土器は前節でも述べたように非常に少ない。竪穴住居の埋甕炉・埋甕、単独の埋甕炉のみである。竪穴住居の覆土から出土した可能性のある遺物を抽出してみたが、層位的に見ると、時期的にかなりの混在が見られ、遺構別に遺物を抽出することは断念した。したがって、上記埋甕炉など以外はすべて包含層出土土器として、系統別に分類し、遺物No.の下に出土地点と層位を明記した。

道灌遺跡は越後と信州の国境付近に位置するため、両者の土器、また両者の影響を受けた土器などが多く見られた。中期初頭～前葉の越後は北陸の影響が強く、新保・新崎式土器が多くを占める。上州からは関東の影響を受け、五領ヶ台式・阿玉台式土器が少量出土する。信州からも影響を受け、深沢遺跡第2類土器などが上・中越地方で確認されている〔高橋1989〕。こうした環境にあって、道灌遺跡も、出土量の多寡はあっても北陸・関東・信州の影響を受けた土器によって構成されている。以下、系統別に細分し、遺構に伴った土器と包含層出土の土器をまとめ、系統別に説明する。

I 群（北陸系）

北陸の新保・新崎式土器に対比される土器とこれらの影響を受け、在地で変容した土器がある。胴部の地文に用いられる縄文は横位施文が主流である。新保・新崎式土器に対比される土器は胎土に半透明な石

英を含む胎土②が多く見られ、在地で変容した土器には、上越地方に特徴的な白色粒子を多量に含む胎土①が多い。胎土②は搬入品の可能性がある。

1類 新保式土器に対比されるもの (14~17)

a (14~15) 脊部中央がわずかに張り出す筒形の胴部にキャリバー形の口縁部が付く器形である。平口縁に何単位かの小突起が付く。口縁部・頸部・胴部に横位の2~3本の半隆起線文が巡る。口縁外端部には連続爪形文が施される。キャリバー形の口縁部には縄文施文後、縦位の集合沈線が施される。胴部上半部には縦位の集合半隆起線文が施される。14には口縁部に繼ぎ手文状の隆帶が見られる。いずれもキャリバー形の器形が現れる新保式のⅡ・Ⅲ期〔加藤1986〕に併行する。

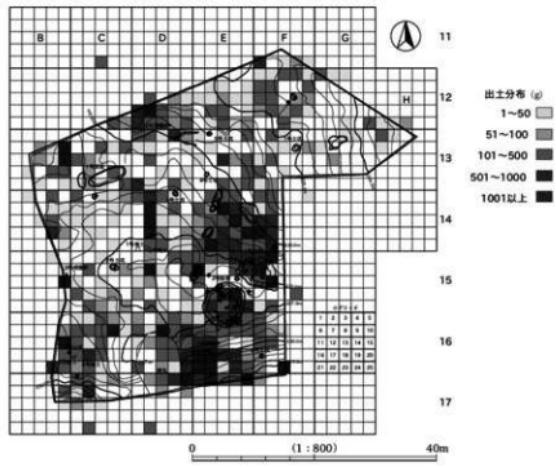
b (16~17) 口縁部が直立または外反する円筒形を呈する器形のものである。16・17は三角形印刻技法による蓮華文が施される。16は横位平行半隆起線と幅狭な横位の無文帯が蓮華文の間に配される。17も同様の文様モチーフを持つが、半隆起線で描かれ肉彫り的である。口縁部の小突起から垂下する隆帶上には連続爪形文が施される。

15~17は胎土②である。

2類 新崎式土器に対比されるもの (13・18~28)

口縁外端部に連続爪形文が施され、口縁部は横区画が主、胴部は縦区画が主となる。口縁部は横位の平行半隆起線や横位の幅狭な無文帯、胴部は縄文を横方向に施文した後、半截竹管による半隆起線によつてB字状文などが施される。内面に縦方向のていねいなナゲが施されるものが多い。新崎式をⅠ期とⅡ期に分けるメルクマールとされているのは、横位無文帯の上下端に施される楔形刻目文の有無である〔山田1986〕。楔形刻目文の見られる25・26などはⅡ期と考えられる。

a (20・22) 口縁部がややキャリバー形を呈するもの。22の胴部には複節斜縄文RLRが縦位施文される。



第11図 繩文時代中期初頭～前栗土器出土分布

b (13・18・19・21・26) 口縁部がゆるく外反するもの。胴部は筒形で少しふくらむもの(13・26)と比較的直に立ち上がるるもの(18・19)がある。13は3号埋甕炉の炉体上器である。熱を受け、非常に多い。口縁部上半を欠いているが、口縁部下半は横区画の無文帯や横位の平行半隆起線が施される。頸部に小突起状の隆帯が付く。胴部は繩文施文後、縦方向の半隆起線によって区画され、区画内は細沈線によって格子目が描かれる。13と同様な文様構成をとるものに19・21・26などがある。26は口縁部から縦位の帶状の無文帯が底部まで下ろされる。また、口縁外端部のみでなく、口縁部の横位の半隆起線上にも連続爪形文が施されている。横位無文帯の縁には楔形刻目文が入る。18は口縁部に鋸歯状の小突起がめぐる波状口縁である。小突起には内外面に輪状の貼り付けが見られる。隆帶上には連続爪形文が施される。口縁部の無文帯には三角形の印刻文が施される。胴部には新崎式土器の主要モチーフである沈線による細かい格子目文が見られる。

c (23～25・27) 胴部のみのもの。bの胴部と器形は同じである。筒形で少しふくらむもの(27)と比較的直に立ち上がるもの(23～25)がある。23・27は繩文施文後半隆起線によって縦方向に施文する。24・25は繩文施文後、半隆起線によって区画し、区画内は細沈線による格子目文を施す。

d (28) 浅鉢。新崎式に伴うものと考えられる。平口縁で胴部が「く」の字状に屈曲する。口縁部には連続爪形文を施した2条の平行半隆起線が巡る。

3類 北陸的な在地土器 (29～38)

a (29) 直立する口縁部を持つ深鉢である。口縁外端部に縄文が施される。口縁部文様は半截竹管による半隆起線によって雷文風の方形の螺旋状文が描かれる。新保・新崎式土器の範疇には入らないと考えられるが、半截竹管を用いていることから、北陸的な要素が強いと考えられる。

b (30～32) 胴部は縦方向に区画され、平行半隆起線によって縦位の雷文風の方形の螺旋状文や無文帯には楔形刻目文が施される。こうした文様構成に類似したもののが、吉川町長峰遺跡〔関・本間ほか1984〕や中郷村南田遺跡に見られる〔南田遺跡発掘調査団1988〕。30は口縁部が外反し、口縁外端部に連続爪形文が施される。胴部は筒形である。31・32は胴部が大きく張り出す器形である。胴部文様が縦区画であること、半截竹管を多用することなどから北陸的な要素が強いと考えられる。無文帯に楔形刻目文が見られることから新崎式のⅡ期に併行すると考えられる。

c (33～35) 33は平口縁に小突起が付き、口縁部がわずかに外反する筒形の胴部を持つ深鉢である。口縁部は横区画、胴部は縦区画の文様が施文される。小突起から延びる隆帶は斜位に施される。口縁部は横位平行半隆起線や幅狭な無文帯、沈線による刻印蓮華文によって施文される。無文帯周囲には楔形刻目文が施され、無文部には波状沈線が引かれる。胴部には半隆起線によって区画された中に細沈線による格子目文が施文される。文様構成は新崎式土器に類似するが、斜位の隆帶など他要素が入り、在地化したものと考えられる。34も33と類似した器形・文様構成をとる深鉢である。35も文様構成は類似するが、口縁部は内湾し、施文方法が簡略化されている。33・34の類例は長野県中野市姥ヶ沢遺跡に見られる〔金井ほか1983〕。34・35は胎土に雲母・石英などを多量に含む中部高地系の胎土である。33～35は、無文帯に楔形刻目文が見られることから新崎式のⅡ期に併行すると考えられる。

d 浅鉢 (36～38) 37・38はかなり大きな径を持つ浅鉢である。径の復元はできなかった。37は板状の底部を特徴とする。横位の半隆起線から集合半隆起線が縦位に引かれ、この縦位の半隆起線を斜行沈線が切っている。底部付近は無文である。38は口縁部に内屈する突起が付く浅鉢である。突起の外側に細い沈線による格子目文が引かれる。口縁部には横位の平行半隆起線が施される。胴部上半部は縦

位の集合半隆起線が引かれ、横位の沈線がこれを切っている。胸下半部は無文である。36も浅鉢の可能性がある。口縁部の突起部分で、上から見るとハート形を呈する。外面は細い沈線による斜格子目文。垂下する隆帶には連続爪形文が施される。37・38は施文方法が類似している。36と38も口縁部の施文方法が似ている。半截竹管による半隆起線の多用など北陸的な技法によっていると考えたが、類例が確認できなかった。

II 群（関東系）

胎土は上越地方に特徴的な白色粒子を多量に含む胎土①と少量含む⑦が多い。石英と雲母を含む胎土⑤の41と雲母を多量に含む胎土④の48は特異で、搬入品の可能性がある。

1類 五領ヶ台式土器に対比されるもの（39～50）

口縁部がわずかに外反する筒形の深鉢が多い。平口縁（39・40・43）、波状口縁（41・48・49）、突起を持つもの（44・46・47）などがある。口縁外端部または内端部を肥厚させるものや折り返すものが多い。43・44のような口径10cm前後の小型のものもある。文様は刺突文（39）、交互刺突文（40・41・44）などが主要モチーフとなる。41は地文に縄文を施した後、横位平行沈線と交互刺突文を施している。42も縄文施文後、逆U字状モチーフや三角形印刻文が施される。43も縄文施文後、半隆起線によって蔽手状文や縱位鋸歯状文が描かれる。46・47は口縁部の突起で、46は幅広の隆帶で蔽手状の文様が、47は人面に似たハート形の隆帶が施されている。49は三角形状の小突起による波状口縁である。口縁部でわずかに外反する。口縁部は有節沈線によって螺旋状の文様が描かれる。交互刺突も見られる。口唇部には深い沈線と連続刻目文が施文される。50は深鉢の胸部で幅広の薄い隆帶によってY字状文が描かれる。両脇には2条の有節沈線が沿っている。地文は無節斜縫文Lである。内面は縱方向のナデがていねいに施されている。39～47・49・50は五領ヶ台II式に併行すると思われる。

48は筒形の胸部に口縁部が外反し、波状口縁を描く器形である。頸部に横位隆帶が走り、口縁部と胸部を区画する。口縁部には縄文RLが横位に施文され、胸部は縱位に施文される。口縁部や頸部の隆帶脇には三角形印刻文が施される。五領ヶ台式直後型式に対比される。

2類 阿玉台式土器に対比されるもの（51）

口縁は波状を呈し、幅狭な口縁部はわずかに外反する。胸部はふくらみ、樽形に近い器形と考えられる。口縁部は断面三角形の隆帶によって区画され、区画内は有節沈線によって文様が描かれる。胸部には指頭圧痕文が施文される。阿玉台I b式土器に対比される。

III 群（中部高地系）

I群の北陸系の胸部の地文が、縄文の横位施文が多かった事に比べ、中部高地系の深沢遺跡第2類土器の胸部の地文は縄文の縱位施文が多く見られる。1類の深沢遺跡第2・3類土器は、白色粒子を含む胎土①・⑦と石英・雲母を含む胎土④・⑤のものが半々位の割合である。2類の指頭圧痕文土器や3類の仮称後沖式土器は白色粒子を含む胎土①・⑦がほとんどである。

1類

a 深沢遺跡第2類土器（7・52～66） 長野県飯山市深沢遺跡出土の土器を標式資料とし、北信から上越地方・信濃川上流域にかけての狭い範囲に分布する。“仮称深沢式土器”として、型式設定が示唆された〔高橋1989〕。北陸の新崎式や中部高地の要素が融合・変容し、成立した土器ととらえられている

〔寺内 2003〕。

胴部がふくらみ、頸部でくびれ、外方に開き口縁部で直立する器形（52・55・59）と胴部が直立し口縁部でわずかに外反する器形（53・54・56・57・60・61）がある。残りの良い52・53の文様構成は第2類土器の特徴をよく示している。52は口縁に2対称の溝巻状の突起が付く。横位の隆帶によって口縁部・頸部の文様が区画される。口縁部上半部の文様帶には縱位の集合半隆起線が引かれる。口縁部下半は胴部の地文と同じ、縄文結束第1種の左右撲り合わせが縱位に施され、羽状を呈する。頸部は無文帶である。胴部には隆帶をつなげた垂ぎ手文が垂下し、両脇には半隆起線が沿っている。このほか、溝巻きやクランク状の半隆起線が施文される。53は入り字状の波頂部を持つ波状口縁である。52と類似した文様構成を持つが、若干異なる部分もある。口縁部の縱位集合沈線は1本引きである。口縁部に縄文帶はない。頸部から垂下する隆帶の垂ぎ手文は脇に半隆起線は伴わない。口縁部や胴部の横位文様部には交互刺突文が施される。胴部の地文は縄文の縱位施文である。以下の54～66はこうした文様構成の一部を持っている第2類土器である。以下特徴的なものの報告する。54は口縁部の集合半隆起線が縱位ではなく、斜めに施される。口縁外端部には縄文RLが施文される。55・59は半隆起線と縄文の境に連続刺突文が施される。62・63は同一個体である。7・63～66は縄文を地文にした半隆起線を多用する胴部で、第2類土器の胴部である。

b 深沢遺跡第3類土器（67～70） 第2類土器より後出とされている〔寺内 2003〕。縄文を用いず、半隆起線・隆帶が器面を覆うようになる。隆帶も太く、断面が突出する。口縁の突起も太い隆帶が使われるようになる。68a・bは同一個体の口縁部と胴部である。口縁部の縱位沈線や頸部無文帶など第2類土器の文様構成と類似するが、先に述べた変化が見られ、第3類土器の範疇である。

2類 指頭圧痕文土器（1・12・71～77）

指頭圧痕文を持つ土器は、東北から中部にかけて広い範囲に分布する。関東の阿玉台式に類似しているが、中部高地の東信地域を経由して、上越地方へ入ったとする考え方〔寺内前掲〕もあり、仮称後沖式土器と文様構成も似ることから中部高地系の田群に置いた。口径の大きな樽型の器形（71）と筒形の胴部に口縁部が外反する器形（73・76）、頸部がすぼまる樽型の器形（77）などがある。何らかの工具を連続して押し付け、器面全体に指頭圧痕の凹凸を作り出している。文様は薄く、幅広な隆帶によって樽円区画や溝巻きが描かれる（1・71～73・77）。指頭圧痕文のみのものもある（76）。71は口縁が折り返され、口唇部は広い平坦面になっている。71a・bは同一個体である。口縁部には藤手状などの太い隆帶文が施される。74・75は口縁外端部が肥厚して、無文帶になっている。

3類 仮称後沖式土器（78～85）

千曲川上流域（東信地域）を中心を持ち、型式設定が提案されている土器群である〔寺内 1996・2002〕。器形は筒形の胴部から外反する口縁部にかけてラッパ状に開き、平口縁または小波状口縁を呈する。文様は隆帶による幅狭の樽円形区画と区画文を貫く形で懸垂文が配置される。幅狭な樽円形区画の中には78・85のような一本描き沈線による縱位集合沈線や81・83に見られるような波状沈線、80のような刺突文などが施文される。東信地域では樽円形区画の中に施文される集合沈線は斜行するものが多く、斜行沈線文系土器とも呼ばれているが、道灌遺跡では斜行のものより縱位のものが多く見られる。

4類 有孔鈎付土器（86・87）

86は樽型の器形を持つと考えられる。外面は黒色で彩色され、内面は赤彩の痕跡が残っている。胴部上半部に横位隆帶とここから垂下する隆帶が見られる。器形と内外面の彩色から有孔鈎付土器と考えられ

る。外面に炭化物の付着が見られる。87は肩の張り出す樽型の器形で、頸部に平行半隆起線が横位に走る。胴部には縄文が施文される。87も器形から有孔釦付土器の可能性がある。

5類 縦方向のナデが施された後、鉤の手状の隆帯を垂下させるもの（9）

9は2号埋甕炉の炉体土器で、口縁部と底部を欠いている。胴部全体にヘラ状工具によるいねいな縦方向のナデが施されている。その後、口縁部から垂下する鉤の手状の隆帯が貼り付けられている。隆帯は断面三角形で、3単位である。長野県岡谷市船塚遺跡11号住居に類例があり、五領ヶ台II式土器を伴っている〔三上・上田1995〕。

6類 中部高地系と思われるが類例が不明なもの（8・11）

8は1号埋甕炉の炉体土器で、口縁部と底部を欠いている。器面全体に縄文が横位施文され、継ぎ手文風の隆帯が何単位か施され、隆帶上には連続爪形文が施文される。蔽手・B字状などの半隆起線が縦方向に施文されるほか、波状沈線なども施される。11は2号埋甕炉内から出土したものである。蔽手状の隆帶文とその周囲に渦巻状の沈線文や刺突文などが施されている。渦巻状の沈線文は、五領ヶ台式直後型式の可能性もある。

IV群 沈線文を主体とする土器（88～91）

いずれも底部のみである。88は垂下する1本の隆帯があり、周間に非対称の文様が描かれる。半截竹管による沈線文や連続爪形文が施文される。89・91は縦位の沈線が底部まで施文されている。91は底面に網代の痕跡が残っている。90も稚な細沈線で、縦位の3本沈線を中心にして斜行沈線が対称的に施文される。

V群 縄文を主体とする土器

1類（3・4・6・10・92～108）

縄文のみで施文される土器も一定量見られた。折り返し口縁、または口縁外端部や内端部を肥厚させ折り返したように見せるものが多い。外面の縄文施文の方向は口縁部の肥厚部分を横位、胴部を縦位に転がすものが多い。これは、五領ヶ台式併行期に東関東で分布するといわれた下小野式に類似している。下小野式は口縁部に装饰的な文様が少なく、縄文施文のみの土器が主体であったことから、現在は東関東の五領ヶ台式土器の一部を構成するものとされている。92～98の折り返し口縁状の土器も中期初頭～前葉の時期と考えられる。器形はさまざまである。口縁部はほぼ直に立ち上がる（92・94・96・97・101・102）や大きく外反する（100）、屈曲する（99）、わずかに内湾する（106）などが見られる。105のように長脣を呈するものも見られる。長脣のものは下小野貝塚に近い千葉県八日市場市八辺貝塚などに多く見られる〔上守1995〕。県内では堀之内町清水上遺跡の中期初頭の集落跡3から長脣の深鉢が出土している〔寺崎ほか1996〕。縄文はRLが多く、縦位方向に転がすものが多い。横位や斜位も見られる。65・66は、同一原体を異方向に施文している。結節縄文（92・97）や縄文LRの結束第1種（99）なども見られる。結合第1種は深沢遺跡第2類土器の52にも見られる。98は縄文RLに2本の0段のZをZ巻に付加したものと考えられる。104も口縁部に隆帯による突起を持つ折り返し口縁と見られる。

2類（2）

2号住居埋甕炉の炉体土器である。筒型の胴部に外反する口縁部が付く。縄文地文を主体とするが、頸部に横位の平行半隆起線が施される。口縁部には垂下する隆帯が施文される。縄文はLRの横位施文であ

る。岩原I遺跡に類例がある〔北村ほか1990〕。

VI群 無文を主体とする土器 (5・109~114)

底部が多いため、本来全面が無文なのかどうかわからないものが多い。109は口縁に粘土紐を横位に貼り付けた小さな突起がいくつか付くものである。これ以外は無文である。

VII群 系統不明 (115~121)

中期初頭～前葉の土器ととえられるが、型式や系統が不明なものを一括した。115は浅鉢の可能性がある。平口縁で装飾性の高い口縁部である。口縁外端部には連続爪形文が施文される。輪状の隆帯から弧状を描く隆帯が2本対称的に垂下し、隆帯に沿って連続爪形文が施文される。施文は半截竹管によっている。地文はLRLの複節斜繩文で横位に施文されている。116は内湾する口縁部で鉤の手状の隆帯が区画する文様を持つ。区画内には1本描きの沈線が引かれている。117は外に向かって開く口縁部である。横位の途切れた平行沈線と波状沈線が施文されている。118は耳状の把手が付く浅鉢である。把手中心に穿孔が見られる。体部には沈線文が見られる。内外面に赤彩の痕跡が残る。119も浅鉢の可能性がある。内湾する口縁部である。横位沈線と浅い連続爪形文が施文される。120は内湾する口縁部である。横位の半隆起線文とその間に横ハの字状の沈線文が施文される。隆帯を2本束ねた小突起が付く。胴部は繩文が施文される。121は平口縁の深鉢である。口縁外端部に横位繩文、その下に横位平行半隆起線が引かれ、胴部は繩文の縦位施文になる。半隆起線と繩文の境には半截竹管による連続刺突文が施される。

その他の繩文土器

中期初頭～前葉以外の繩文土器については、胎土のグループ分けは行わなかった。混入物については観察表に記載し、特徴的なものは文章中でも記載した。

早期 (122・123)

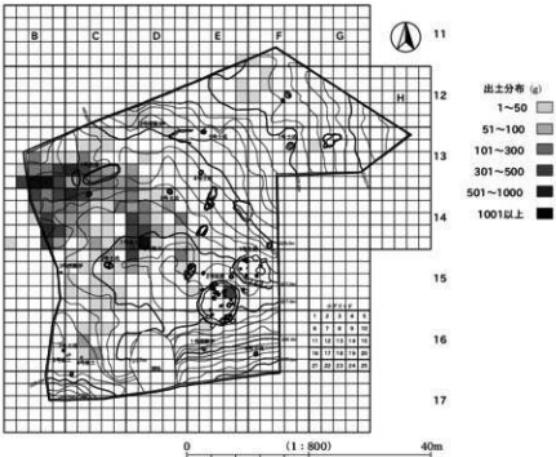
早期前葉の押型文土器である。横位の山形文が帶状に施文される。中部高地の橿沢式の段階と考えられる。胎土は精良で、白色粒子を含む。2点の出土があり、13G3グリッドから出土している。

前期 (124~129)

繩文が器面全体に施文されるものがほとんどである。出土数が少ないため、はつきりしないが、前期前葉が主体と考えられる。124は口唇部が平坦に作り出され、口縁部に内面からの穿孔がある。125は波状口縁である。126は口唇部が平坦で繩文施文されている。体部には繩文結束第1種左右撲り合せが横位施文され、羽状を呈する。127~129は繊維の混入が見られる。前期の土器は16Dグリッドを中心に出土が見られた。16E・17Dグリッドからも若干出土している。

中期 (130)

口縁部は厚く、波状を呈する。口縁外端部は無文で、横位の深い沈線によって胴部と区画される。胴部は繩文LRが横位に施文される。中期と考えられるが、細かい時期は不明である。



第12図 平安時代土器出土分布

後 晚 期 (131~136)

131は口縁外端部に眼鏡状の突起が付けられた直立する口縁部である。口縁はわずかに波状を描く。白色粒子を多量に含んでいる。後末期から晩期初頭にかけての時期と考えられる。132は胴部がふくらむ器形と考えられる。頸部に部分的に盛り上がる横位の隆帯が付く。口縁近くに外面からの穿孔がある。外面には赤彩の痕跡が残る。後期から晩期にかけてのものである可能性がある。133は浅鉢の胴部で太い沈線による磨消繩文が施文される。134は深鉢の口縁部である。頸部でくびれ、胴部が若干ふくらむ器形である。135は浅鉢の底部である。内外面にていねいな調整が行われている。内面に赤彩の痕跡がある。136も鉢の底部と考えられる。残存部は無文で、外面には黒色、内面には赤彩の痕跡がある。133~136は晩期の土器と考えられる。134は晩期後葉の時期である。後晩期の土器は遺跡全体からバラバラと出土した。

時 代 不 明 (137)

土師器の壺の口縁部と考えられる。口縁部はわずかに外反する。外面は縱方向、内面は横方向のハケメの痕跡が残っている。古墳時代頃から古代にかけての可能性があるが、明確な時代は不明である。

平 安 時 代 (138~177)

平安時代の土師器・須恵器は1号炭窯の周辺、13・14B~Dグリッドに集中が見られる。食膳具の土師器・黒色土器の椀・皿類、貯蔵具の須恵器の壺・壺、煮炊具の土師器の壺・小壺・鍋などが出土した。須恵器は特徴的な胎土から佐渡小泊産がほとんどと考えられる。10世紀の前半頃の一括遺物と考えられる〔坂井ほか1984〕。

遺物は少量で大規模な集落などに伴う量ではない。しかし、遺物は狭い範囲に集中し、主要な器種はそろっているため、確認できなかったが掘立柱建物などの造構に伴っていた可能性がある。遺物集中地点で検出された炭窯は10世紀代と考えられ、遺物の年代の頃に操業された可能性もある。

開発の進んだ多摩丘陵の面的な発掘調査によって、「古代末期の多摩丘陵に見られる集落跡は1～数軒を単位とする小規模な集落で、丘陵内の各地に点在する在り方が一般的である」という見解が示されている[鶴間1986]。こうした集落は畑作経営を基盤とし、生産性の低さを補うため丘陵地形を生かした窯業や牧の経営など存立形態の多様性が見られるという。道灌遺跡の古代の遺物の出土の傾向もこうした小規模集落のあり方を示している可能性がある。

147と148の黒色土器の無台椀は合わせ口状態で15E19グリッドから出土した(写真図版29)。平安時代の遺物集中範囲から少し距離を置いた最も標高の高い地点から出土している。何らかの呪術的な意味を持っていた可能性がある。調査時に内部の土のリン酸分析等を行ったが検出されなかった。

食膳具

土師器無台椀はほとんどである。須恵器の杯は出土しなかった。

土師器無台椀・皿(138～150)

無台椀は口径が12～13cm、器高3～4cmのものと口径14～16cmで器高4～5cmの2種類に大きく分けられる。口縁部はわずかに外反するものとしないものがある。器壁の薄いものと比較的厚いものがある。底部は糸切りのままで無調整のものが多い。145・147～150は黒色土器である。内面が黒色処理され、ヘラミガキが施される。138は口径12cm、器高2cmの浅身の皿でこれ1点のみである。

有台椀(151・152)

2点とも黒色土器である。内面が黒色処理され、ヘラミガキが施される。151は無台椀に比べて腰が張る深身の器形である。

貯蔵具

須恵器長頸瓶(153)

長頸瓶の口縁部である。ラッパ状に開いたのち端部で外反し、外側に広い面を持つ。頸部はかなり太くなる。

須恵器甕(154～159)

大甕の口縁部・体部の破片である。印目は粗い格子目や同心円、平行などがある。器形を復元できるものはなかった。

煮炊具

土師器長胴甕(160～172)

比較的多くの出土があった。口縁部は大きく屈曲せず、端部は丸くなる。カキメの痕跡が残る。170～172のように体部に印目が見られるものもある。

土師器鍋(173)

鍋は1点のみの出土であった。口径の復元はできなかった。口縁部は直線的に開き、端部は外方につまりれている。体部上半はクロナデ調整である。

土師器小甕 (174~177)

174・175は口縁部から体部で、174は口径7.0cm、175は口径11.0cmである。短く開く口縁部を持ち、肩部にわずかな稜を持つ。内外面ともロクロナデである。ともに炭化物の付着が見られる。176・177は小甕の底部で、糸切り無調整である。

B 土 製 品

土製品は繩文時代の上偶1点のみであった。

1) 土 偶 (178)

中空土偶の右脚部である。脚部中央でわずかにすぼまり、底部で張り出す形である。特に人体のつま先を意識してか、底部の前面が若干先細り状態を示している。脚部底部の径は5.1cm、残存高は約6cmで、復元される土偶はかなり大きなものである。外面は先細りの棒状工具による沈線によって縦位・横位の平行沈線や麻手状の文様が施文される。内面には1~2cmの粘土紐を積み上げた痕跡が残っている。底面は中空部分を除いて平坦に整形され、擦れたような痕跡がある。立位で置かれたものと考えられる。IV群沈線文を主体とした土器の48に類似した文様構成をとる。胎土には白色粒子や粗砂を多く含み、在地のものと考えられる。

C 石 器

出土した石器は第3表のとおり、11器種・164点、磨製石斧失敗品4点、剥片類60点、石核1点、総計229点である。このほか、明らかに搬入されたと考えられる蹤¹⁾が91点である。そのほとんどが遺構外からの出土である。これは遺構の掘り込みが浅く、住居跡・炉跡などの遺構の覆土と包含層の区別がつかなかったためと考えられる。

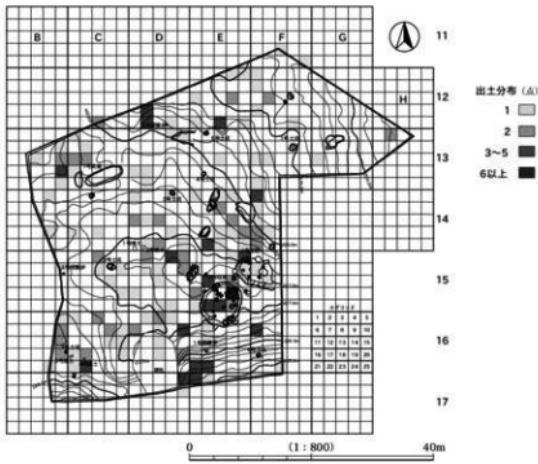
調査区内における石器の出土分布傾向は、遺構や土器の分布とほぼ一致し、調査区東部を除いた12~17・B~Fグリッドの範囲に多い。この範囲内には住居跡・炉跡・焼土など集落を構成する主要な遺構が多く分布する。搬入蹤の分布も石器の出土分布とほぼ一致する。

伴出土器の時期は、中期初頭~前葉が主体を占めるものの、早期前葉(押型文土器期)、前期前半、後晚期、古代の上師器・須恵器の多時期にわたる。したがって、出土数は多くないものの、器種数は多い。これらの石器は伴出土器と同様、多くは中期初頭~前葉に所属するものと考えられる。器種別出土数を見ると、敲磨石類が極めて多く出土し、石器器種の中ではほぼ半数の比率を示す。このほか打製石斧・磨製石斧も多く出土している。不定形石器・砥石も一定量の出土が認められ、これ以外は出土数が少ない。また、

| 器種名 | 石錐 | 石鏡 | 両刃鋸状器のある石器 | 不規形石器 | 打製石斧 | 磨製石斧 | 敲磨石類 | 石核 | 石錐 | 三面形石器 | 縫曲状の光沢を有する石器 | 小片 | 磨製石斧失敗品 | 夷石類 | 石核合計 | 石錐合計 | 石錐 | 石核合計 | 搬入 | |
|--------|-----|-----|------------|-------|------|------|------|-----|-----|-------|--------------|------|---------|-----|------|------|----|------|----|----|
| 出土数(点) | 3 | 2 | 4 | 13 | 29 | 16 | 78 | 11 | 4 | 1 | 3 | 164 | 4 | 60 | 1 | 229 | 1 | 2 | 3 | 91 |
| 百分率(%) | 1.8 | 1.2 | 2.4 | 7.9 | 17.7 | 9.8 | 47.6 | 6.7 | 2.4 | 0.6 | 1.8 | 99.9 | - | - | - | - | - | - | - | |

第3表 器種別石器・石製品・搬入蹤出土数

1) 本遺跡は矢代川岩屑なだれ堆積物上に立地するため、亜角礫や円礫などの川原石はすべて搬入蹤と判断できる。



第13図 石器出土分布

通常、不定形石器は縄文遺跡では極めて多く出土することに比べると少なく、剥片類・石核の少なさも同様であり、剥片石器の貧弱さが目立つ。

以下、器種ごとに特徴的な事柄について説明する。

1) 石 鐸 (179~181)

尖頭状の狩猟具の一つで尖頭部・側縁部・基部(脚部)が作り出され、左右ほぼ対称形のものを石鎌とした。3点出土している。179は基部の大きな抉り、幅広な脚部が特徴的な「鍊形鎌」である。正裏面の中央部の一部が磨かれ、ていねいに作られている。押型文土器期に伴う指標的な石鎌である〔鈴木1981〕。180はていねいなつくりの長身の凹基無茎鎌である。181は平基鎌で基部にアスファルトが付着している。アスファルトの付着から後期以降に所属するものと推定される〔安孫子1982〕。石材は179・180が黒曜石、181がメノウ製。

2) 石 匙 (182・183)

抉りのあるつまみと刃部を有する剥片石器である。2点出土している。いずれも横長剥片の打面側の一部に二次調整を加え、つまみ部を作り出している。底縁を刃部とし、二次調整により直線状の刃部に仕上げられている。側縁形状は182は片側、183は両側が尖頭気味に仕上げられている。石材は182が黒色緻密安山岩、183が頁岩製。

3) 両極剝離痕のある石器 (184~187)

4点出土している。2個1対の作業部を持つもの3点(184・185・187)、4個2対の作業部を持つもの1点(186)である。出土数が少なく、調査区南東部の15~16・E~Fに散漫に分布する。石材は黒色

緻密安山岩2点(185・186)、鉄石英1点(184)、チャート1点(187)である。

4) 不定形石器(188~194)

剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕が認められる不定形な石器である。13点出土している。刃部に不連続剥離を持つもの3点(188・191・194)、使用的結果の摩耗や光沢が認められるもの3点(189・193)、鋸歯状の剥離を持つもの2点(192)、抉入状の刃部を持つもの1点(190)、浅角度の連続剥離のもの1点、分類できないもの3点である。出土点数が少ないため散漫に分布している。石材は黒色緻密安山岩・頁岩各4点、凝灰岩3点、砂岩2点で、在地石材を多く使用している。

5) 打製石斧(195~204)

比較的大型の扁平礫や剥片を素材とし、両面調整により斧状に仕上げた石器である。29点出土している。



第14図 打製石斧分類図

分類 打製石斧は通常、直接打撃の剥離によって製作されるが、本遺跡では中郷村前原遺跡〔小田ほか2004〕と同じように剥離調整後に研磨や敲打調整が行われ製作されているものが一定量認められた。したがって、製作方法により細分した。

A類(195~199) 側縁の「つぶし」を除き、剥離調整のみで製作しているもの。

B類(200~203) 剥離調整後、正裏面や側縁に研磨調整を行い製作しているもの。

C類(204) 剥離調整後、側縁の「つぶし」を除いた正裏面に敲打調整を行い製作しているもの。

B・C類は打製石斧や磨製石斧の定義と比較すると、研磨や敲打が行われていることから磨製石斧や同未成品に近くなる。しかし、本遺跡で出土する磨製石斧の石材とは全く異なること、研磨・敲打が部分的に磨製石斧のそれとは大いに異なること、打製石斧A類とは石材・剥離調整、また刃部や基部の使用痕(擦痕・摩耗痕)が全く共通することから打製石斧とした。

29点のうち、A類16点、B類6点、C類3点、分類不可4点である。

分布 出土数が少ないため希薄であるが、遺構、土器、ほかの石器の分布とほぼ同じく、調査区東部を除いた12~17・B~Fグリッドの範囲に環状気味に分布する。

石材 頁岩12点、砂岩7点、凝灰岩・粘板岩各4点、角閃石安山岩2点で、在地の堆積岩を多く用いている。

その他 側縁の稜線をつぶしているいわゆる「つぶし」調整が18点(62%)も認められた。研磨や敲打のある石斧とともに、側縁の「つぶし」の多さは本遺跡の打製石斧の特徴として指摘できる。

6) 磨製石斧 (205~212)

16点出土している。すべて定角式磨製石斧で、小型品から大型品まで大きさは様々である。

分類 大きさにより分類した。なお、破損品は完形時の大きさを想定し分類した。

A 類 (205~209) 長さが6cm以上のもの。

B 類 (210~212) 長さが6cm未満でいわゆる「小型磨製石斧」と呼ばれているもの。

16点のうち、A類9点、B類5点、分類不可2点である。なお、分類不可の2点は破片であるものの、石材や研磨状況から磨製石斧と判断できるものである。

分布 遺構、土器、ほかの石器とほぼ同じ分布を示す。出土数が少ないため、調査区東部を除いた12~17・B~Fグリッドの範囲に希薄に分布する。

石材 16点のうち、蛇紋岩11点、砂岩4点、頁岩1点である。本遺跡から約30kmと比較的近い距離にある糸魚川地方に産する蛇紋岩でほぼ占められる。

その他 A類に分類した石斧の基部形状はおおむね幅広く、平面形は短冊状に近いものが多い。石斧の平面形が中期から晩期にかけて短冊状からバチ状への変化が指摘されている〔阿部1987〕。したがって、A類の多くは土器が主体的に出土した中期初頭~前葉に所属するものと推定できる。

なお、205は剥離調整後、極めて広範囲によく研磨された石斧で、形状的には磨製石斧である。しかし、石材・刃部の刃こぼれなどは、打製石斧B類に近似する。

7) 磨製石斧未成品 (213~215)

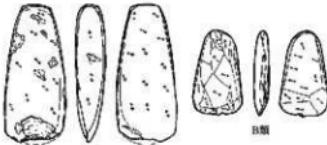
将来的に磨製石斧を作成しようと思図されたが、何らかの理由で断念したものである。213は正裏面、側面はよく研磨されているが、刃部の研ぎ出しが終了していない。214・215は正裏面の研磨、側面の敲打・研磨も不充分で、刃部の研ぎ出しは全くなされていない。図示していない未完成品も研磨が不充分なものである。4点とも敲打調整が不充分なまま研磨されており、磨製石斧の製作方法としては稚拙な感じがうかがえる。すべて蛇紋岩製である。

8) 敲磨石類 (216~240)

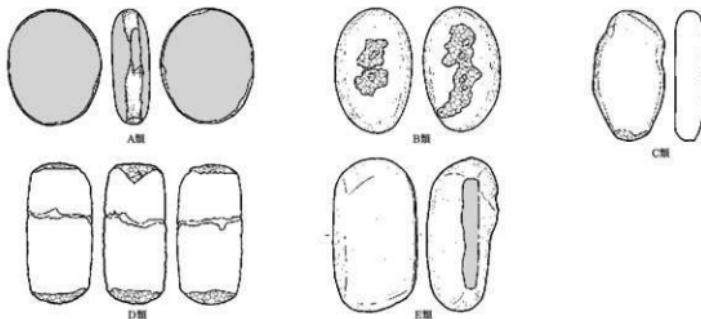
片手ないしは両手を揃えて把持できる大きさの櫛の表面に調整や使用の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められる石器である。凹痕は敲打痕の集中として理解し、敲打痕に含めた。78点出土し、器種石器の中では最も多い。

分類 早期に多出し、いわゆる「特殊磨石」と呼称されている石器〔ハ木1976〕と円柱状に加工されたもの、及び縄文時代の各期に一般的に認められる敲磨石類に分けた。さらに一般的に認められる敲磨石類は使用痕の状況により細分した。なお、特殊磨石と一般的な敲磨石類との区別は〔ハ木前掲；神村1999〕に従った。

A 類 (216~221) 縄文時代の各期に一般的に認められる敲磨石類のうち、正裏面のいざれかに磨痕が認められるものである。図示した6点はすべて正裏面に磨痕が認められるが、221を除き敲打痕も認められる。さらに側縁に磨痕が見られるもの(221)、側縁に磨痕と敲打痕が見られるもの(219)、端部



第15図 磨製石斧分類図



第16図 敷石類分類図

に敲打痕が見られるもの（216～218）、側縁や端部に使用の痕跡がないもの（220）など、側縁や端部の使用痕の状況は多様である。

B類（222～226） 縄文時代の各期に一般的に認められる敷石類のうち、正裏面のいずれかに敲打痕が認められるものである。図示した5点はすべて正裏面に敲打痕が認められる。さらに端部に敲打痕も見られるもの（222・226）、側縁と端部に敲打痕が見られるもの（224）、側縁や端部に使用の痕跡がないもの（223・225）などがある。なお、A類にも正裏面のいずれかに敲打痕が認められるものが多くあり、A類にはB類を含むものが多く存在する。

C類（227～230） 側縁や端部のいずれかに敲打痕が認められるものである。正裏面・側縁の磨痕、正裏面の敲打痕は認められない。図示した4点には、端部に敲打痕が見られるもの（227・228）、側縁と端部に敲打痕が見られるもの（229・230）がある。なお、A・B類には側縁や端部に敲打痕が認められるものもあり、A・B類にはC類を含むものが多く存在する。

D類（231～236） いわゆる「特殊磨石」と呼称されているものである。長さ10～20cm前後の楕円柱・角柱状の転石の側縁部に磨痕・敲打痕により面をなすもの（以後、「磨・敲打面」とする）である。A～C類に比べやや長く、厚みがあり、重量感がある。断面形状は一般的に橢円形・方形・三角形を呈する。側縁部の磨・敲打面とほかの面には明瞭な稜をなし、稜付近に細かな剥離痕が見られる。側縁部の磨・敲打面のほか、正裏面に磨痕が見られるもの（234・235）、正裏面に敲打痕が見られるもの（232・235）、端部に敲打痕が見られるもの（232・233）がある。

E類（237～239） やや軟質な石材を円柱状に加工し、その端部に敲打痕が認められるもの。円柱状に加工した側面に磨痕が見られる（238・239）ものもある。

78点のうち、A類27点、B類22点、C類13点、D類12点、E類3点、分類不可1点である。分類不可とした240は、敲打と研磨が認められる蛇紋岩である。敲石（多面体？）に使用された後、研磨により何かの石製品に再加工された可能性もある。

分 布 造構、土器、ほかの石器の分布とほぼ同じく、調査区東部を除いた12～17・B～Fグリッドの範囲に環状気味に分布する。

石 材 78点のうち、角閃石安山岩28点、砂岩16点、安山岩10点、凝灰岩6点、頁岩・斑レイ岩各5点、流紋岩3点、輝緑岩・花崗岩・閃緑岩・花崗閃緑岩・蛇紋岩各1点である。粒子の粗い火成岩や堆積

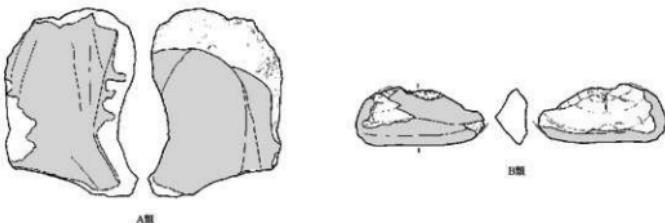
岩が多く使用されている。E類はやや軟質で加工のしやすい角閃石安山岩が使用されている。

その他 D類は本遺跡の早期前葉(押型文土器期)に、E類は晩期に所属するものと考えている。これ以外のA～C類の多くは、土器の主体が中期初頭～前葉であることから該期に所属するものと思われる。

9) 砥 石 (241～248)

主に砂岩などの粒子構造を持つ礫の表面に、使用の結果残された砥面が認められる石器である。11点出土している。石皿に近似するものもあるが、次の相違点により区別される。

石皿に比べ形が不整形なものが多く、砥面も正裏面だけに限らず、側縁部・端部など一定していない。砥面は石皿ほど広くなく、また滑らかさも均質でない。帯状・筋状の砥面が見られるなどである。



第17図 砥石分類図

分類 大きさにより細分した。

A類 (241～244) 広い砥面を持つ大型品であり、置き砥石と推定できる。砥面は正裏面や側面に認められる。244は砥面以外の大部分に敲打成形が認められることから、石棒からの転用品と推定できる。

B類 (245～248) 小型の手持ち砥石である。245・246は側縁が砥面として使用されていることから、玉作り遺跡で多出する内磨き砥石と推定される。

11点のうち、A類5点、B類4点、分類不可2点である。分類不可とした2点は破片である。

分布 出土数が少なく、11～16・B～Fグリッドに散漫に分布する。

石材 11点のうち、砂岩8点で極めて多く、ほかは凝灰岩2点、安山岩1点である。粒子構造を持つ石材が使用されている。

その他 247・248は直方体状を呈し、石材もほかの砥石と全く異なることから近世以降の所産と考えている。

10) 石 盔 (249～252)

扁平な大型の円・橢円形礫の正面または正裏面に、使用の結果と推定される磨面や敲打痕が認められるもの。使用面は磨面の場合、滑らかな平面または緩やかな曲面をなす。また、使用面の滑らかさはほぼ均質、または中心部の滑らかさが強く、周辺は漸次弱くなる。これらの諸特徴から砥石とはほぼ区別される。

4点出土している。249・250は全面加工された石皿である。使用面は良く使われており、周縁に縁が明瞭に形成されている。249は正裏の両面が使用され、250には掃出し口が見られる。いずれもやや軟質で加工しやすい角閃石安山岩を用いている。251・252は無加工の石皿である。使用面の中央部はわずかに窪む。251には磨面のほか、敲打状の凹痕も認められることから、台石としての用途も推定できる。

石材は251が砂岩、252が安山岩製。

11) 三角錐形石器 (253)

1点のみの出土である。底面部（機能部）を欠き、細く尖る先端部が遺存する。厚手の縦長剥片の両側縁・正面にていねいな二次調整が加えられ、裏面はほとんど調整されていない。草創期～早期に出土すると言われていることから、本遺跡の早期前葉（押型文土器期）に伴うものと考えている。凝灰岩製。

12) 石 核 (254)

剥片剥離作業中に何らかの理由により剥離作業を断念した残核、剥片剥離作業終了後の残核である。1点のみの出土である。素材は荒削剥片であり、剥離作業の前段階となる打面調整などは見出せない。周縁から正裏面に交互剥離が行われ、剥片剥離作業が行われている。いずれも得られる剥片は横長剥片と推定できる。黒色緻密安山岩製。

13) 鏡面状の光沢を有する石器 (255～257)

片手で把持できるようなやや小ぶりの川原石の礫面に鏡面状の光沢が認められる石器（礫）である。「鏡面状光沢を有する加工礫」【丹野・原川ほか1999】とも呼称されている。3点出土している。255は裏面に、256は正裏面に、257はほぼ全面に光沢が認められ、255・256には細かな擦痕も見られる。石材は255が頁岩、256が蛇紋岩、257がチャートで硬質で緻密なものを用いている。東京都多摩ニュータウンNo.67遺跡【可児ほか1995】、No.72・785・796遺跡【丹野・原川ほか1999】、県内上川村北野遺跡¹⁾などで類例が見られる。

D 石 製 品

出土した石製品は第3表のとおり、2種類・3点と少ない。中期初頭～前葉が主体の遺跡で、石製品が増加する後期以降の遺構・遺物が少ないからである。すべて包含層出土で、散漫に分布する。

以下、種類ごとに特徴的な事柄について説明する。

1) 石 棒 (258)

1点のみの出土で、大型有頭石棒である。胸部を欠き、頭部側が遺存する。ほぼ全面が敲打により成形され、頭部と胸部が緩く抉られている。砂岩製。244は転用後の砥石としたが、砥面以外はほぼ全面に敲打成形が見られるため、大型石棒からの転用品と考えられる。

2) 玳状耳飾り (259・260)

2点出土している。いずれも平面形が円形の耳飾りである。259は比較的大型で側縁幅（a）：19.9mm、切り目幅（b）：17.2mm、型式率（b/a）：0.86である【藤田1989】。260は小型で、側縁幅：5.5mm、切り目幅：4.5mm、型式率：0.82である。玳状耳飾りの編年【藤田前掲】に合わせれば前期前半の所産と考えられる。いずれも滑石製である。

1) 現在整理中である。平成16年度に報告書刊行予定である。

第IV章 向原遺跡

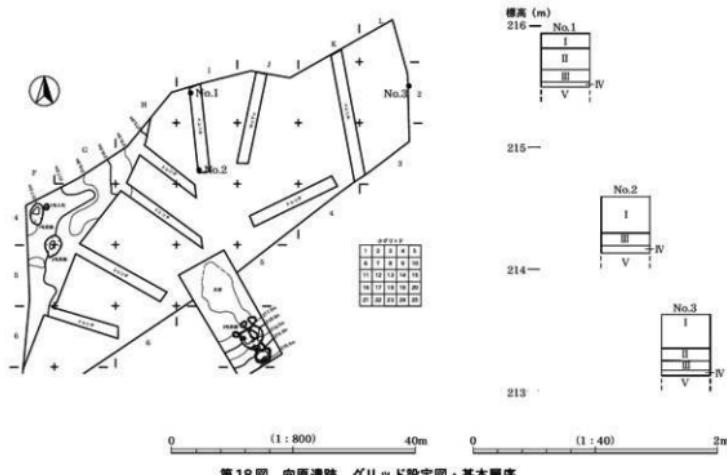
1 調査の概要

A 遺跡の立地と微地形

向原遺跡は道灌遺跡と同じく矢代川右岸の妙高山麓からつながる低い丘陵の先端部分に位置している。丘陵は枝分かれし、幅約1kmと狭い。丘陵の最高地点の標高は243.9mである。周囲の水田部との比高差は約10mである。向原遺跡はこの丘陵の北東の縁に位置し、矢代川に面している。遺跡の存在する地点は丘陵の緩傾斜地で、標高約215m前後である。矢代川に向かって急な崖になっている。平安時代の炭窯と近世以降の炭窯が検出された。遺跡の現況は山林であった。

B グリッドの設定

国家座標を基準にグリッドを設定した。Y軸 ($Y = -25750.000$) を基準線とし、10m方眼を組み大グリッドとした。座標値は、J2杭 ($X = 110700.000, Y = -25750.000$)、J5杭 ($X = 110670.000, Y = -25750.000$)、G5杭 ($X = 110670.000, Y = -25780.000$) である。大グリッドの呼称は調査区の東西方向をアルファベットのF～L、南北方向を算用数字の1～6で区分し、両者の組み合わせにより「3J」のように表示した。さらに大グリッドを2m方眼に分割して、1～25の小グリッドとし、北西隅を起点「1」、南東隅を終点「25」とし、大グリッド表示に続けて「3J20」のように表記した。



第18図 向原遺跡 グリッド設定図・基本層序

2 基本層序

調査区は丘陵の斜面で、全体的に南から北へ緩やかに傾斜している。現況は山林である。南東側の斜面から北西に向けて自然流路と思われる沢が存在し、常に水が湧き出ているという状態である。地形的に均一でないため、場所によって土層の堆積状況が異なっている。地山は矢代川岩屑なだれ堆積物である。

I層：暗褐色土。表土、腐葉物が堆積している。大量の木の根が入り込んでいる。粘性、しまりともに弱い。層厚は10～30cmである。

II層：暗黄褐色土～黒褐色土。多量の根が入り込み、3cm大の礫を少量含む。粘性弱く、しまり強い。層厚は5～10cmである。

III層：暗褐色土。5mm大の礫を含む。黒色土と褐色土が斑に混じっている所もある。粘性、しまりともに強い。層厚は5～10cmである。

IV層：暗褐色土（漸位層）。黒色土と褐色土が斑に混じっている所があり、5mm大の礫を含む。粘性は弱いがしまりは極めて強い。場所によっては存在しないこともある。

V層：黄褐色土。粘性は弱いがしまりは極めて強い。地山。矢代川岩屑なだれ堆積物。

遺物包含層はI層とII層である。一次調査では縄文時代後期の遺物が少量出土した。二次調査でも、縄文土器3点、石器剥片1点が出土したが、細片のため図示しなかった。時期は不明である。

3 遺構

A 概要

向原遺跡では、一次調査の結果で遺構・遺物が希薄であることが予想されたため、調査区内に任意で長いトレンチを設定し、先行してトレンチ調査を行った。この結果、遺物の出土もなく、遺構も一次調査時のもの以外検出できなかつたため、遺構が存在した部分のみ調査を行い、このほかの部分については調査から除外した。遺構は土坑1基、平安時代の炭窯2基、近世以降の石積み窯1基が検出された。

B 遺構各説

1) 土坑

1号土坑（図版6、写真図版29）

4F10・15グリッドに位置する。長径105cm×短径78cmの不整円形を呈する。検出面からの深さ約30cmである。1号炭窯に近接している。

2) 炭窯

1・2号炭窯はいわゆる伏窯であり、平面形が梢円形を呈する炭窯である。炭窯についての説明は第III章3遺構に記した。向原遺跡の炭窯の覆土にも火山灰が含まれ、炭窯の構築年代は平安時代、10世紀頃と位置付けられる。3号炭窯は、築窯製炭法の石積み窯で、近世以降のものと考えられる。

1号炭窯（図版6、写真図版29）

4F9・14グリッドに位置する。長径342cm×202cmの梢円形を呈する。検出面からの深さ約30cm

である。1層が火山灰層である。中層の3層中に炭化物が含まれていた。

2号炭窯 (図版6、写真図版30)

4F25・5F5・4G20・5G1 グリッドに位置する。長径370cm×短径265cmの不整円形を呈する。長軸方向南側に突出部を持っている。やはり、1層に火山灰層が見られた。調査中の所見には炭化物の有無は確認されていないが、形態から炭窯と判断した。

3号炭窯 (図版7、写真図版25・30)

6Jグリッドに位置する。長径380cm、短径315cmの隅丸方形に近い平面形態の石積み窯である。丘陵の斜面に構築されている。奥壁部分の残りは良いが、焚口部分は欠いている。斜面を掘り込んで平坦な床面を造っている。床面の残存部分の規模は長軸300cm、短軸200cmの方形に近いものである。覆土には壁に用いられた石が多量に含まれていた。床面中心部には長径185cm、短径110cm、深さ45cmの石の詰められた長梢円形の土坑が掘られていた。さらに床面全体にも石が敷き詰められていた。防湿のために用いられたものである。奥壁に煙道(排煙口)が設けられていたと思われるが、検出することはできなかった。周囲にはいくつかの土坑が設けられているが、炭焼きの作業に伴うものと考えられる。北西方向、焚口側の土坑には焼土や炭が多量に含まれていた。

こうした石積み窯は近世以降比較的最近まで行われていた炭窯の構造で、遺物を伴わないことから、時代が明確でない。近世以降としておきたい。

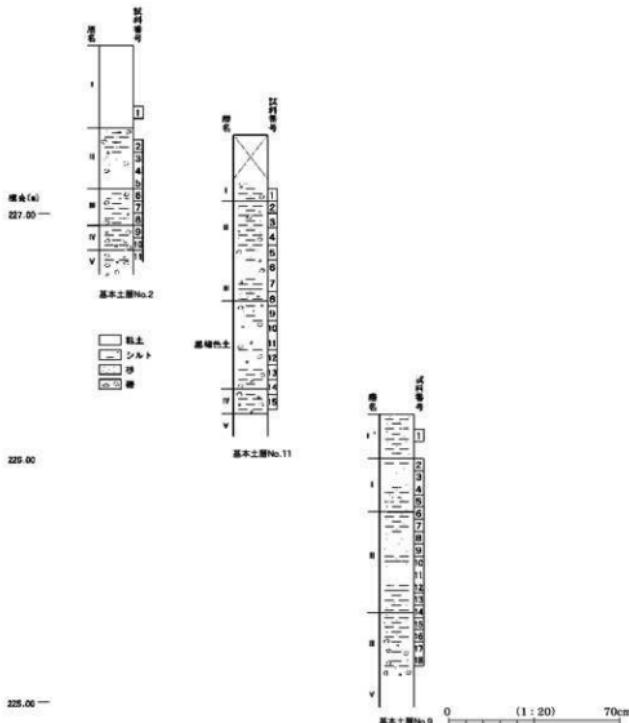
第V章 自然科学分析

1 道灌遺跡のテフラ分析及び層序対比

本遺跡の基本土層の層序対比を行うためにテフラ分析、土壤の理化学成分分析を行う。

A 試 料

本遺跡の土層は、I層～V層に分層されている。I層は暗褐色土、I'層は黒褐色土でともに表土、II層はにぶい黄褐色土、III層はにぶい黄褐色土～黒褐色土、IV層はにぶい黄橙色土の漸移層で礫を多量に含む。V層は明黄褐色土～にぶい赤褐色土の地山で、礫を多量に含む。また、基本層序11（試料採取地点名、



第19図 基本層序及び試料採取位置

以下同じ)付近にのみ認められる土層として、「黒褐色土」がある。I'層は部分的に認められ、II層とIII層は標高の高い狭い平坦部では見分けにくく、IV層が認められない地点もある。V層では、部分的に矢代川岩屑なだれ堆積物(後述)が露出する。遺物はI層～V層まで切れ目なく出土するが、I層、II層が主な包含層である。分析対象とするのは、基本層序2・9・11の計3地点である。3地点で連続的に採取した試料の中から、基本層序2では試料番号3・5・7・9・11、基本層序9では試料番号1・2・4・6・8・10・12・14・16・18、基本層序11では試料番号7・9・11・13・15の計20点を分析試料として選択する。各地点の柱状図と試料採取位置を、第19図に示す(第6図に対応する)。

B 分析方法

試料は、適量を蒸発皿に取り、泥水にした状態で超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂を実体顕微鏡下で観察、スコリア・火山ガラス・軽石の特徴や含まれる量の多少を定性的に調べる。

C 結 果

結果を第4表に示す。火山ガラスはほとんどの試料に少量～微量認められる。認められた火山ガラスは、無色透明及び褐色のバブル型火山ガラス、無色透明の軽石型火山ガラス及び塊状火山ガラスなどである。また、塊状火山ガラスには晶子が入っているものが多い。

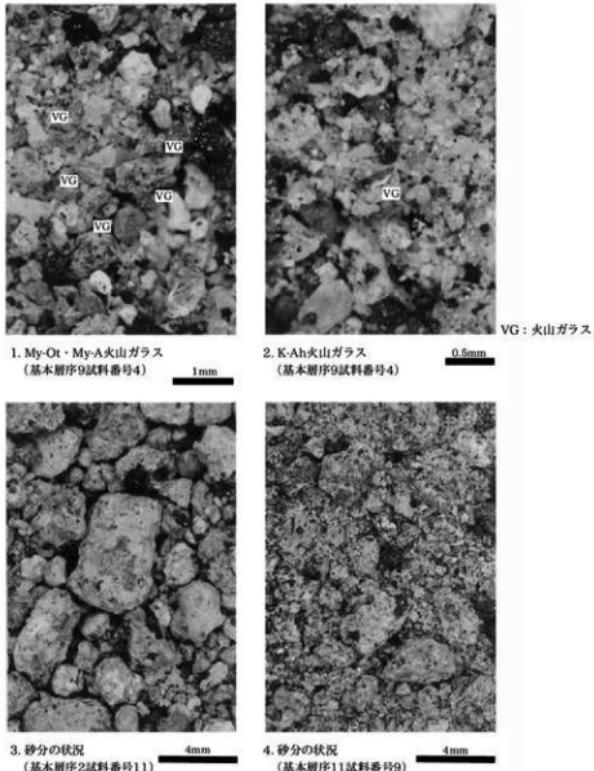
この中で、前者の火山ガラスはその産出層準と形態及び色調により、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah:町田・新井1978)に由来すると考えられる。K-Ahは、九州南方の鬼界カルデラを給源とし、降灰年代は約6,300年前【町田・新井1992】と考えられている。

また、後者の火山ガラスはその産出層準と特徴により、妙高太田切川テフラ(My-Ot:町田・新井1992)及び妙高赤倉テフラ(My-A:町田・新井1992)に由来すると考えられる。My-Ot及びMy-Aは、ともに新妙高火山活動時期第IV期の中央火口丘形成期(約6,000年前から)の火砕流を作った噴火により噴出したテフラで、My-Otの降灰年代は約4,000～4,500年前、My-Aの降灰年代は約5,500～6,000年前と考えられている【町田・新井1992】。

| 地點名 | 層名 | 試料番号 | スコリア | | 火山ガラス | | 軽石 | |
|--------|------|------|------|--------|-------|----|-----------------------|---|
| | | | 量 | 色調・発泡度 | 最大粒径 | 量 | 色調・形態 | 量 |
| 基本層序2 | II | 3 | | | | + | cl>br·bw · cl.pn · ch | - |
| | | 5 | | | | + | clbw · pn · ch | - |
| | III | 7 | | | | + | clbw · ch | - |
| | IV | 9 | | | | + | clbw | - |
| | V | 11 | | | | - | - | - |
| 基本層序9 | I' | 1 | | | | + | clbw · pn · ch | - |
| | | 2 | | | | + | clbw · pn · ch | - |
| | I | 4 | | | | ++ | cl>br·bw · cl.pn · ch | - |
| | | 6 | | | | + | clbw · pn · ch | - |
| | II | 8 | | | | + | clbw · pn · ch | - |
| | | 10 | | | | + | clbw · pn · ch | - |
| | | 12 | | | | + | clbw · pn · ch | - |
| | III | 14 | | | | + | clbw | - |
| | | 16 | | | | + | clbw | - |
| | | 18 | | | | - | - | - |
| 基本層序11 | III | 7 | | | | + | clbw | - |
| | | 9 | | | | + | clbw | - |
| | 黒褐色土 | 11 | | | | + | clbw | - |
| | | 13 | | | | + | clbw | - |
| | IV | 15 | | | | + | cl · bw · ch | - |
| | | 16 | | | | - | - | - |

凡例 - : 含まれない
+ : 開采
++ : 少量
cl : 無色透明
bw : 褐色
pn : バブル型
ch : 塊状ガラス

第4表 テフラ分析結果



第20図 火山ガラス・砂分の状況

D 考 察

本遺跡が立地する尾根には、新妙高火山活動時期第IV期のカルデラ形成期（約17,000年～20,000年前）のカルデラ形成に伴って起きた矢代川岩屑などれ堆積物が分布している〔日本の地質「中部地方I」編集委員会1988〕。これが、本遺跡のV層以下の堆積物と考えられる。今回の分析結果により、V層の上位のI層～IV層及び黒褐色土には、K-Ahに由来するバブル型火山ガラス、My-Ot及びMy-Aに由来する軽石型火山ガラスと塊状火山ガラスが拡散している状況が認められた。したがって、I層～IV層及び「黒褐色土」は、K-Ah降灰以降すなわち約6,300年前以降に堆積したと考えられる。本遺跡は平坦面が狭小な山地斜面に立地するため、一次的に降下したテフラがそのまま保存されずに、風や降雨によりほとんどが流されてしまったと考えられる。また、「黒褐色土」が認められた基本層序11地点付近は、ほかの地点より傾斜が緩いかまたは凹地に当たるなどの地形的な条件が異なるため、腐植が集積した土壤が形成されたと考えら

れる。

引用・参考文献

- 町田 洋・新井房夫 1978 「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰」『第四紀研究』17 p143-163
- 町田 洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』276p 東京大学出版会
- 日本の地質『中部地方I』編集委員会 1988 日本の地質4『中部地方I』332p 共立出版
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 『新版標準土色帖』

2 道灌・向原遺跡の樹種同定

本報告では、道灌遺跡の平安時代の1号炭窯及び向原遺跡の近世以降の所産とされる3号炭窯から出土した炭化材の樹種同定を実施し、燃料材について検証を行うとともに、当時の植生に関する資料を得る。

A 試 料

試料は、道灌遺跡1号炭窯、及び近世以降の所産とされる向原遺跡3号炭窯から出土した炭化材である。道灌遺跡1号炭窯から出土した炭化材は、ビニール4袋に一括保管されていたことから各袋に「1」で1~4の枝番号を付し、肉眼観察を行った後、各袋から5点、計20点を抽出した。一方、向原遺跡3号炭窯から出土した炭化材は、ビニール2袋に保管されていたことから、炭-1、2の枝番号を付した。炭-1中には、径の異なる丸木材、割材、小径の枝状の炭化材が認められたことから、丸木材から径の異なる3点(大・中・小)、割材と枝材?から各1点の計5点を抽出した。炭-2中の炭化材は、すべて丸木材であったが、径の大小を考慮し、径の大きな丸木材から3点、径の小さな丸木材から2点の計5点を抽出した。したがって、分析試料とする炭化材は、合計30点である。なお、上記の抽出した炭化材には、便宜的に炭-1~30の通し番号を付し、それぞれについて炭化材同定を実施した。

B 方 法

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の削断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

C 結 果

結果を第5表に示す。炭化材は広葉樹5種類(オニグルミ・ブナ属・コナラ属コナラ属・サクラ属・ケンボナシ属)とイネ科に同定された。以下に、各種類の主な解剖学的特徴を記す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura)

クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または2~4個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近でやや急激に管径を減少させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性~異性III型、1~4細胞幅、1~40細胞高であるが、ほとんど潰れている。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2~3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は比較的高い。道管は单穿孔及び階段穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織

| 遺構 | 時代 | 試料名 | 番号 | 形状 | 樹種 |
|----------|------|-----|------|----------------|---------------|
| 道灌遺跡1号炭窯 | 平安時代 | 炭-1 | 炭-1 | 圓材 | ブナ属 |
| | | | 炭-2 | 丸材 径 2.5cm | ブナ属 |
| | | | 炭-3 | 圓材 | ブナ属 |
| | | | 炭-4 | 丸材 径 1.4cm | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-5 | ミカン圓材 | ケンボナシ属 |
| | | 炭-2 | 炭-6 | 圓材 | ブナ属 |
| | | | 炭-7 | 丸材 径 5cm × 3cm | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-8 | ミカン圓材 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-9 | 半圓材 | ケンボナシ属 |
| | | | 炭-10 | 圓材 | ケンボナシ属 |
| | | 炭-3 | 炭-11 | 圓材 | ブナ属 |
| | | | 炭-12 | 圓材 | ブナ属 |
| | | | 炭-13 | 圓材 | ブナ属 |
| | | | 炭-14 | ミカン圓材 | ブナ属 |
| | | | 炭-15 | ミカン圓材 | ケンボナシ属 |
| | | 炭-4 | 炭-16 | ミカン圓材 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-17 | ミカン圓材 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-18 | ミカン圓材 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-19 | ミカン圓材 | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-20 | ミカン圓材 | ケンボナシ属 |
| 向原遺跡3号炭窯 | 近世以降 | 炭-1 | 炭-21 | 丸材（大） 径 3cm | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-22 | 丸材（中） 径 2.3cm | サクラ属 |
| | | | 炭-23 | 丸材（小） 径 1.2cm | サクラ属 |
| | | | 炭-24 | 圓材 | オニグルミ |
| | | | 炭-25 | 枝？ 径 3mm | イネ科 |
| | | 炭-2 | 炭-26 | 丸材（大） 径 3cm | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-27 | 丸材（大） 径 2.6cm | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-28 | 丸材（大） 径 2cm | サクラ属 |
| | | | 炭-29 | 丸材（小） 径 1.5cm | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| | | | 炭-30 | 丸材（小） 径 1cm | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |

第5表 樹種同定結果

は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部はほぼ1列で時に2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った梢円形、単独または2～8個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・ケンボナシ属 (*Hovenia*) クロウメモドキ科

環孔材で孔圈部は1～3列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は管壁厚は中庸、横断面では梢円形、単独、小道管の管壁は厚く、横断面では円形～梢円形、単独及び放射方向に2～3個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～5細胞幅、1～50細胞高。

・イネ科 (Gramineae)

試料は円柱状で、中空となる。横断面では維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱が認められ、放射組織は認められない。

D 考 察

道灌遺跡1号炭窯は平安時代の所産で、長軸約620cm、短軸約220cm、深さ約20cmで長梢円形を呈している。覆土上部(1層)には火山灰がブロック状に認められ、炭化材は覆土下部(3・4層)から大量

に出土している。当遺構から出土した炭化材は、広葉樹3種類（ブナ属・コナラ節・ケンボナシ属）に同定された。各袋では種類構成は若干異なるが、全体ではブナ属・コナラ節・ケンボナシ属はほぼ同じ割合で確認された。したがって、これらの樹種が主に利用されていたと判断される。コナラ節は薪炭材としては国産材の中でも特に優良な木材であり、焼成すると硬炭となる。また、ブナ属やケンボナシ属も薪炭材として利用されるが、ブナ属は焼成すると軟質の炭となる〔岸本・杉浦 1980〕。

一方、近世以降の所産とされる向原遺跡3号炭窯は、南北径315cm、東西径380cmを測る石積み窯であり、炭化材は当遺構覆土及び床面から採取されている。また、炭化材は、丸材や削材など形状を確認できる試料が多いことから、保存状態も比較的良好と考えられる。当遺構から出土した炭化材は、広葉樹3種類及びイネ科に同定された。したがって、向原遺跡3号炭窯ではコナラ節・サクラ属・オニグルミなど硬炭となる木材が木炭として焼成されていたことから、木材の種類を選択・利用していた可能性がある。なお、上記した広葉樹とともに検出されたイネ科については、木炭としての用途は考えにくいことから、木炭焼成時の燃料材、あるいは炭窯の構築材などに由来する可能性がある。

当遺跡の位置する日本海側山間部の多雪地域における潜在的な植生は、ブナを中心とした森林となり、ブナの林床はチスマザサが発達する〔宮脇 1985〕とされる。ただし、現在では、後背山地はスギなどの植林や、里山林などの二次林がほとんどを占め、自然度の高い地域にわずかにブナ林が残っている〔宮脇 1985〕にすぎない。

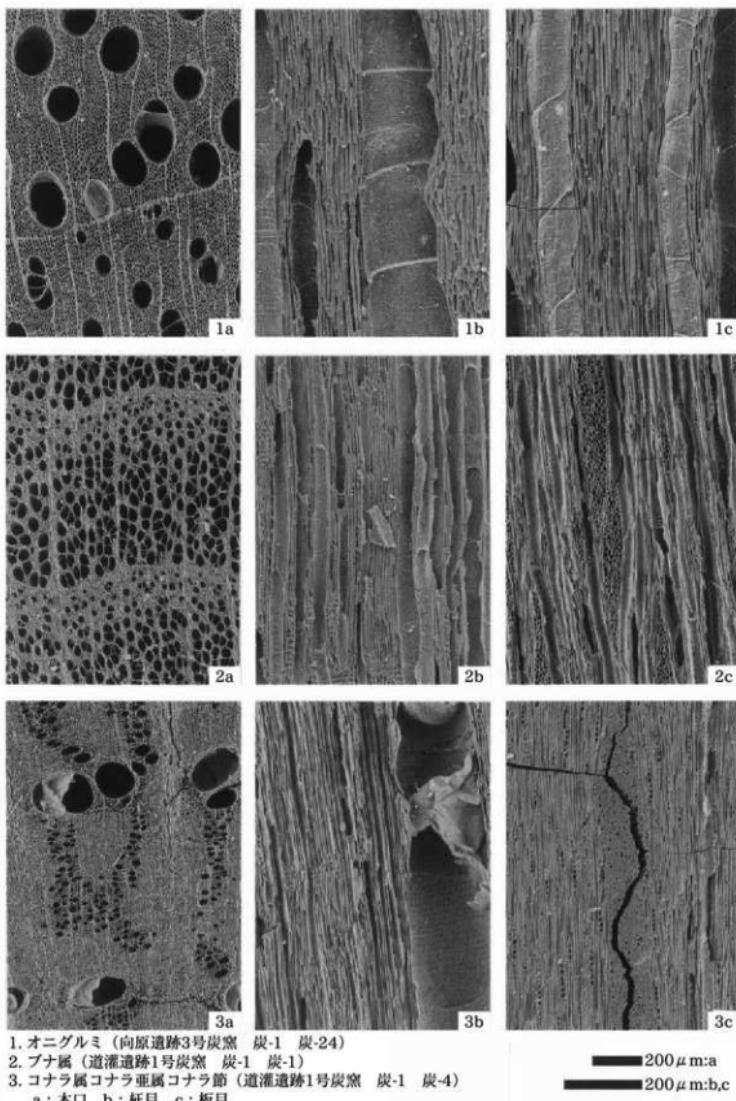
本遺跡周辺における分析調査例によれば、八斗苅原遺跡や丸山遺跡の平安時代の可能性のある炭窯から出土した炭化材は、ブナ属のみで構成されている。一方、関川谷内遺跡の平安時代の炭窯から出土した炭化材は、全点がコナラ節といった結果が得られている〔パリノ・サーヴェイ株式会社 1998〕。このことから、今回の調査では主体となる樹種は周辺の炭窯の分析例と類似するが、ややばらつきが認められる。平安時代における本地域では、遺跡周辺からブナ属やコナラ節を探取・利用していたと考えられる。

また、本遺跡周辺では近世以降の炭窯や木炭を使用した可能性のある生産遺構などから出土した炭化材の分析調査例はないが、今回の向原遺跡3号炭窯についてはコナラ節を主体としてサクラ属の利用が推測され、周辺における古代の炭窯や道灌遺跡1号炭窯の樹種構成とも比較的類似する。3号炭窯で焼成された木炭の用途については不明であるが、近世以降は燃料材等の供給などを目的とした二次林の維持・管理が普及しており、これら二次林から採取した木材の可能性もある。

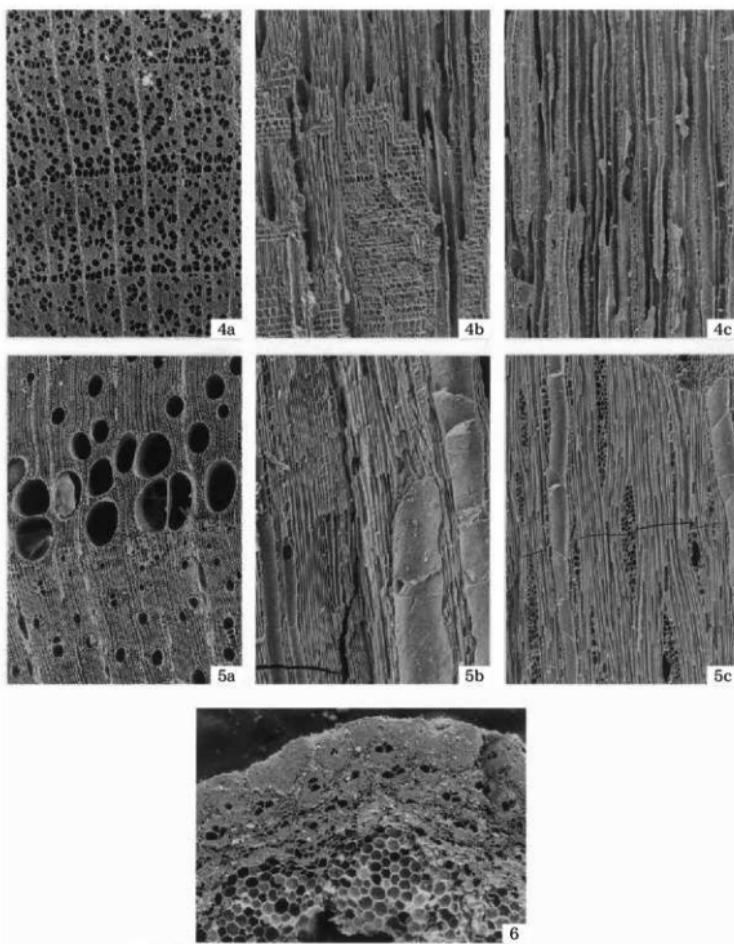
今後は、各時期における木材の利用状況を評価するため、さらに炭窯や生産遺構から出土する炭化材の分析調査例を蓄積し、遺構の用途についての情報も含めて検討することが望まれる。また、近世以降については文献史料などから、当時の森林利用や生産活動における木炭の利用状況を検証し、今回得られた結果について、再評価する必要がある。

引用文献

- 岸本定吉・杉浦銀治 1980 『日曜炭やき師入門』250p 総合科学出版
 宮脇 昭編著 1985 『日本植生誌 中部』604p 至文堂
 パリノ・サーヴェイ株式会社 1998 『関川谷内遺跡における自然科学分析』『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第90集 関川谷内遺跡I』p55-59 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団



第21図 炭化材 (1)



4. サクラ属（向原遺跡3号炭窯 炭-1 炭-23） a:木口、b:径目、c:板目
 5. ケンボナシ属（道溝遺跡1号炭窯 炭-1 炭-5） a:木口、b:径目、c:板目
 6. イネ科（向原遺跡3号炭窯 炭-1 炭-25） 横断面

200 μm:4-5a,6
 200 μm:4-5b,c

第22図 炭化材 (2)

第VI章 道灌遺跡まとめ

1 はじめに

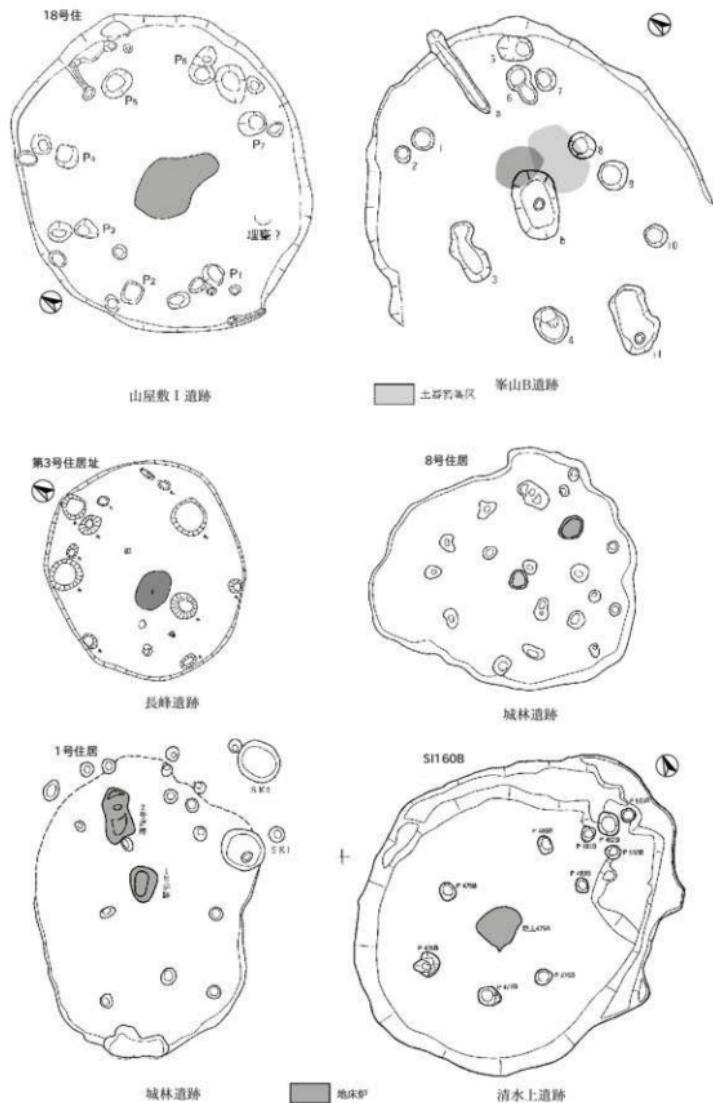
縄文時代中期初頭から前葉にかけての道灌遺跡と同時期の遺跡の調査例は、新潟県上越地方全体を見てもそれほど多くはない。妙高村道添遺跡〔室岡1994・1995〕、中郷村南田遺跡〔南田遺跡発掘調査団1988〕・和泉A遺跡〔加藤・荒川1999〕・大久保遺跡〔野村2002〕・龍峰遺跡〔小池ほか1996〕、新井市原通ハツ塚〔小野ほか1982〕、上越市山屋敷I遺跡〔寺崎2003〕、板倉町峯山B遺跡〔秦ほか1986〕、吉川町長峰遺跡〔関・本間ほか1984〕などが調査されている。少し距離があるが、中越地方では津南町城林遺跡〔佐藤・長澤1997〕、塙沢町五丁歩遺跡〔高橋ほか1992〕、堀之内町清水上遺跡〔田海ほか1990；寺崎ほか1996〕などの調査が行われている。竪穴住居などの遺構が検出されている遺跡もあるが、遺跡の全体像が明らかになっているものはさらに少なく、山屋敷I遺跡、和泉A遺跡、城林遺跡、五丁歩遺跡、清水上遺跡などがあげられる。

第III章4遺物の項でも述べたように、道灌遺跡は越後と信州の国境付近に位置するため、両者の土器、または両者の影響を受けた在地的な土器などが多く見られた。北陸の新保・新崎式土器、中部高地系の深沢遺跡第2類土器・第3類土器、指頭圧痕文土器・仮称後沖式土器などが多く見られる。関東の影響もあり、五領ヶ台式、阿玉台式土器なども出土している。

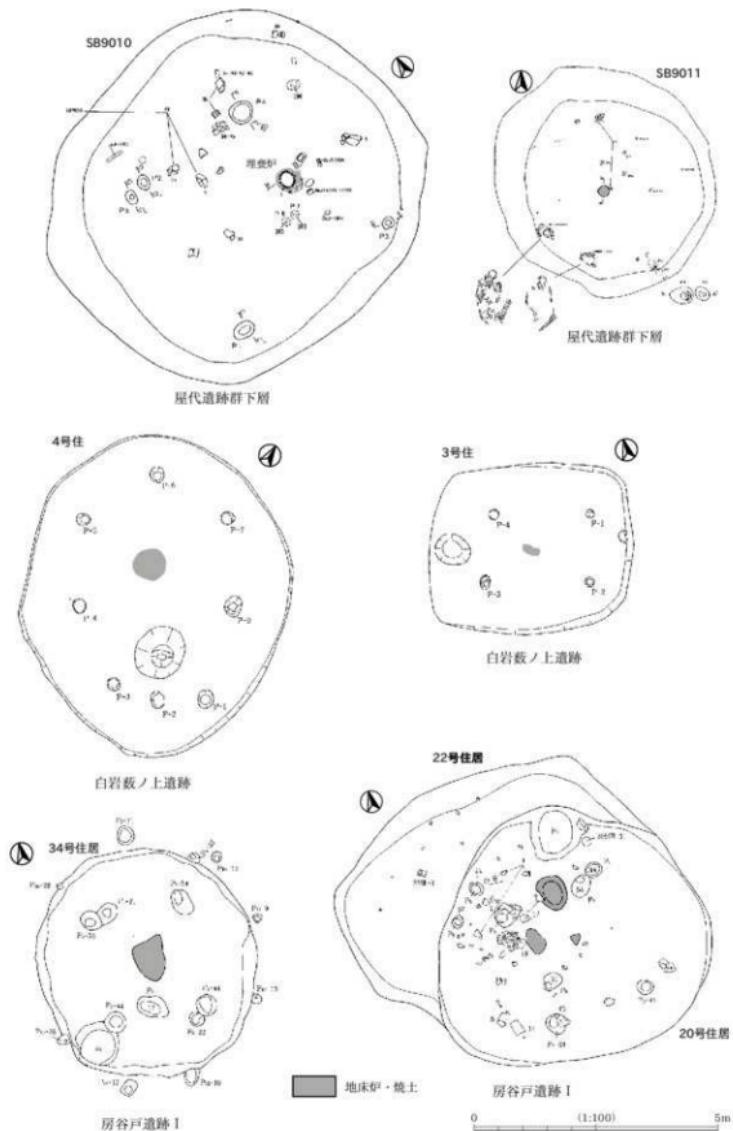
こうした地域の影響は土器だけでなく、住居構造・炉形態などにも影響を与えていたものと考えられる。上記の新潟県内の遺跡や周辺地域の遺跡の状況を探りながら、道灌遺跡の特色を示したい。

2 住居形態と炉

道灌遺跡の竪穴住居は、2基しか検出されていないが、住居形態は5本主柱穴の竪穴住居で長楕円形に近い不整円形プランのものと考えられる。地山面への掘り込みが浅いため、プランは明確ではない。2号竪穴住居は中心に埋甕炉を持っている。また、住居の柱穴・プランは確認できなかったが、単独の埋甕炉が3基検出され、これらも竪穴住居に伴うものと判断した。したがって、道灌遺跡の住居構造は5本主柱穴の長楕円形に近い不整円形プランの竪穴住居で、埋甕炉を伴う可能性が高いと考えられる。出土土器から影響を受けたと考えられる地域の様相と比較してみた。第23図に県内の主な遺跡の竪穴住居を示した。上越市山屋敷I遺跡〔寺崎前掲〕・板倉町峯山B遺跡〔秦ほか前掲〕・吉川町長峰遺跡〔関・本間ほか前掲〕・津南町城林遺跡〔佐藤・長澤前掲〕などで竪穴住居が検出されている。県内出土の竪穴住居は楕円形または円形プランの地床炉を持つタイプが一般的である。清水上遺跡〔田海ほか前掲；寺崎ほか前掲〕のような卵型に近いプランも見られる。柱穴配置にはあまり規格性が認められない。このように新潟県内で、今まで確認されている中期前葉の炉形態は地床炉が一般的である〔増子1999〕。影響を及ぼしている周囲の地域の竪穴住居はどのような状況にあるか、第24図に示した。やはり地床炉が多く見られる。道灌遺跡で多くの出土があった新保・新崎式土器の本場である北陸では、竪穴住居の調査例が少ないが、富山県立山町の白岩蔵ノ上遺跡で検出された竪穴住居に伴う炉も地床炉である〔酒井ほか1981〕。群馬でも地



第23図 繩文時代中期初頭～前葉の竪穴住居（1）



第24図 繁文時代中期初頭～前葉の竪穴住居（2）

床炉が多い〔山口ほか1989〕。一方、もう一つの大きな影響を受けている信州では中期初頭から埋甕炉が多くなったとされている〔三上1995〕。長野県千曲市の屋代遺跡群の下層から検出された中期前葉（五領ヶ台Ⅱ式期）の集落では埋甕炉と地床炉の両方が検出されている〔寺内ほか2000〕。その割合は竪穴住居22軒のうち、埋甕炉11基、地床炉5基であった。遺構の切り合い関係から、地床炉から埋甕炉への変遷が確認されている。長野県小川村茂遺跡では、中期初頭から前葉にかけての竪穴住居7軒のうち、埋甕炉を持つもの3軒、炉不明のもの4軒となっている〔千曲川水系古代文化研究所1991〕。炉不明のものは、地床炉の痕跡がなくなってしまった可能性もある。道灌遺跡でも第Ⅲ章3遺構の中で地床炉の可能性のある焼上について記載した。しかし、発掘調査中に検出層位の確認、断ち割り調査、周囲の遺構などの有無について精査を行わなかったことから、地床炉とすることには不安がある。また、屋代遺跡群下層〔寺内ほか前掲〕でも、竪穴住居跡の周辺に焼土跡が点在し、屋外での調理や火を使う行為が行われたことが指摘されている。現時点においては、道灌遺跡の竪穴住居に伴う炉は、埋甕炉のみの可能性が高いとしておきたい。県内の中期初頭～前葉では、埋甕炉の例はなく、埋甕炉が検出された道灌遺跡は、炉形態については信州の影響を強く受けているということが言えよう。

3 土器編年案

道灌遺跡で出土した
縄文土器は中期初頭から
前葉の棒の中におお

| | | 北陸系（I群） | 関東系（II群） | 中部高地系（III群） |
|----|------|---------|----------|-------------|
| 1期 | 中期初頭 | 新保式Ⅱ・Ⅲ期 | 五領ヶ台Ⅰ式 | 深沢遺跡第2類土器 |
| 2期 | 中期前葉 | 新崎式Ⅰ期 | 五領ヶ台式直後型 | 深沢遺跡第3類土器 |
| 3期 | 中期前葉 | 新崎式Ⅱ期 | 指頭圧痕文土器 | 仮称後沖式土器 |

第6表 道灌遺跡土器編年案表

よおさるものであ

る。各地域の影響を強く受け、多系統の土器が出土している。一括土器が少ないため、多系統の土器を編年的に位置付けることが困難であり、また、それぞれの系統も、編年的位置付けが確立していないという状況もある〔石原ほか1998〕。しかし、信州北信地域から上越地方にかけてこの時期は遺構に伴う土器が少なく、道灌遺跡は資料的価値が高いといえる。遺構出土の土器を検討した結果、山屋敷Ⅰ遺跡と中部高地及び関東地方との併行関係を示した論考〔寺内2003〕と重なる部分が多く、この論考の中間の編年案を参考にした。

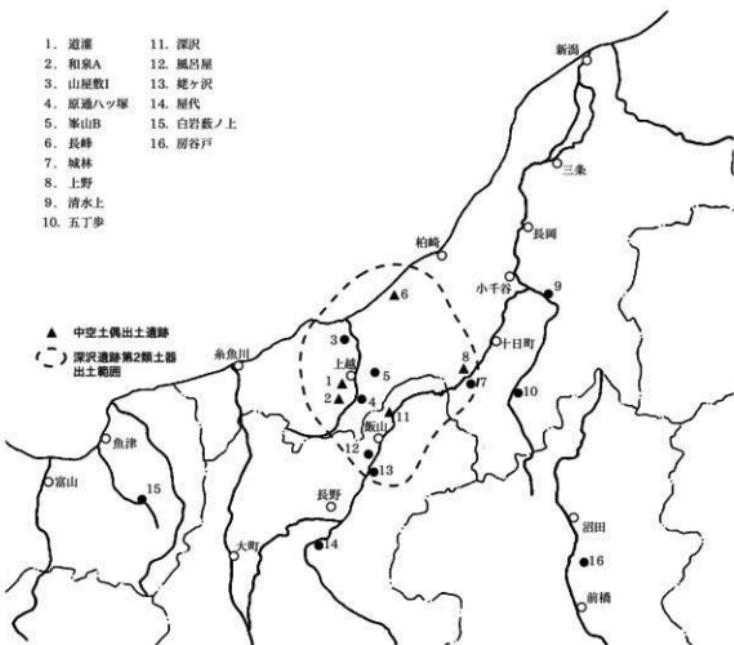
A 遺構出土の土器の検討

1号竪穴住居 住居床面に埋設されていたと考えられる埋甕（1）である。炉ではないと思われる。胴部破片のみであるが、指頭圧痕文に薄い隆帯が貼付され文様が描かれる土器で、中期前葉の指頭圧痕文土器と考えられ、最も新しい時期の遺構と考えられる。

2号竪穴住居 埋甕炉の炉体土器の2は、縄文施文の粗製の深鉢であるが、頭部に平行半隆起線が通り、湯沢町岩原Ⅰ遺跡〔北村ほか前掲〕に類例がある。岩原Ⅰ遺跡では五領ヶ台式土器に伴って出土している。住居の柱穴から出土した7は深沢遺跡第2類土器の胴部と考えられ、2・7は中期初頭の時期に該当すると思われる。

1号埋甕炉 炉体土器の8は系統がよくわからない土器であるが、縦ぎ手文状モチーフがあり、かつこれが厚くなっていることから深沢遺跡第2類土器と第3類土器の中間位の時期に相当すると思われる。

2号埋甕炉 炉体土器の9は長野県岡谷市船塚遺跡〔三上・上田1995〕に類例があり、五領ヶ台



第25図 縄文時代中期初頭～前葉の遺跡分布

II式土器や新保式の新段階の土器と共に作っている。また、長野県原村大石遺跡にも中期初頭に類例がある〔伴ほか1975〕。炉体土器に伴った11は、中部高地系と考えられるが、棒状工具による渦巻き状の沈線文などから五領ヶ台式直後型式にも類似している。12は76のようなほかに文様を持たない指頭圧痕文土器の可能性がある。9・11・12は中期前葉前半頃に相当すると考えられる。

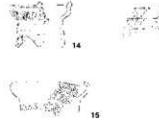
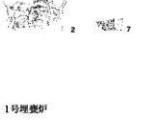
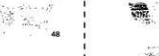
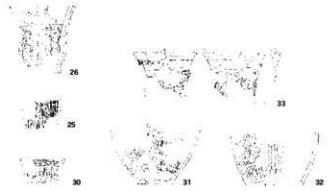
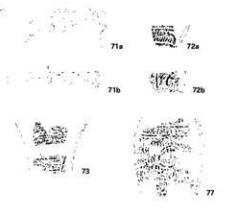
3号埋甕炉 炉体土器の13は北陸系の新崎式土器であるが、横位無文帶に楔形刻目文を伴わないため新崎式Ⅰ期と考えられ、中期前葉前半頃と考えられる。

B 土器編年案

遺構出土の土器を検討し寺内氏の編年案〔寺内前掲〕を参考に第26図の編年案を作成した。

1 期

北陸系では新保式のII・III期〔加藤1986〕のものが出土している。量的には少ない。II・III期の特徴である口縁部がキャリバー形を呈するものが見られる(14・15)。胎土には半透明な石英を多く含む②が多く見られ、搬入品が主体をなすと思われる。中部高地系では深沢遺跡第2類土器が多く出土している。個体数も多く、復元率も高い。石英・雲母を多く含む中部高地系の胎土④・⑤と白色粒子を含む在地の胎土①・⑦が半々位の割合である。関東系では交互刺突文を特徴とする五領ヶ台II式に併行すると考えられ

| | 北陸系(Ⅰ群) | 関東系(Ⅱ群) | | 中部高地系 北信 | 中部高地系 東信 | 遺構 |
|----------------|---|--|--|---|-------------|---|
| 道溝道路1期 中期初頭 | 新保式Ⅱ・Ⅲ期  | 五箇ヶ台式  | | 深沢道路第2類土器  | | 2号竪穴居  1号埋甕  |
| 道溝道路2期 中期前葉 | 新崎式Ⅰ期  | 五箇ヶ台式直底型式  | 指頭圧痕式土器  | 深沢道路第3類土器  | | 2号埋甕  3号埋甕  9 11 12 |
| 道溝道路3期 中期後葉 | 新崎式Ⅲ期併行(在地化)  | 指頭圧痕式土器  | | 仮称後式土器  | | 1号竪穴居  |

第26図 道溝道路土器編年表

0 (1:12) 50cm

る土器が出土している。破片が多く、器形を復元できたものは少ない。五領ヶ台II式に伴う折り返し口縁を持つ縄文施文の粗製の深鉢が多く見られる。しかし、この粗製土器がこの時期に限定されず、次期に残っていく可能性もある。

2 期

北陸系では新崎式のI期が出土している。新崎式のI期・II期は無文帶の上下の縁に楔形刻目文をめぐらす文様の出現によって細別されている〔山田前掲〕。楔形刻目文を持たない横位無文帶を文様に持つものは3号埋甕炉体上器の13や19・21などがある。胎土は在地的な①、半透明な石英を含む②、雲母を含む③など多様である。中部高地系では隣帶が太く、縄文部がなくなる深沢遺跡第3類土器が出土している。1期の第2類土器に比べ量は少ない。胎土もさまざまなものが存在する。関東系は五領ヶ台式直線型式の48が見られる。I期の折り返し口縁を持つ組成の深鉢は、関東阿玉台式からの影響で指頭圧痕文を胸部に施すようになったと考えられている〔寺内2003〕。こうした観点から74の指頭圧痕文土器には折り返し口縁の痕跡が残っていると見て取れる。

3 期

3期の北陸系においていた土器は、新崎式の範疇には入らない在地化されたものと思われるが、楔形刻目文をめぐらす無文帶を持つ点で、新崎式のII期に併行するものと考えた。縦方向の無文帶の両端に楔形刻目文を施文する30～32の土器の類例は中郷村南田遺跡〔南田遺跡発掘調査団前掲〕、吉川町長峰遺跡〔関・本間ほか前掲〕などに見られる。胎土は①の在地のものである。中部高地系では楕円区画と斜行沈線文を特徴とする東信地域の仮称後沖式土器〔寺内1996・2002〕が出土している。ほとんどが在地の胎土①である。2期の指頭圧痕文のみの土器が薄い陰帯による楕円区画や区画内の波状沈線などの文様を持つようになっている。この楕円区画などの文様構成は仮称後沖式土器に類似しており、併行関係にあるものと思われる。胎土もほとんど在地の①である。こうした仮称後沖式土器との関係から、指頭圧痕文土器について各説では中部高地系に置いたが、関東からの影響も考え、編年案では両者の中間に置いた。

遺構の変遷

上記の編年案に沿って、遺構の変遷を追うと、第26図右端のようになり、住居は2号竪穴住居→1号埋甕炉・2号埋甕炉→3号埋甕炉→1号竪穴住居の順に変遷したと思われる。

C 系統組成

道灌遺跡は越後と信州の国境付近に位置するため、両者の土器、または両者の影響を受けた在地的な土器などが多く見られた。各系統に分類した道灌遺跡出土の土器を、実測個体数で割合を示してみた。このほかの出土土器は細片が多く、実測個体のみでも比率に大きな差は現ないと判断した。他系統の影響を受け、在地化した土器は他系統のものとした。時期を分類せず、系統のはっきりした土器80点を分類したところ、北陸系34%（27個体）、関東系15%（12個体）、中部高地系51%（41個体）となった。中部高地系が半数を占めている。1～3期の各時期においても中部高地系が多数を占めることが確認できる。1・2期の北陸系の新保・新崎式土器は胎土に半透明な石英を含む搬入品と考えられる土器もあり、客体的な様相を示し、関東系の土器はごく少ない状況である。3期は中部高地系の仮称後沖式土器や指頭圧痕文土器が多数を占める中で、北陸系の土器が在地化したものが多く見られるようになっている。3期には、特徴的な胎土は見られず、各系統とも在地の白色粒子を含む①などがほとんどになる。

4 中空土偶について

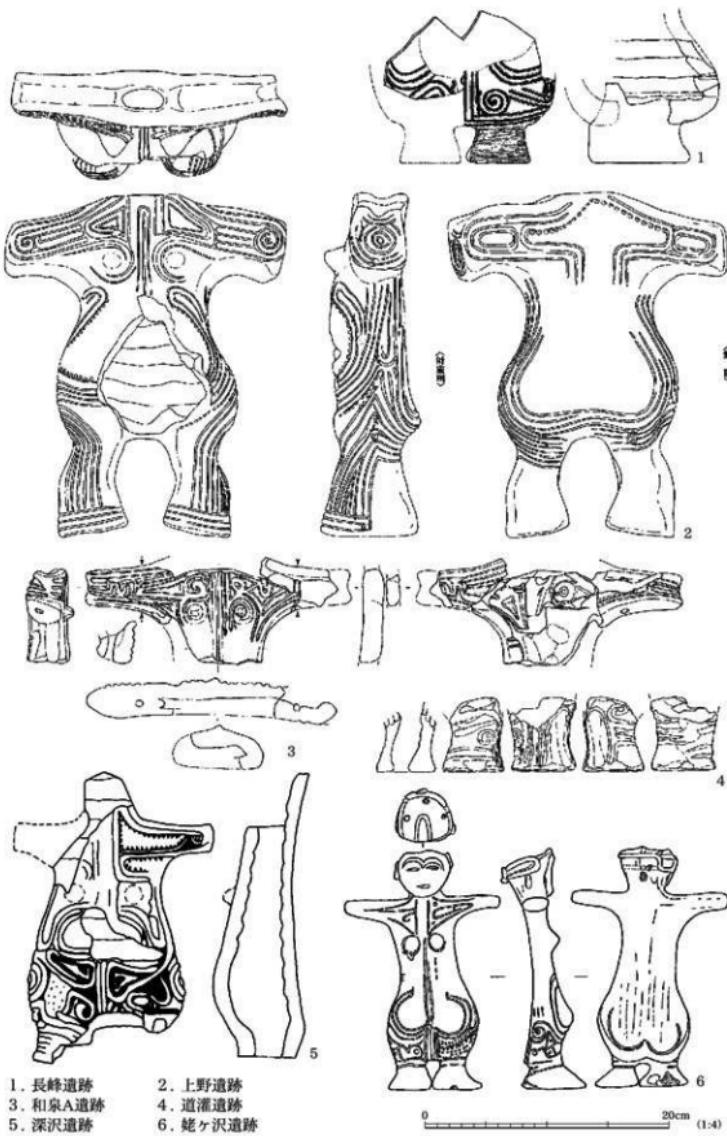
中期前葉の信州北信地域・越後上越地方周辺には、特徴的な中空土偶が分布している。第27図に集成図を載せた。道灌遺跡出土の4は、中空土偶の脚部で粘土紐の輪積みによって成形されている。脚部底面は穴があり、胸部の中空部に続いている。文様は細い棒状工具によって引かれた沈線文による。集合沈線や蕨手状唐草文などが描かれる。これと類似した土偶が津南町上野遺跡〔江坂・可児ほか1962；阿部1998〕、吉川町長峰遺跡〔閔・本間ほか前掲〕、中郷村和泉A遺跡〔加藤・荒川前掲〕、長野県では飯山市深沢遺跡〔「土偶とその情報」研究会1996〕などで出土している。上野遺跡の2は、全長28.5cmの大型土偶である。復元高は約36cmと推定されている。粘土紐の輪積みによって成形され、先細りの棒状工具による沈線と連続刺突文を主体とした渦巻文と直線・曲線が土偶の体のラインに沿って描かれている。沈線と連続刺突文の文様構成が五領ヶ台式土器に類似することが指摘され、中期初頭と位置付けられている〔阿部前掲〕。長峰遺跡の1は半截竹管による半隆起線文と渦巻文が描かれている。和泉A遺跡の3は上野遺跡の2とよく類似している。形態は、長く伸びる腕を持つ十字形で、断面は扁平である。成形も粘土紐の輪積みにより、文様も先細りの棒状工具による。上半部の文様構成も類似し、渦巻きや直線などが描かれる。長野県側では、5の深沢遺跡例がある。粘土紐の輪積みによる成形である。実見していないため、施文方法などの特徴を捉えていないが、沈線文に類似点が見られる。6の長野県中野市姥ヶ沢遺跡の土偶は中空土偶ではない〔金井1983〕。しかし、腕を水平にした十字形や簡略化されているが、施文されている文様が沈線による曲線・直線であるなど、ほかの中空土偶に類似した点が多く見られる。

これらの中空土偶などは、中期初頭または前葉の遺跡から出土している。成形は粘土紐輪積みにより、外側はていねいに整形されるが、内面は輪積み痕が明瞭に残る。比較的大型のものが多い。文様施文は先細りの棒状工具による沈線で描かれる渦巻きや直線・曲線の沈線文が主体である。長峰遺跡出土の1は工具が半截竹管により、ほかの土偶と区別されるが、これは海岸部に近く北陸的な影響が強いためと思われる。分布範囲は長野県の北信地域から新潟県の上越地方に限られ、地域的な出土状況を示している。第25図に示したように、この分布範囲は深沢遺跡第2類土器の分布範囲と重なり、両者は密接な関係にあると思われる。深沢遺跡第2類土器に大型の中空土偶が伴う可能性が指摘できると思われる。

5 石器について

A 中期初頭～前葉の石器組成

道灌遺跡から出土した石器は、第3表のとおり総数229点である。このうち器種石器の未完成品、剥片類、石核を除いたいわゆる器種石器は164点である。このほか、石製品が3点出土している。これらの石器・石製品は伴出土器から縄文時代早期前葉、前期前半、中期初頭～前葉、後晩期、及び古代以降のいずれかの時期に所属する。土器量を詳細に見れば重量別では、中期初頭～前葉87.0% (125.6kg)、後晩期0.6% (0.9kg)、前期0.1% (0.1kg)、早期前葉(押型文)0.0% (24.8g)、土師器・須恵器12.4% (17.9kg)となる。古代の土師器・須恵器に伴う石器は、砥石の一部にその可能性があるものの、ほかは皆無と見られる。したがって、石器の多くが縄文時代中期初頭～前葉に所属する。したがって、第3表は広範囲な時期の石器・石製品を含みつつも、中期初頭～前葉の石器組成をほぼ反映しているといえよう。



第27図 信越国境付近出土の中空土偶等

それによれば、敲磨石類（47.6%）、打製石斧（17.7%）が極めて多く、両者でほぼ2/3近くを占める。次いで、磨製石斧（9.8%）、不定形石器（7.9%）、砥石（6.7%）が一定量認められる。石鎚、石匙、両極剥離痕のある石器、石皿は少なく、石錐、石鍤は認められない。敲磨石類には早期に属する特殊磨石（12点）があるものの、これを除いても石器組成の比率を大きく下げるものでない。また、石鎚のうち早期前葉に所属する彫形鎚（179）、後期以降に属するアスファルト付着鎚（181）、砥石のうち前期前半と考えている内磨き砥石（245・246）、直方体で近世以降の所産と考えている砥石（247・248）も中期初頭～前葉から除外されるが、比率を大きく変えるものではない。

これらの石器組成を他遺跡と比較すれば、敲磨石類、打製石斧、磨製石斧の多さ、石鎚、石錐、石匙などの剥片石器の少なさに特徴が認められる。

このような特徴を周辺遺跡に求めると、同じく中郷村大久保遺跡（中期前葉）【野村前掲】、南田遺跡（中期前葉）【南田遺跡発掘調査団1988】、前原遺跡（中期中葉～後葉）【小田ほか2004】、妙高高原町兼保遺跡（中期後葉～後期前葉）【妙高高原町教委1976】がある。また、新井市大貝遺跡（中期後葉）【立教大学博物館学研究室1967】は石皿が、中郷村和泉A遺跡【加藤・荒川1999】は石皿や石錐がやや多いものの、本遺跡と同傾向である。磨製石斧の多さはその石材が蛇紋岩でほぼ占められ、これは西頸城地方の蛇紋岩製磨石斧生産地に近いからである。打製石斧の多さは中越地方を中心とする山間・丘陵部の傾向ほどではないが近似する。このように西頸城地方と中越地方の山間・丘陵部の影響は、本遺跡を含む新井・頸南地域が「地理的要因からも両者の折衷的な地域」【鈴木1999】だからである。

なお、石製品のうち、瑛状耳飾りは既述のように前葉前半の所産と考えている。

B 器種と石材選択

器種別の石器・石製品の石材選択は第7表のとおりである。これによれば石材選択において次のような特徴が指摘できる。

- ① 石鎚・石匙、両極剥離痕のある石器は小型の剥片石器で、黒色緻密安山岩、黒曜石が多用されている。
- ② 不定形石器は前者に比べ、やや大型になり中型の剥片石器と言える。黒曜石の使用が皆無となり、

| 石材名 器種名 | 黒曜石 | 黒 山 岩 | 真 岩 | チャ ー ト 英 メ タ ウ | 鐵 英 メ タ ウ | 漢 灰 岩 | 葛 灰 岩 | 砂 岩 | 角 閃 石 安 山 岩 | 粘 岩 | 鈣 長 石 岩 | 碧 綠 岩 | 閃 長 石 岩 | 安 山 岩 | 斑 萊 イ 岩 | 花 崗 岩 | 滑 石 | 合 計 | | | | |
|--------------|-----|-------------|--------|----------------------------------|-----------------------|-------------|-------------|--------|----------------------------|--------|------------------|-------------|------------------|-------------|------------------|-------------|--------|--------|---|-----|--|----|
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 石鎚 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 石匙 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 両極剥離痕のある石器 | 2 | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| 不定形石器 | 4 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 13 |
| 打製石斧 | 12 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 29 |
| 磨製石斧 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 16 |
| 磨製石斧未品 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| 敲磨石類 | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 76 |
| 砥石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 11 |
| 石鏡 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| 三角彫形石器 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 石核 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 鏡面状の光沢を有する石器 | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 石棒 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 瑛状耳飾り | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 合計(点) | 2 | 8 | 24 | 2 | 1 | 1 | 3 | 16 | 39 | 32 | 4 | 17 | 1 | 1 | 1 | 12 | 5 | 1 | 2 | 172 | | |

第7表 石器・石製品器種別石材表

※剥片類除く。

黒色緻密安山岩、頁岩、凝灰岩が多用される。

- ③ 打製石斧は大型剥片石器であり、頁岩、砂岩、凝灰岩、粘板岩の堆積岩が多用されている。
石器の大きさによる石材選択の違いは、石材から得られる素材の大きさによるものであり、搬入礫の黒曜石は小型剥片石器に、黒色緻密安山岩は小型～中型剥片石器に、大きな板状の剥片が得やすい堆積岩は打製石斧に使用されている。
- ④ 磨製石斧はほぼ蛇紋岩で占められている。
既述のように磨製石斧の石材に最も適している蛇紋岩製磨製石斧の生産地に近いからである。
- ⑤ 敲磨石類は角閃石安山岩、砂岩、安山岩などの多孔質や粒子構造を持つ転石が使用されている。
- ⑥ 砧石はほぼ砂岩で占められ、粒子構造を持つ石材である。
敲磨石類は叩き潰す・磨り潰すという紛化、砧石は研磨という用途に応じた石材選択である。加工された敲磨石類・石皿はやや軟質で加工しやすい角閃石安山岩が使用されている。
- ⑦ 斧状耳飾りは軟質で光沢のある滑石が用いられている。

主な使用石材のうち、搬入品の黒曜石、蛇紋岩、滑石を除き、在地の石材を使用しているが、黒曜石の使用頻度は少ない。

要 約

道灌遺跡

- 1 遺跡は新潟県新井市大字志字道灌1724番地ほかに所在する。遺跡は妙高山麓からつながる低い丘陵の先端部分に位置している。周囲の水田部との比高差は約10mである。遺跡の中心部は頂上が平坦な小山状をなし、遺跡の標高はおよそ224~228mである。
- 2 遺跡の調査は上信越自動車道建設に伴い、平成9年に県教委から受託して埋文事業団が実施した。
- 3 調査の結果、縄文時代中期初頭～前葉の集落が検出された。このほか、縄文時代早期・前期・後期・晩期の遺物が少量出土した。また、時代は下るが、平安時代の所産と考えられる炭窯1基が検出され、10世紀前半の一括遺物が出土している。住居跡などの遺構は検出されなかつたが、小規模な集落が存在した可能性がある。
- 4 縄文時代中期初頭～前葉の集落は、竪穴住居2軒、竪穴住居に伴ったと考えられる埋甕炉3基を合わせ計5軒の竪穴住居が存在したと思われる。竪穴住居は小山の頂上の平坦部分その周囲の緩斜面に環状を呈するように並んでいる。このほか、土坑や焼土が散在している。
- 5 竪穴住居の構造は5本主柱穴の長楕円形に近い不整円形プランで、埋甕炉を伴つたものと考えられる。この時期竪穴住居に伴う埋甕炉は新潟県内では類例がなく、中部高地の影響を受けたものと考えられる。
- 6 中期初頭～前葉の遺物は、北陸系（新保式Ⅰ期・新崎式Ⅰ・Ⅱ期）・関東系（五領ヶ台Ⅱ式・五領ヶ台式直後型式）・中部高地系（深沢遺跡第2類・第3類土器・指頭圧痕土器・仮称後沖式土器）の各土器とその影響を受けた在地的な土器が出土している。この時期を3期に区分し、編年案を設定した。
- 7 石器の多くは、伴出土器や検出遺構から中期初頭～前葉に属する。中期初頭～前葉の石器組成は、敲磨石器・打製石斧・磨製石斧の多さ、石鏃・石錐・石匙などの剥片石器の少なさに特徴があり、同時期の周辺遺跡と同傾向である。打製石斧の中に部分的に研磨のある石斧が一定量存在し注目される。使用石材は、搬入礫の黒曜石・蛇紋岩を除き、在地の石材が使用されている。このほか、早期前葉に所属する鍛形鐵・特殊磨石・三角錐形石器・前期前半の狹状耳飾りも出土している。

向原遺跡

- 1 向原遺跡は新潟県新井市大字菅沼字向原307番地ほかに所在する。遺跡は妙高山麓からつながる低い丘陵の先端部分に位置している。周囲の水田部との比高差は約10mである。遺跡の存在する地点は丘陵の緩傾斜地で、標高約215m前後である。
- 2 遺跡の調査は上信越自動車道建設に伴い、平成9年に県教委から受託して埋文事業団が実施した。
- 3 調査の結果、土坑1基、平安時代と考えられる炭窯2基、近世以降の石積み窯が1基検出された。遺物は縄文土器が数点と石器剥片1点が出土した。

引用・参考文献

- 安孫子昭二 1982 「アスファルト」『縄文文化の研究』8 社会と文化 雄山閣出版
- 阿部昭典 1998 「縄文時代中期初頭の中空土偶－津南町上野遺跡採集遺物について－」『越佐補遺些』第3号 越佐補遺些の会
- 阿部朝衛 1987 「磨製石斧生産の様相」『史跡 寺地遺跡』 新潟県青海町
- 石坂 茂・岩崎泰一 1988 「撫系紋土器文化における石器群の一様相－スタンプ形石器と三角錐形石器を中心として－」『研究紀要』5(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石原州一ほか 1998 「第5章風呂屋遺跡」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 28牛出・韭山・風呂屋・対面所・飛山・大谷地・八号堤遺跡』長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 江坂輝弥・可児弘明ほか 1962 「津南町文化財調査報告書 4 上野遺跡」新潟県津南町教育委員会
- 小田由美子・高橋保雄 2004 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第130集 前原遺跡・丸山遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上守秀明 1995 「東関東の様相」『中期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会
- 加藤学・荒川隆史 1999 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉A遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤三千雄 1986 「第8群土器 新保式期」『真脇遺跡(本編)』石川県能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 可児通宏・原川雄二ほか 1995 「東京都埋蔵文化財センター調査報告 第18集 多摩ニュータウン遺跡－No.67遺跡－」(財)東京都埋蔵文化財センター
- 金井汲次ほか 1983 「越ヶ沢」長野県中野市教育委員会
- 神村 透 1999 「特殊磨石・折損特殊磨石－観点 文献考古学の一」『信濃』第51巻 第10号 信濃史学会
- 北村 亮ほか 1990 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第56集 岩原I遺跡・上林塚遺跡」新潟県教育委員会
- 小池義人ほか 1996 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第74集 横引遺跡・龍峰遺跡・柳平遺跡」新潟県教育委員会
- 小池義人 1998 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第90集 関谷内遺跡！」新潟県教育委員会
- 小葉一夫 1997 「研究ノート「住居型式」設定のための基礎的作業－多摩丘陵・武藏野台地の縄文中期軽跡の分析から－」『東京考古』15 東京考古談話会
- 小野 昭ほか 1982 「原通ハツ塚」新潟県新井市教育委員会
- 酒井重洋ほか 1981 「富山県立山町堀端文化財緊急発掘調査概要 白岩坂ノ上遺跡・吉峰遺跡」富山立山町教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1984 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」新潟県教育委員会
- 佐藤雅一・長澤展生 1997 「津南町文化財調査報告書 第22輯 午肥原地区遺跡確認試掘調査報告書」新潟県津南町教育委員会
- 佐藤雅一ほか 1991 「見附市埋蔵文化財調査報告 第8山崎A遺跡発掘調査報告書」新潟県見附市教育委員会
- 柴田秀賢・須藤俊男 1964 「原色鉛筆岩石検索図鑑」北隆館
- 縄文セミナーの会 1995 『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相－記録集－』
- 神保孝造 1985 「長山遺跡」富山県八尾町教育委員会
- 鈴木俊成 1999 「早期から晩期の石器軸成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識 III』柏書房
- 閔雅之・木間信昭ほか 1984 「長峰遺跡II」新潟県吉川町教育委員会
- 高橋 保 1989 「研究ノート 県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
- 高橋 保ほか 1992 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集 五丁歩遺跡・十二木遺跡」新潟県教育委員会
- 高橋保雄 2003 「石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第119集 北野遺跡I(下層)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 丹野雅人・原川雄二ほか 1999 「鏡面状光沢を有する加工課」『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニユータウン遺跡—No.72・795・796遺跡—』(財) 東京都埋蔵文化財センター
- 千曲川水系古代文化研究所 1991 『筏遺跡』 長野県小川村教育委員会
- 鶴間正昭 1986 「古代末期の丘陵地域開発について—多摩丘陵の様相—」『研究論集IV』(財) 東京都埋蔵文化財センター
- 寺内隆夫 1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究—『後沖式土器』設定は可能か?—」『長野県の考古学』(財) 長野県埋蔵文化財センター研究論集I』(財) 長野県埋蔵文化財センター
- 2002 「後沖式土器への系譜—千曲川流域における中期前葉(初頭)、斜行沈線文系の土器について—」『長野県の考古学II 長野県埋蔵文化財センター研究論集II』(財) 長野県埋蔵文化財センター
- 2003 「特論 山屋敷I遺跡出土土器に見る中部高地地域・関東地方との交流関係」『上越市史』資料編2 考古 新潟県上越市
- 寺内隆夫ほか 2000 『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 51 更埴桑里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)一縄文時代編』長野県教育委員会・(財) 長野県埋蔵文化財センター
- 寺崎裕助ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第72集 清水上遺跡II』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 2003 「山屋敷I遺跡」『上越市史』資料編2 考古 新潟県上越市
- 「土偶とその情報」研究会 1996 『中部高地をとりまく中期の土偶』 信毎書籍出版センター
- 立木(土橋)由理子 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第83集 萩清水遺跡・三本木新田B遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田海義正ほか 1990 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第55集 清水上遺跡』 新潟県教育委員会
- 西野秀和ほか 1983 『庭島町跡前C遺跡発掘調査報告書(IV)』 石川県立埋蔵文化財センター
- 野村忠司 2002 『中郷村埋蔵文化財調査報告書 第13集 大久保遺跡発掘調査報告書』 新潟県中郷村教育委員会
- 秦繁治ほか 1986 『板倉町埋蔵文化財報告 第1峯山B遺跡』 新潟県板倉町教育委員会
- 早津賛二 1994 「新潟焼山火山の活動と年代—歴史時代のマグマ噴火を中心として—」『地学雑誌』Vol.103 No.2 (社) 東京地学協会
- 伴信夫ほか 1975 「大石遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その1、富士見町その2—』長野県教育委員会
- 藤田富士夫 1989 『考古学ライブラリー』52 玉 ニュー・サイエンス社
- 藤巻正信 1991 『三角錐形石器の形態分類』『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第29集 城之腰遺跡』 新潟県教育委員会
- 増子正三 1999 『第2章 縄文時代 第3節 集落と住居 第3項 炉址』『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 三上敏也 1995 「土器利用炉の分類とその意義—縄文時代における吊す文化と据える文化—」『研究紀要』第1号 長野県立歴史館
- 三上敏也・上田典男 1995 「長野県の様相」『中期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会
- 南田遺跡発掘調査団 1988 『国鉢 南田遺跡』 新潟県中郷村教育委員会
- 御代田町誌編纂委員会 1998 『御代田町誌 歴史編上』 長野県御代田町誌刊行会
- 妙高高原町教育委員会 1976 『妙高高原町文化財調査報告書 第1集 兼保遺跡』 新潟県妙高高原町教育委員会
- 室岡博 1994 『道添遺跡I』 新潟県妙高村教育委員会
- 1995 『道添遺跡II』 新潟県妙高村教育委員会
- 八木光則 1976 「いわゆる「特殊磨石」について—中部地方における縄文早期の石器群研究への問題提起—」『信濃』第28卷 第4号 信濃史学会
- 山口逸弘ほか 1989 『群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 第95集 房谷戸遺跡I』 群馬県教育委員会・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山田芳和 1986 「第9群上器 新岐式期」『真駒遺跡(本編)』 石川県能登郡町教育委員会・真駒遺跡発掘調査団
- 立教大学博物館学研究室 1967 『立教大学博物館学研究室調査報告6 新潟県新井市における考古学的調査—大貝遺跡・石塔類—』 立教大学

土壤測定土器・土製品試験表(1)

※資料については別紙(4・A3)「地質表の記入用紙」を参照している。

| No. | 通称 | 产地 | 地層 | 時間 | 標明・系統 | 断面 | 法縫 (cm) | 奥行き (cm) | 測量・鑑定 | 色調 | 地塊 | 地塊 | 地塊 | 地塊 | 地塊 | 備考 |
|-----|--------------|------------|--------|--------|-------|----|---------|-------------------------------------|-------|----------------|----------------------|-------|-----------------|-----|----|----|
| 1 | 瓦堀 | 赤土田原(後山砂層) | 所立 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶2期 | 深林 | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 赤茶褐色 | 良好 | (1)多量、石英、颗粒 | (1) | 内面無隙隙上半 部灰化物 | | | |
| 2 | 瓦堀 | 15E10 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶2期 | 深林 | | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 二級地成白・半透明な石英多量 | 二級地成白・半透明な石英多量 | (2) | 内面無隙隙上半 部灰化物 | | | |
| 3 | 瓦堀 | 15E23 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期 | 深林 | | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 白・半透明な石英 | 良好 | 内面無隙隙 | (2) | | |
| 4 | P2 | 15E18 | 純土 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期 | 深林 | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 白・半透明な石英 | 良好 | 内面無隙隙 | (1) | | |
| 5 | P8 | 15E24 | 純土 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期 | 深林 | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 白・半透明な石英 | 良好 | 内面無隙隙 | (2) | | |
| 6 | P13 | 15E17 | 純土 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期 | 深林 | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 白・半透明な石英多量、 石英、颗粒 | 良好 | 内面無隙隙 | (2) | | |
| 7 | P16 | 16E23 | 純土 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期a | 深林 | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 白・半透明な石英 | 良好 | 内面無隙隙 | (1) | | |
| 8 | 1.9 | 16E17 | 純土 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶6期 | 深林 | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 白・半透明な石英多量 | 良好 | 内面無隙隙 | (1) | | |
| 9 | 2.2 | 12E24 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶5期 | 深林 | | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 白・石英、颗粒多量 | 良好 | 内面無隙隙 | (1) | | |
| 10 | 2.5 | 12E24 | 純土 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期a | 深林 | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 白・颗粒多量 | 良好 | 内面無隙隙 | (1) | | |
| 11 | 2.9 | 12E24 | 純土 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶6期 | 深林 | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 白・半透明、颗粒 | 良好 | 内面無隙隙 | (1) | | |
| 12 | 6E9 | 12E24 | 純土 | 純文中期前葉 | Ⅴ帶2期 | 深林 | 泥炭13.2 | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 白・颗粒多量 | 良好 | 内面無隙隙 | (1) | | |
| 13 | 5.5 | 15B10 | I, II | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期a | 深林 | | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 不良 | 半透明な石英多量 | 二級地成白 | 内面無隙隙 | (2) | | |
| 14 | 14E14 - 20 | II, IV | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期a | 深林 | | 泥炭18.9 | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 良好 | 半透明な石英多量 | 良好 | 内面無隙隙 | (3) | | |
| 15 | 14E71 - 12 | II | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期a | 深林 | | 泥炭22.2 | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、颗粒 | 半透明な石英多量、颗粒 | (2) | 内面無隙隙 | | | |
| 16 | 14E21, 14D23 | I, II | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期b | 深林 | | 泥炭25 | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、颗粒 | 半透明な石英多量 | (2) | 内面無隙隙 | | | |
| 17 | 16E10 | II | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期b | 深林 | | 泥炭25 | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、颗粒 | 半透明な石英多量、颗粒 | (2) | 内面無隙隙 | | | |
| 18 | 16S22 | II | 純文中期前葉 | Ⅴ帶1期b | 深林 | | 泥炭25 | 表面に本の平野砂層、11種類からなる 下する層等。純文中期前葉文 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、颗粒 | 半透明な石英多量、颗粒 | (2) | 内面無隙隙 | | | |

遺漏遺跡土器・土製品目録表(2)

| No. | 通帳 | 出土地點(ノゾミ70番) | 解説 | 時間 | 褐色系粘土 | 黒色 | 法面 | 裏面 | 異形部(定) | 色調 | 塊状・塊文等 | 塊状・塊文等 | 塊状・塊文等 | 塊状・塊文等 | 備考 |
|----------------------------------|-------------------------------|--------------|--------------|----|--------|----|--------|----|---|-----|------------------------------|-------------------------------|--------|--------|----|
| 測量における測量点(43) 複数ある場合は(1)を記載している。 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 19 | 13B10 | 日 | 縄文中期前葉 1野2個b | 深鉢 | 11時10分 | 褐色 | 11時10分 | 褐色 | 平行手縫手縫文、縁ぎ手縫手縫文、縄文R1横 | 灰褐色 | 長石・粗粒多量、空洞、 砂礫、 良好 | 長石・粗粒多量、空洞、 砂礫、 (1) | | | |
| 20 | 14E12 | 1 | 縄文中期前葉 1野2個a | 深鉢 | 11時20分 | 褐色 | 11時20分 | 褐色 | 平行手縫手縫文、内側方凹の手縫手縫文、 良好文様、済者、口字状文などの手縫手縫文 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、白、 砂礫、 良好 | 半透明な石英多量、白、 砂礫、 (2) | | | |
| 21 | 12D17 | 日 | 縄文中期前葉 1野2個b | 深鉢 | 11時20分 | 褐色 | 11時20分 | 褐色 | 平行手縫手縫文、 手縫手縫文、 横部に手縫手縫文、 縄文R1横 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、 粗粒、 良好 | 半透明な石英多量、 粗粒、 (3) | | | |
| 22 | 13D16 | 1, 日 | 縄文中期前葉 1野2個a | 深鉢 | 11時20分 | 褐色 | 11時20分 | 褐色 | 平行手縫手縫文、 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縄文R1横 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、 粗粒、 良好 | 半透明な石英多量、 粗粒、 (2) | | | |
| 23 | 16E11 | 日 | 縄文中期前葉 1野2個c | 深鉢 | 11時20分 | 褐色 | 11時20分 | 褐色 | 縄文中期前葉手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縄文R1横 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、 白、 砂礫、 良好 | 半透明な石英多量、 白、 砂礫、 (2) | | | |
| 24 | 16E22 | 日 | 縄文中期前葉 1野2個c | 深鉢 | 11時20分 | 褐色 | 11時20分 | 褐色 | 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 白少量、 粗粒、 良好 | 白少量、 粗粒、 良好 | | | |
| 25 | 16E21, 17E2 | 1, 日 | 縄文中期前葉 1野2個c | 深鉢 | 11時20分 | 褐色 | 11時20分 | 褐色 | 手縫手縫文(手縫手縫文など)による縫合手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 粗粒、 粗粒、 良好 | 粗粒、 粗粒、 (3) | 内面吸水物有 | | |
| 26 | 17E5 | 日 | 縄文中期前葉 1野2個b | 深鉢 | 11時25分 | 褐色 | 11時25分 | 褐色 | 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、 不具 | 半透明な石英多量、 不具 | | | |
| 27 | 14E13, 15・20, 22・23, 14E16 | 1, 日 | 縄文中期前葉 1野2個c | 深鉢 | 11時25分 | 褐色 | 11時25分 | 褐色 | 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、 粗粒、 良好 | 半透明な石英多量、 粗粒、 (2) | 内面吸水物有 | | |
| 28 | 16E21 | 日 | 縄文中期前葉 1野2個d | 浅鉢 | 11時32分 | 褐色 | 11時32分 | 褐色 | 手縫手縫文、「L」の字状手縫手縫文、平行手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 半透明な石英多量、 砂礫、 良好 | 半透明な石英多量、 砂礫、 (2) | | | |
| 29 | 13E2 | 日 | 縄文中期前葉 1野3個a | 深鉢 | 11時32分 | 褐色 | 11時32分 | 褐色 | 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 白多量、 粗粒、 (1) | 白多量、 粗粒、 (1) | | | |
| 30 | 16D15, 16E16 | 1, 日 | 縄文中期前葉 1野3個b | 深鉢 | 11時10分 | 褐色 | 11時10分 | 褐色 | 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 角多量、 砂、 粗粒、 (6) | 角多量、 砂、 粗粒、 (6) | | | |
| 31 | 14D7・12 | 日 | 縄文中期前葉 1野3個b | 深鉢 | 11時15分 | 褐色 | 11時15分 | 褐色 | 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 白多量、 粗粒、 (1) | 白多量、 粗粒、 (1) | | | |
| 32 | 14E13, 14・19, N | 1, 日 | 縄文中期前葉 1野3個c | 深鉢 | 11時15分 | 褐色 | 11時15分 | 褐色 | 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 白多量、 粗粒、 (1) | 白多量、 粗粒、 (1) | | | |
| 33 | 16E21・22, 17E1 | 1, 日 | 縄文中期前葉 1野3個c | 深鉢 | 11時22分 | 褐色 | 11時22分 | 褐色 | 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 微弱な白、 粗粒、 (2) | 微弱な白、 粗粒、 (2) | | | |
| 34 | 12F10・15 | 1, 日 | 縄文中期前葉 1野3個c | 深鉢 | 11時22分 | 褐色 | 11時22分 | 褐色 | 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 石英多量、 白 | 石英多量、 白 | 内面吸水物有 | | |
| 35 | 17E1 | 日 | 縄文中期前葉 1野3個c | 深鉢 | 11時25分 | 褐色 | 11時25分 | 褐色 | 手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文、 縫合部に手縫手縫文 | 灰褐色 | 雪白多量、 石英、 や透明白 (4) | 雪白多量、 石英、 や透明白 (4) | | | |

遺構遺跡土器・土製品目録表(3)

前項についても別表(4・5)解説表の記載とお応している。

| No. | 通番 | 出土地點(段)(7段階) | 断定 | 時期 | 判別 | 測定 | 法縫(cm) | 裏縫 | 測量・調査 | 色調 | 焼成 | 出人物 | 出土 | 備考 |
|-----|----------------|--------------|--------|-------|----|--------|--------|-----|---|-----|----|-------|----|----|
| 30 | 1302 | 1 | 縄文中期前段 | ⅢⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118×34 | 118 | 118 | 突起上部ハーフトボ、前ドマの腰帶上に直形 突起突起 文、横口状吹き口、斜面 | 灰褐色 | 良好 | 白多量、褐 | ○ | |
| 37 | 13020 | 1 | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 普通 | 褐、小斜利 | ○ | |
| 38 | 11175、14711-12 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白多量 | ○ | |
| 39 | 16、17、1602 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 40 | 16017 | I | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 41 | 14711-12 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 42 | 14521 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 43 | 120316 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 44 | 12222 | I | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 46 | 15224 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 47 | 13716 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 48 | 16021-22 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 49 | 1782 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 50 | 13825 | I | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 51 | 15055 | IV | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 52 | 14077 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 53 | 1502 | I | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 54 | 15022 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 55 | 14520、14F16 | II | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |
| 56 | 16021 | I | 縄文中期前段 | ⅣⅤⅥⅦ | 縄文 | 118 | 118 | 118 | 斜面足部 平行縫、板状の腰帶 | 灰褐色 | 良好 | 白、褐、角 | ○ | |

| 道溝遺跡土器・土製品目録表(4) | | | | | | | | | |
|------------------|--------------|-------------|--------------|----|-----|------------------------|-----|----|---------|
| No. | 通帳 | 出土地点(様子の場所) | 所立 | 時間 | 規則 | 規則 | 規則 | 規則 | 備考 |
| 57 | 12325 | I | 縄文中期前段 研磨1型a | 深林 | 直口部 | 平口部、外側火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 多量、61箇 |
| 58 | 12316 | II | 縄文中期前段 研磨1型a | 深林 | 直口部 | 平口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 多量、4箇 |
| 59 | 15223 | II | 縄文中期前段 研磨1型a | 深林 | 直口部 | 平口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 60 | 12D17, 14E8 | II | 縄文中期前段 研磨1型a | 深林 | 直口部 | 平口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 61 | 12D23 | I, II | 縄文中期前段 研磨1型a | 深林 | 直口部 | 平口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 62 | 16S21 | II | 縄文中期前段 研磨1型a | 深林 | 直口部 | 平口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 63 | 16S17 | I, II | 縄文中期前段 研磨1型a | 深林 | 直口部 | 平口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 64 | 15C7 | II | 縄文中期前段 研磨1型a | 深林 | 直口部 | 平口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 65 | 14B14・19 | II | 縄文中期前段 研磨1型a | 深林 | 直口部 | 平口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 66 | 13E13 | I | 縄文中期前段 研磨1型a | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 67 | 16S24・25 | I | 縄文中期前段 研磨1型b | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 68 | 12D18・23 | I | 縄文中期前段 研磨1型b | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 69 | 16E17 | II | 縄文中期前段 研磨1型b | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 70 | 16E16 | I | 縄文中期前段 研磨1型b | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 71 | 12C23, 14E22 | I, II | 縄文中期前段 研磨2型 | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 72 | 15F6 | II | 縄文中期前段 研磨2型 | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 73 | 15P22, 16D8 | I, II | 縄文中期前段 研磨2型 | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 74 | 16E11 | II | 縄文中期前段 研磨2型 | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 75 | 15C16 | I | 縄文中期前段 研磨2型 | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 76 | 15E4・9 | II | 縄文中期前段 研磨2型 | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |
| 77 | 13D4 | II | 縄文中期前段 研磨2型 | 深林 | 直口部 | 直口部、U字型、直火照、両脇火照、手打模様等 | 圓柱形 | 良好 | 白・青色、6箇 |

※前記については別紙(4A3)断面表の記入用紙とお応じ正在している。

道港通透土器・土製品觀察表(5)

| No. | 通稱 | 出土地點(種々の場所) | 層位 | 輪郭、底脚 | 輪郭、底脚 | 底面 | 底面(cm) | 側面、端文 | 側面、端文 | 基人物 | 傾風 | 色調 | 備考 |
|-------------------------------------|--------|----------------|------|-------|-------|-----------------------------|---|-------|------------------|-----|-----------------|----|----|
| 番号十一については図版(4-3)解説表の定入項目の記載と相応している。 | | | | | | | | | | | | | |
| 78 | 16015 | 1. 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群 | 深鉢 | 深鉢 | 底径18.4 底高8.9 高さ(22.0) | 平底、斜削による斜面凹面、外周は直線、内周は圓弧、底部は斜削による斜面凹面、外周は直線、内周は圓弧 | 良好 | 手造り石英、砂利多量 | ② | 内面底部突出 | | |
| 79 | 14012 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群3階 | 深鉢 | 深鉢 | 底径17.0 底高7.1 高さ(22.0) | 平底、斜削による斜面凹面、平行斜面、外周は直線、内周は圓弧 | 良好 | 白・褐・砂 | ⑦ | | | |
| 80 | 13014 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群3階 | 深鉢 | 深鉢 | 底径17.1 底高7.0 高さ(22.0) | 平底、斜削による斜面凹面、斜い斜壁等による斜面凹面、外周は直線、内周は圓弧 | 良好 | 白多量、石英、角・陶 | ① | | | |
| 81 | 16021 | 1 縄文中期前葉 | Ⅲ群3階 | 深鉢 | 深鉢 | 底径19.5 底高7.0 高さ(22.0) | 平底、斜削による斜面凹面、外周は直線、内周は圓弧 | 良好 | 白多量 | ① | | | |
| 82 | 14022 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群3階 | 深鉢 | 深鉢 | 底径19.5 底高7.0 高さ(22.0) | 平底、斜削による斜面凹面、外周は直線、内周は圓弧 | 良好 | 白多量 | ① | | | |
| 83 | 15076 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群3階 | 深鉢 | 深鉢 | 底径19.5 底高7.0 高さ(22.0) | 平底、斜削による斜面凹面、外周は直線、内周は圓弧 | 良好 | 白多量、砂利・粘土 吸水性 | ① | 11種部外周炭化 物性質 | | |
| 84 | 13031 | 1. 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群3階 | 深鉢 | 深鉢 | 底径19.5 底高7.0 高さ(22.0) | 平底にえぐみ、手造りの斜削凹面、外周は直線、内周は圓弧 | 良好 | 白多量、砂利・陶 | ① | | | |
| 85 | 15077 | 1 縄文中期前葉 | Ⅲ群3階 | 深鉢 | 深鉢 | 底径19.5 底高7.0 高さ(22.0) | 平底にえぐみ、手造りの斜削凹面、外周は直線、内周は圓弧 | 良好 | 白多量、砂利 | ① | | | |
| 86 | 14028 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群4階 | 有孔鉢 | 有孔鉢 | 底径13.0 底高5.8 高さ(17.8) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利・塑性 物性質 | ① | 外周削り、内面 底部突出 | | |
| 87 | 14016 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群4階 | 有孔鉢 | 有孔鉢 | 底径13.0 底高5.8 高さ(17.8) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利 | ⑤ | | | |
| 88 | 15012 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群 | 小切鉢 | 小切鉢 | 底径6.0 底高5.0 高さ(10.0) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利 | ① | | | |
| 89 | 17011 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群 | 小切鉢 | 小切鉢 | 底径5.9 底高5.5 高さ(10.0) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利 | ① | | | |
| 90 | 15019 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群 | 小切鉢 | 小切鉢 | 底径5.9 底高5.4 高さ(10.0) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利 | ⑤ | | | |
| 91 | 14011 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群 | 小切鉢 | 小切鉢 | 底径5.9 底高5.4 高さ(10.0) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利 | ① | | | |
| 92 | 16038 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群 | 小切鉢 | 小切鉢 | 底径5.9 底高5.4 高さ(10.0) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利 | ① | 外周スラブ化 物性質 | | |
| 93 | 13010 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群 | 小切鉢 | 小切鉢 | 底径5.9 底高5.4 高さ(10.0) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利・塑性 物性質 | ① | | | |
| 94 | 130317 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群 | 小切鉢 | 小切鉢 | 底径5.9 底高5.4 高さ(10.0) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利 | ① | | | |
| 95 | 13032 | 日 縄文中期前葉 | Ⅲ群 | 小切鉢 | 小切鉢 | 底径5.9 底高5.4 高さ(10.0) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利 | ① | | | |
| 96 | 14014 | 1 縄文中期前葉 | Ⅲ群 | 小切鉢 | 小切鉢 | 底径5.9 底高5.4 高さ(10.0) | 側面切欠き、斜削による斜面凹面、底部へ折折 | 白色 | 白多量、砂利 | ① | | | |

道灌追跡土器・土製品観察表(6)

| No. | 通稱 | 出土場所(現地名稱) | 層位 | 作成年 代文(中間層) | 焼成 方法 | 断面 | 法縫(cm) | 異形部 | 調査・鑑定 | 著者 | | |
|-----|-----------------|------------|-------|----------------|----------|--------|--------|-----------------------|-------|----------|-------------|-----------------|
| | | | | | | | | | | 横穴 1号 | 横穴 2号 | 横穴 3号 |
| 97 | 12022 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、折り返し口縫、粘合縫又は直縫 | 赤褐色 | 良好 | 赤褐色 | 新士 1? |
| 98 | 12023 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、縄文加厚R1.4 | 赤褐色 | 普通 | 白多量、少部分多量 | 新士 1? |
| 99 | 14159 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面、内縫内側面 | 赤褐色 | 良好 | 粗砂 | 外周六付骨 |
| 100 | 12023 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面、内縫内側面 | 赤褐色 | 良好 | 粗砂 | 赤褐色 |
| 101 | 13022 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面、内縫内側面 | 赤褐色 | 良好 | 粗砂 | 赤褐色 |
| 102 | 12021 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 普通 | 半透明な石英量、粗砂 | 新士 2? |
| 103 | 16012 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白多量、角・砂 | 新士 1? |
| 104 | 14125 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白多量、角・砂 | 新士 1? |
| 105 | 14172 - 16 - 17 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 普通 | 白・極少量 | 新士 3? |
| 106 | 1506 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白多量、粗砂 | 内輪削痕上・下2 又付前 |
| 107 | 1603 | 1, 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 普通 | 白多量、石英・蛋白 | 新士 1? |
| 108 | 15072 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白多量、角・粗砂 | 新士 1? |
| 109 | 12012 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白少量 | 外周附物付有 |
| 110 | 13015 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 粗砂 | 赤褐色 |
| 111 | 12019 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白・少量 | 赤褐色 |
| 112 | 14120 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白多量、蛋白 | 新士 1? |
| 113 | 13020 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 赤褐色 | 底部水垢化物 付着 |
| 114 | 14014 | N | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 半透明な石英、粗砂多量 | 赤褐色 |
| 115 | 1603. 1701 | 1, 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白多量、粗砂 | 外周附物付有 |
| 116 | 16023 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 半透明量、粗砂 | 赤褐色 |
| 117 | 13014 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白・角・粗砂 | 新士 1? |
| 118 | 12023 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白・角・粗砂 | 内輪削痕付有 |
| 119 | 12017 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 普通 | 白多量、小部分 | 内輪削痕付有 |
| 120 | 14016 | 日 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白・粗砂・半透明な石英 | 新士 1? |
| 121 | 12016 - 17 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白・角・粗砂 | 新士 3? |
| 122 | 12023 | 1 | 縄文中期層 | 縄文1号 ～縄文2号 | 窯林 | 1.18cm | 1.18cm | 平口縫、口縫形切妻、外縫外側面 | 赤褐色 | 良好 | 白・粗砂・角・粗砂 | 新士 1? |

遺構遺跡土器・土製品目録表(7)

測量について(第Ⅲ章A3) 調査表の記入項目の定義とおおむねしている。

| No. | 通番 | 出土地址(保有者) | 解説 | 時間 | 縦別・系統 | 施引 | 法面(cm) | 奥行形態 | 調査・筆文 | 色調 | 地質 | 人・物 | 備考 |
|-----|-------------|-----------|------|--------|-------|-------|--------|-------|---------------------------|-----|-----|-----|---------------|
| 123 | 16133 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰白色 | 帶状文、兩孔口直文 | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 白・粗砂・粗目・粒目・細目 |
| 124 | 16128 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰白色 | 平上腹、兩孔口直文 | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 白・粗砂・粗目 |
| 125 | 16164 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰白色 | 帶状文、兩孔口直文 | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 外周底化物付 |
| 126 | 161220 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰白色 | 平上腹、口唇部に「束縛文」、軸東側「横方右」灰白色 | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 白・褐・石英・角 |
| 127 | 16166 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 帶状文、兩孔口直文 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 外周底化物付 |
| 128 | 16104 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 帶状文、兩孔口直文 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 外周底化物付 |
| 129 | 161016 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 帶状文、兩孔口直文 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 白・粗砂・粗目 |
| 130 | 12G1 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 平上腹、口唇部に「束縛文」、軸東側「横方右」灰白色 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 白・粗砂多量 |
| 131 | 1715 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」による點狀状跡、竹管状底色 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 白 |
| 132 | 11121 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」による点狀状跡、竹管状底色 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 白・粗砂 |
| 133 | 表解 | (人蔵系) | 1 | 縦文・平頭後 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、長い浅文 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 外周底化物付 |
| 134 | 14F10・17 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭後 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、長い浅文 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 白・粗砂・白・粗砂 |
| 135 | 16E16・17・22 | 出土地(保有者) | 1, 2 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」による点狀状跡、竹管状底色 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 白・粗砂多量 |
| 136 | 12C23 | 出土地(保有者) | 1 | 縦文・平頭前 | 深林 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」による点狀状跡、竹管状底色 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 白・粗砂 |
| 137 | 14D17 | 1. 不明 | 土壟器? | 1 | 平安時代 | 土壙器 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | ハケヌ、無調査 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 粗砂・粗砂多量・石英 |
| 138 | 14C17 | 1 | 平安時代 | 土壙器 | 深 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、口唇部切 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 粗砂・粗砂 |
| 139 | 13B23 | 1 | 平安時代 | 土壙器 | 深 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、口唇部切 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 外周底化物付 |
| 140 | 14B24 | 1 | 平安時代 | 土壙器 | 無台輪 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、口唇部切 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 粗砂・粗砂 |
| 141 | 13B23 | 1, 2 | 平安時代 | 土壙器 | 深 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、口唇部切 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 外周底化物付 |
| 142 | 13B24 | 1 | 平安時代 | 土壙器 | 深 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、口唇部切 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 外周底化物付 |
| 143 | 13B24 | 1 | 平安時代 | 土壙器 | 深 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、口唇部切 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 外周底化物付 |
| 144 | 14C10 | 1 | 平安時代 | 土壙器 | 無台輪? | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、口唇部切 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 外周底化物付 |
| 145 | 13C12 | 1 | 平安時代 | 土壙器 | 無台輪 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、口唇部切 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 粗砂・粗砂 |
| 146 | 13B25 | 1 | 平安時代 | 土壙器 | 無台輪 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、口唇部切 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 粗砂・粗砂 |
| 147 | 15E19 | 1 | 平安時代 | 土壙器 | 無台輪 | 1.1頭部 | 1.1頭部 | 灰黑色 | 「1.1頭部十横方右」、口唇部切 | 灰黑色 | 灰黑色 | 良好 | 粗砂・粗砂 |

遺跡遺跡土器・土製品目録表(8)

| No. | 通帳 | 出土地点(様式の場所) | 解説 | 時間 | 縦幅・横幅 | 断面 | 法縦(cm) | 奥行き(cm) | 測量・墨文等 | 色調 | 地風 | 器人物 | 備考 |
|-----|----------------|-------------|------|------|-------|------------------------|------------------------|------------------|--------|----|----------|---------|----------------|
| 148 | 15E19 | II | 平安時代 | 黑色土器 | 無合縫 | 11往13.1 底部 高さ6.7 | 11往6.7 底部 高さ4.7 | 外周口クロケズリ、内腹ヘタミガキ | 褐色 | 不良 | 砂塵多量 | 無土人物 | 147と併せて 2件付 |
| 149 | 14E24・25 | I, II | 平安時代 | 黑色土器 | 無 | 11往13.5 底部 高さ6.0 | 11往6.0 底部 高さ6.0 | 外周口クロケズリ、内腹ヘタミガキ | 褐色 | 良好 | 褐色、細紋 | 無土人物 | |
| 150 | 15D1・5・6 | I, II | 平安時代 | 土器 | 無合縫 | 11往13.0 底部 高さ9.2 | 11往13.0 底部 高さ6.6 | クロロナデ、内腹ヘタミガキ | 褐色 | 良好 | 褐色、細紋 | 無土人物 | |
| 161 | 13H23 | I, II | 平安時代 | 黑色土器 | 有合縫 | 11往9.2 底部 高さ6.6 | 11往9.2 底部 高さ6.6 | 内腹ヘタミガキ | 褐色 | 良好 | 砂塵多量 | 無土人物 | |
| 162 | 13C17 | I | 平安時代 | 黑色土器 | 有合縫 | 11往9.2 底部 高さ6.6 | 11往9.2 底部 高さ6.6 | 付け落ち | 淡褐色 | 良好 | 褐色、砂塵 | 無土人物 | |
| 163 | 13H24 | II | 平安時代 | 黑色土器 | 无 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | クロロナデ | 褐色 | 良好 | 白・青斑 | 無土人物 | |
| 164 | 13H24 | I | 平安時代 | 黑色土器 | 無 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | クロロナデ | 褐色 | 良好 | 白・青斑 | 無土人物 | |
| 155 | 14D17・18, 15D4 | I | 平安時代 | 黑色土器 | 無 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | クロロナデ | 褐色 | 良好 | 白・青斑 | 無土人物 | |
| 166 | 14H22, 15D10 | I | 平安時代 | 黑色土器 | 無 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 付け落ち | 褐色 | 良好 | 白・青斑 | 無土人物 | |
| 167 | 14B14 | I | 平安時代 | 黑色土器 | 無 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 付け落ち | 褐色 | 良好 | 褐色、砂塵 | 無土人物 | |
| 158 | 14D17・22 | I | 平安時代 | 黑色土器 | 無 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 付け落ち | 褐色 | 良好 | 白・青斑 | 無土人物 | |
| 159 | 14D21・22 | I | 平安時代 | 黑色土器 | 無 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 11往15.0 底部 高さ6.0 | 付け落ち | 褐色 | 良好 | 白・青斑 | 無土人物 | |
| 160 | 14E3・4 | I, II | 平安時代 | 土器 | 長縫 | 11往23.3 底部 高さ6.0 | 11往23.3 底部 高さ6.0 | クロロナデ、カラヌ | 褐色 | 良好 | 褐色、細紋 | 無土人物 | |
| 161 | 14D22 | I | 平安時代 | 土器 | 長縫 | 11往23.5 底部 ナ子 | 11往23.5 底部 ナ子 | クロロナデ、カラヌ | 褐色 | 良好 | 砂塵多量、砂塵 | 無土人物 | |
| 162 | 13B24 | I | 平安時代 | 土器 | 長縫 | 11往23.4 底部 ナ子 | 11往23.4 底部 ナ子 | クロロナデ | 褐色 | 良好 | 褐色、細紋 | 無土人物 | |
| 163 | 15D1 | II | 平安時代 | 土器 | 長縫 | 11往24.6 底部 ナ子 | 11往24.6 底部 ナ子 | クロロナデ、カラヌ | 褐色 | 良好 | 褐色、細紋 | 無土人物 | |
| 164 | 14D20 | I | 平安時代 | 土器 | 長縫 | 11往20.8 底部 ナ子 | 11往20.8 底部 ナ子 | クロロナデ、カラヌ | 褐色 | 良好 | 砂塵多量、砂塵 | 無土人物 | |
| 165 | 13C16 | I | 平安時代 | 土器 | 長縫 | 11往25.5 底部 ナ子 | 11往25.5 底部 ナ子 | カラヌ | 褐色 | 良好 | 褐色、細紋 | 無土人物 | |
| 166 | 14D17 | I | 平安時代 | 土器 | 長縫 | 11往25.4 底部 ナ子 | 11往25.4 底部 ナ子 | クロロナデ、カラヌ | 褐色 | 良好 | 褐色、細紋 | 無土人物 | |
| 167 | 14B24 | I | 平安時代 | 土器 | 小要 | 11往25.6 底部 ナ子 | 11往25.6 底部 ナ子 | 内腹カラヌ | 褐色 | 良好 | 褐色、細紋 | 無土人物 | |
| 168 | 15D2 | II | 平安時代 | 土器 | 長縫 | 11往25.6 底部 ナ子 | 11往25.6 底部 ナ子 | — | 褐色 | 良好 | 褐色 | 無土人物 | |
| 169 | 14B19 | I | 平安時代 | 土器 | 小要 | 11往25.6 底部 ナ子 | 11往25.6 底部 ナ子 | クロロナデ | 褐色 | 不良 | 褐色、細紋 | 無土人物 | |
| 170 | 13B22・23 | I | 平安時代 | 土器 | 無 | 11往25.6 底部 ナ子 | 11往25.6 底部 ナ子 | 内腹内凹 | 褐色 | 良好 | 褐色、砂塵 | 外面部化物付着 | |
| 171 | 13B24 | I | 平安時代 | 土器 | 長縫 | 11往25.6 底部 ナ子 | 11往25.6 底部 ナ子 | 内腹内凹 | 褐色 | 良好 | 砂塵多量 | 外面部化物付着 | |
| 172 | 14D8 | II | 平安時代 | 土器 | 長縫 | 11往25.6 底部 ナ子 | 11往25.6 底部 ナ子 | クロロナデ | 褐色 | 良好 | 褐色、青斑 | 外面部化物付着 | |
| 173 | 13E16, 14C1・2 | 中・I | 平安時代 | 土器 | 無 | 11往25.6 底部 ナ子 | 11往25.6 底部 ナ子 | — | 褐色 | 良好 | 褐色、砂塵、青斑 | 外面部化物付着 | |

遺漏遺跡土器・土製品観察表 (9)

| No. | 通帳 | 出土地点(様式分類) | 所立 | 時間 | 機別・系統 | 施影 | 法縫(cm) | 異形(形態) | 測量・墨文等 | 色調 | 地風 | 質 | 器人物 | 筆士 | 備考 |
|-----|-------|------------|----|-------|-------|-------|--------------------------|-----------------------|------------|------|----|--------|-----|----|--------------------|
| 174 | 14D1 | 1 | | 平安時代 | 土瓶器 | 小要 | 11往7.0 18往6.0 (底部) | クロコナギ | | 青灰褐色 | 良好 | 粗良 | | | |
| 175 | 13B23 | 日 | | 平安時代 | 土瓶器 | 小要 | 11往11.0 (底部) | クロコナギ、カルキ | | 褐色 | 不良 | 粗良、粗妙 | | | 外表面を受け剥げている。外表面化粧材 |
| 176 | 14C24 | 日 | | 平安時代 | 土瓶器 | 小要 | 底径6.5 | 底部外カケアリ、ロクロナギ、開底斜切 | | 褐色 | 良好 | 粗良、粗妙 | | | |
| 177 | 15B23 | | | 平安時代 | 土瓶器 | 小要 | 底径6.8 | 底部 | クロコナギ、底部斜切 | 灰褐色 | 良好 | 粗良 | | | |
| 178 | 16F23 | 日 | | 萬葉中期用 | 土瓶 | 中空・土瓶 | 5.1 高径6.0 (底部) | 1本筋きによる花輪文(渦巻、平行巻文など) | | 淡褐色 | 良好 | 白・粗妙多層 | | | |

※新社について(図版4A3) 新社表の記入項目の記載とお応している。

道灌遺跡石器・石製品観察表(1)

石器観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 形態 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 素材 | 遺存状態 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|-----|--------|-------|--------|-------|-----|-----|-----------------|----|
| 179 | 16E | 22 | I | 西林無 | 1.9 | 2.0 | 0.3 | 0.6 | 黒曜石 | 天然 | 局部磨製石器。S125より出土 | |
| 180 | 16E | 22 | II | 西林無 | 2.9 | 1.3 | 0.4 | 1.0 | 黒曜石 | 片側欠 | | |
| 181 | 12E | 11 | II | 平基 | 1.8 | 1.4 | 0.4 | 0.9 | 4ノワ | 楕長 | 尖端崩欠 | |

石器観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 形態 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 素材 | 遺存状態 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|------|--------|-------|--------|-------|---------|----|------|----|
| 182 | 15C | 3 | II | 楕型石器 | 4.4 | 2.0 | 0.7 | 18.4 | 黒色磁赤安山岩 | 楕長 | 完形 | |
| 183 | 15E | 19 | II | 楕型石器 | 2.7 | 5.1 | 0.6 | 5.8 | 黒色磁赤安山岩 | 楕長 | 完形 | |

両極利錐形のある石器観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 骨部部位 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 素材 | 遺存状態 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|------|--------|-------|--------|-------|---------|----|------|----|
| 184 | 15E | 5 | II | 2個1対 | 2.5 | 3.2 | 0.5 | 4.7 | 鐵石英 | 不明 | | |
| 185 | 16F | 23 | II | 2個1対 | 3.0 | 4.8 | 1.0 | 17.2 | 黒色磁赤安山岩 | 楕長 | | |
| 186 | 15E | 19 | II | 4個2対 | 1.9 | 3.4 | 0.7 | 5.8 | 黒色磁赤安山岩 | 楕長 | | |
| 187 | 16E | 22 | II | 2個1対 | 2.5 | 1.8 | 0.7 | 4.1 | チート | 楕長 | | |

不定形石器観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 素材 | 折断 | 調整 | 使用部位 | 備考 |
|-----|-------|-------|-----|--------|-------|--------|-------|---------|----|----|-----|-------------|----|
| 188 | 15E | 14 | II | 5.0 | 9.6 | 1.4 | 62.2 | 黒色磁赤安山岩 | 楕長 | 有 | 片面鍛 | 刃部は不連続剥離 | |
| 189 | 14D | 13 | V | 6.0 | 10.2 | 3.3 | 118.7 | 黒岩 | 楕長 | 無 | 片面鍛 | 刃部の摩耗・荒れ著しい | |
| 190 | 14E | 23 | II | 7.7 | 10.0 | 2.1 | 139.6 | 黒色磁赤安山岩 | 楕長 | 無 | 片面鍛 | 刃部は抉入状を呈する | |
| 191 | 13B | 25 | II | 8.3 | 7.7 | 2.2 | 163.5 | 砂岩 | 楕長 | 有 | 片面鍛 | 刃部は不連続剥離 | |
| 192 | 15F | 12 | III | 4.8 | 6.7 | 1.0 | 34.2 | 良岩 | 楕長 | 無 | 片面鍛 | 刃部は原形剥離 | |
| 193 | 15E | 23 | II | 3.8 | 10.4 | 2.1 | 75.4 | 凝灰岩 | 楕長 | 無 | 底錐 | 刃部が荒れ著しい | |
| 194 | 16C | 17 | II | 10.6 | 6.6 | 1.6 | 144.5 | 凝灰岩 | 楕長 | 有 | 底錐 | 刃部は不連続剥離 | |

打製石斧観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 分類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 素材 | 刃削断面形 | 遺存状態 | 側鋸つし | 備考 |
|-----|-------|-------|----|----|--------|-------|--------|-------|--------|----|-------|------|------|-------|
| 195 | 14E | 20 | I | A | 12.4 | 5.5 | 3.2 | 253.1 | 角四石安山岩 | 楕長 | 片刃 | 完形 | 有 | |
| 196 | 14D | 22 | II | A | 11.0 | 4.3 | 2.0 | 120.3 | 砂岩 | 楕長 | 両刃 | 完形 | 有 | |
| 197 | 16D | 20 | I | A | 10.7 | 6.0 | 2.1 | 189.9 | 砂岩 | 楕長 | 片刃 | 完形 | 有 | |
| 198 | 16C | 3 | I | A | 11.0 | 6.7 | 2.4 | 195.3 | 良岩 | 楕長 | 片刃 | 完形 | 有 | |
| 199 | 13F | 12 | I | A | 11.3 | 5.3 | 2.7 | 156.3 | 良岩 | 楕長 | 片刃 | 完形 | 有 | |
| 200 | 13D | 5 | I | B | 10.1 | 5.6 | 2.8 | 216.2 | 良岩 | 楕長 | 片刃 | 刃部欠 | 無 | |
| 201 | 15D | 2 | I | B | 13.7 | 6.3 | 2.1 | 223.8 | 良岩 | 片刃 | 両刃 | 完形 | 有 | |
| 202 | 16E | 21 | I | B | 9.6 | 4.1 | 2.2 | 139.7 | 良岩 | 片刃 | 不明 | 完形 | 無 | |
| 203 | 13B | 13 | I | B | 8.9 | 3.8 | 1.4 | 67.6 | 良岩 | 楕長 | 両刃 | 完形 | 有 | |
| 204 | 12D | 22 | II | C | 9.0 | 4.9 | 1.9 | 100.2 | 角四石安山岩 | 楕長 | 両刃 | 完形 | 有 | 亂化著しい |

磨製石斧観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 分類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 刃削断面形 | 遺存状態 | 革輪打 | 備考 |
|-----|-------|-------|-----|----|--------|-------|--------|-------|-----|-------|------|-----|----|
| 205 | 16C | 3 | I | A | 12.1 | 6.8 | 2.1 | 263.2 | 良岩 | 楕長 | 片刃欠 | 無 | |
| 206 | 12E | 23 | II | A | 9.7 | 4.9 | 3.1 | 202.8 | 砂岩 | 両刃 | 刃部欠 | 無 | |
| 207 | 13D | 13 | IV | A | 9.4 | 4.1 | 2.0 | 147.8 | 鈍粒岩 | 両刃 | 様ぼ | 完形 | 無 |
| 208 | 16D | 3 | I | A | 7.5 | 2.7 | 1.4 | 52.7 | 砂岩 | 両刃 | 刃部欠 | 無 | |
| 209 | 13C | 11 | I | A | 7.7 | 4.1 | 2.1 | 98.9 | 鈍粒岩 | 両刃 | 様ぼ | 完形 | 有 |
| 210 | 17E | 2 | II | B | 5.6 | 3.1 | 0.9 | 27.6 | 鈍粒岩 | 両刃 | 完形 | 無 | |
| 211 | 16D | 3 | I | B | 5.8 | 3.4 | 1.0 | 27.6 | 鈍粒岩 | 片刃 | 完形 | 無 | |
| 212 | 17D | 10 | II上 | B | 5.2 | 2.5 | 1.0 | 20.6 | 鈍粒岩 | 両刃 | 完形 | 無 | |

磨製石斧未成品観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|--------|-------|--------|-------|-----|----|
| 213 | 14D | 13 | II | 8.4 | 4.3 | 1.9 | 99.3 | 鈍粒岩 | |
| 214 | 15E | 16 | II | 9.6 | 5.6 | 1.7 | 164.1 | 鈍粒岩 | |
| 215 | 13B | 20 | I | 10.9 | 5.5 | 3.0 | 249.7 | 鈍粒岩 | |

観察表

道灌遺跡石器・石製品観察表(2)

敲磨石觀察表

表面の磨痕・敲打痕○(両面に有り), ○(片面に有り), ×(なし).
 個体の磨痕・敲打痕○(片面側に有り), ○(片側端に有り), ×(なし).
 端部の敲打痕○(両端に有り), ○(片端に有り), ×(なし).

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 分類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 表面 磨痕 個体 端部 | 側 面 磨痕 個体 端部 | 進存状態 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|----|--------|-------|--------|-------|--------|----------------------|--------------------------|------|-----|
| 216 | 14E | 22 | II | A | 8.4 | 6.5 | 5.6 | 403.9 | 砂岩 | ○ | × | ○ | 完形 |
| 217 | 17D | 5 | II | A | 10.2 | 8.2 | 4.7 | 468.6 | 砂岩 | ○ | × | ○ | 完形 |
| 218 | 15D | 10 | I | A | 12.1 | 7.1 | 4.0 | 491.3 | 鰐歯岩 | ○ | × | ○ | 被熱 |
| 219 | 14E | 8 | II | A | 10.2 | 6.3 | 4.8 | 474.6 | 砂岩 | ○ | ○ | × | 完形 |
| 220 | 14E | 19 | I | A | 9.1 | 9.3 | 5.5 | 644.5 | 鰐歯岩 | ○ | × | × | 完形 |
| 221 | 16D | 6 | II | A | 8.5 | 10.6 | 3.4 | 451.6 | 砂岩 | ○ | ○ | × | 完形 |
| 222 | 14F | 1 | I | B | 15.2 | 6.6 | 4.8 | 306.7 | 砂岩 | × | ○ | ○ | 完形 |
| 223 | 13C | 7 | II | B | 12.0 | 4.9 | 3.4 | 264.9 | 安山岩 | × | ○ | × | 完形 |
| 224 | 15B | 10 | I | B | 11.2 | 6.0 | 3.0 | 287.1 | 砂岩 | × | ○ | ○ | 完形 |
| 225 | 16C | 22 | II | B | 11.3 | 7.0 | 3.9 | 421.7 | 角閃石安山岩 | ○ | ○ | × | 完形 |
| 226 | 12D | 22 | II | B | 12.3 | 4.2 | 3.1 | 232.8 | 砂岩 | ○ | ○ | ○ | 完形 |
| 227 | 14F | 17 | II | C | 11.9 | 6.7 | 2.7 | 337.3 | 角閃石安山岩 | ○ | ○ | ○ | 完形 |
| 228 | 14F | 6 | II | C | 6.0 | 4.4 | 3.3 | 106.0 | 砂岩 | × | ○ | ○ | 完形 |
| 229 | 14C | 5 | II | C | 5.9 | 8.7 | 3.3 | 195.7 | 砂岩 | × | ○ | ○ | 完形 |
| 230 | 16C | 16 | I | C | 7.2 | 8.0 | 3.2 | 260.8 | 角閃石安山岩 | × | ○ | ○ | 完形 |
| 231 | 13E | 3 | II | D | 14.0 | 7.6 | 6.6 | 847.8 | 角閃石安山岩 | ○ | ○ | × | 完形 |
| 232 | 16C | 14 | II | D | 18.4 | 8.4 | 4.4 | 951.4 | 鰐歯岩 | ○ | ○ | ○ | 完形 |
| 233 | 12F | 16 | II | D | 13.6 | 7.2 | 7.1 | 718.1 | レイ岩 | × | ○ | ○ | 完形 |
| 234 | 15E | 6 | II | D | 13.0 | 7.0 | 5.8 | 896.6 | 角閃石安山岩 | ○ | ○ | × | 完形 |
| 235 | 15D | 10 | II | D | 12.3 | 5.8 | 4.7 | 631.4 | 砂岩 | ○ | ○ | ○ | 完形 |
| 236 | 16E | 16 | II | D | 9.5 | 7.3 | 6.5 | 571.4 | 角閃石安山岩 | × | ○ | × | 完形 |
| 237 | 13F | 21 | I | E | 12.9 | 6.0 | 5.7 | 630.0 | 角閃石安山岩 | × | × | ○ | 完形 |
| 238 | 12D | 17 | II | E | 13.9 | 6.7 | 6.4 | 967.0 | 角閃石安山岩 | ○ | ○ | ○ | 完形 |
| 239 | 16F | 6 | I | E | 11.1 | 6.0 | 6.7 | 577.6 | 角閃石安山岩 | ○ | ○ | ○ | 2/3 |
| 240 | 16B | 10 | II | 不可 | 8.7 | 13.5 | 4.6 | 765.4 | 鰐歯岩 | ○ | ○ | ○ | 完形 |

砥石觀察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 分類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 進存状態 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|----|--------|-------|--------|--------|-----|------|------------|
| 241 | 16B | 24 | II | A | 17.3 | 12.3 | 4.5 | 1081.0 | 砂岩 | 1/2 | 破損面も使用している |
| 242 | 14D | 19 | II | A | 18.4 | 20.8 | 7.5 | 3200.0 | 砂岩 | 1/2 | |
| 243 | 11F | 25 | II | A | 13.3 | 12.2 | 2.4 | 434.2 | 砂岩 | 1/3 | |
| 244 | 15F | 6 | II | A | 32.3 | 14.9 | 10.6 | 7000.0 | 砂岩 | 2/3 | 破損面も使用している |
| 245 | 14E | 25 | II | B | 5.7 | 7.8 | 1.8 | 102.0 | 砂岩 | 2/3 | 内削き砥石 |
| 246 | 16D | 18 | II | B | 5.5 | 11.7 | 3.2 | 194.0 | 砂岩 | 2/3 | 内削き砥石 |
| 247 | 4F | 19 | I | B | 6.9 | 5.3 | 1.5 | 51.5 | 鰐歯岩 | 1/3 | 破損面は新しい |
| 248 | 12E | 14 | I | B | 7.3 | 2.7 | 1.2 | 27.4 | 鰐歯岩 | 1/3 | |

石皿觀察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 分類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 進存状態 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|----|--------|-------|--------|---------|--------|------|----|
| 249 | 16D | 8 | II | A | 17.6 | 21.0 | 8.4 | 2800.0 | 角閃石安山岩 | 1/2 | |
| 250 | 15C | 10 | I | A | 14.9 | 13.2 | 5.5 | 968.3 | 角閃石安山岩 | 1/3 | |
| 251 | 16B | 20 | I | B | 44.5 | 11.7 | 11.2 | 10500.0 | 砂岩 | 完形 | |
| 252 | 13H | 2 | I | B | 25.9 | 15.2 | 1.9 | 1049.0 | 安山岩 | 完形 | 被熱 |

三角錐形石器観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 分類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 進存状態 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|------|--------|-------|--------|-------|-----|---------------|----|
| 253 | 14E | 1 | I | 15.1 | 5.3 | 4.1 | 426.3 | 鰐歯岩 | 刃部欠 | 正面の一部は敲打による成形 | |

石核觀察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 分類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|------|--------|-------|--------|---------|--------------|----|
| 254 | 13G | 11 | II | 11.3 | 11.2 | 2.7 | 417.7 | 黑色鰐歯安山岩 | 周縁から正面面に交互削離 | |

鏡面の光沢を有する石器観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 分類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 進存状態 | 備考 |
|-----|-------|-------|-----|-----|--------|-------|--------|-------|-----|----------|---------------|
| 255 | 16D | 10 | I | 9.8 | 6.1 | 3.7 | 328.3 | 真岩 | 完形 | 鏡面有り | |
| 256 | 15C | 8 | III | A | 8.4 | 7.4 | 2.4 | 183.3 | 鰐歯岩 | 完形 | 鏡面有り。ほぼ全面光沢有り |
| 257 | 14D | 23 | I | 4.5 | 6.0 | 3.5 | 122.7 | チャート | 1/2 | ほぼ全面光沢有り | |

石棒観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 分類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 進存状態 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|------|--------|-------|--------|-------|-----|---------|----|
| 258 | 15E | 4 | II | 14.2 | 9.5 | 8.2 | 1029.0 | 砂岩 | 1/3 | 敲打による成形 | |

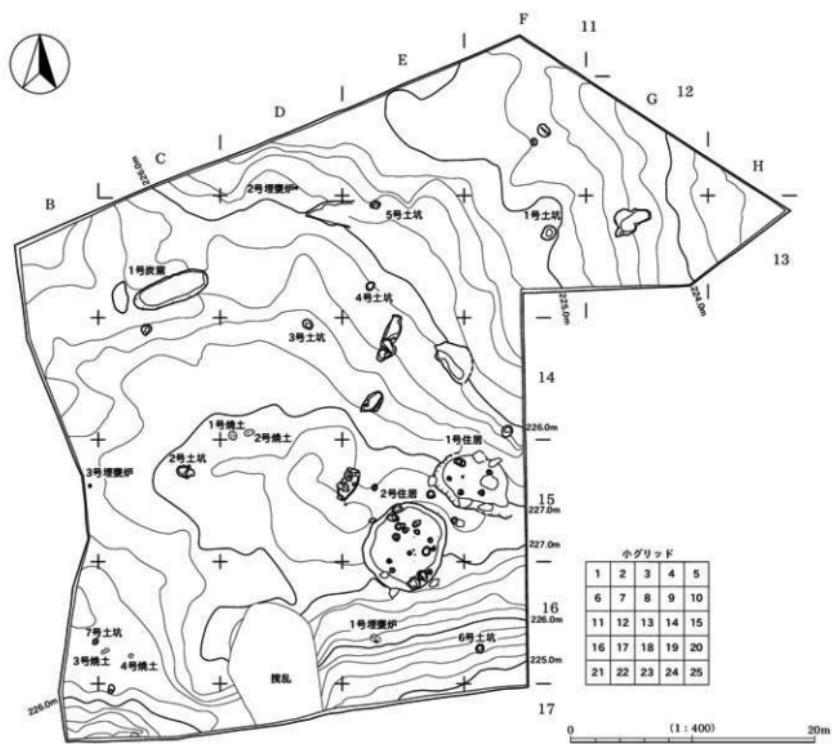
玦状耳飾り観察表

| No. | 大グリッド | 小グリッド | 層位 | 分類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 進存状態 | 備考 |
|-----|-------|-------|----|-----|--------|-------|--------|-------|-----|------|----|
| 259 | 16E | 7 | II | 上部 | 3.9 | 2.3 | 0.7 | 8.4 | 滑石 | 1/3 | |
| 260 | 12D | 24 | II | 1.8 | 1.4 | 0.4 | 1.0 | 滑石 | 2/3 | | |

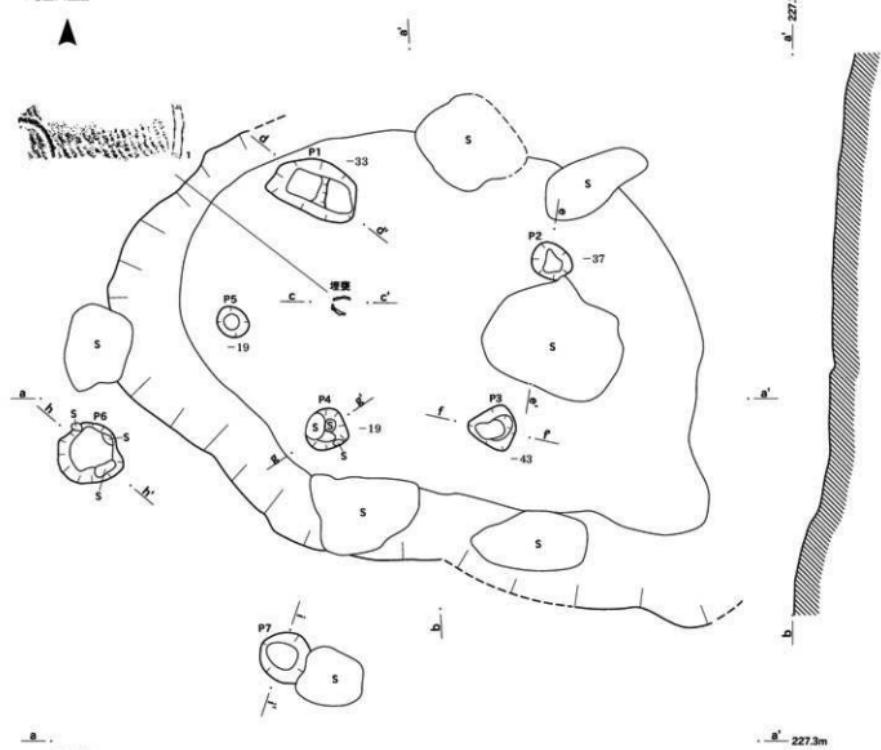
図 版

凡 例

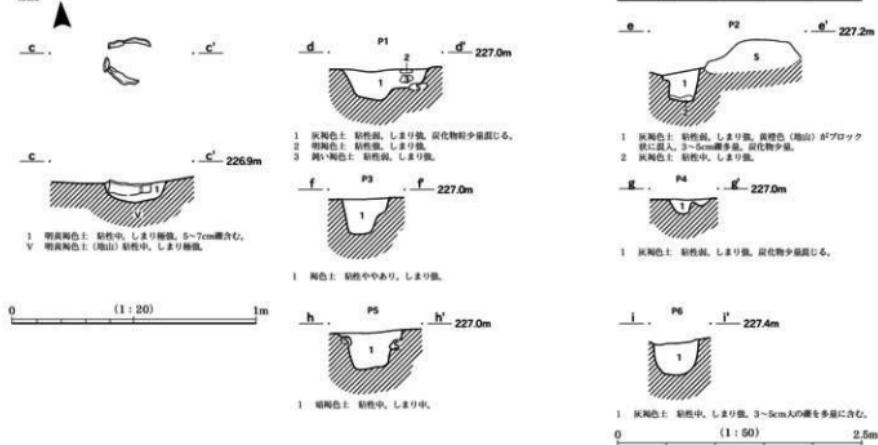
- 1 土器写真的スケールは実測図に対応。
- 2 土器破片の実測図は縄文土器は断面図の左側に外面図、右側に内面図を配置した。古代の土器は、左側に内面図、右側に外面図を配置した。



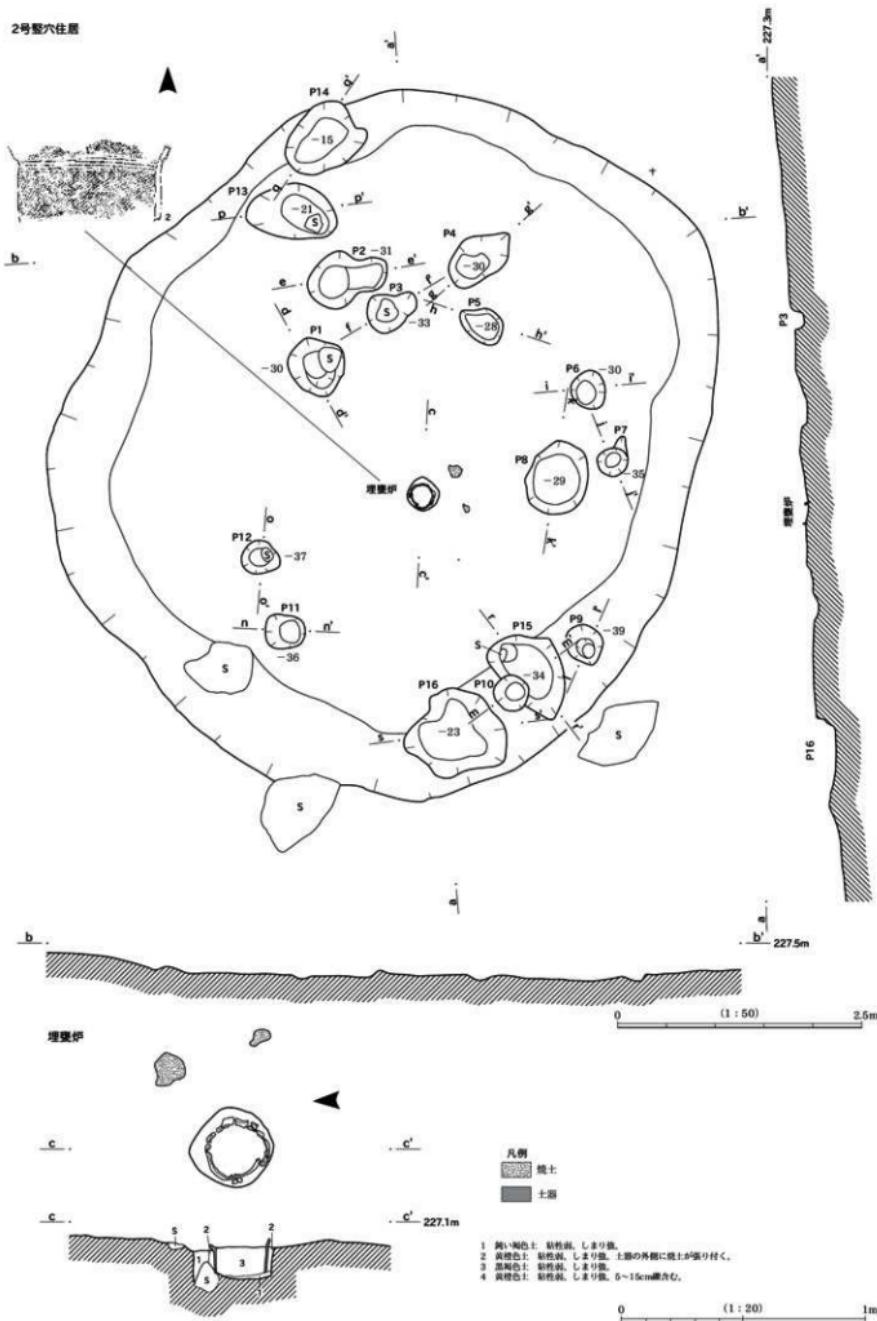
1号督穴住居



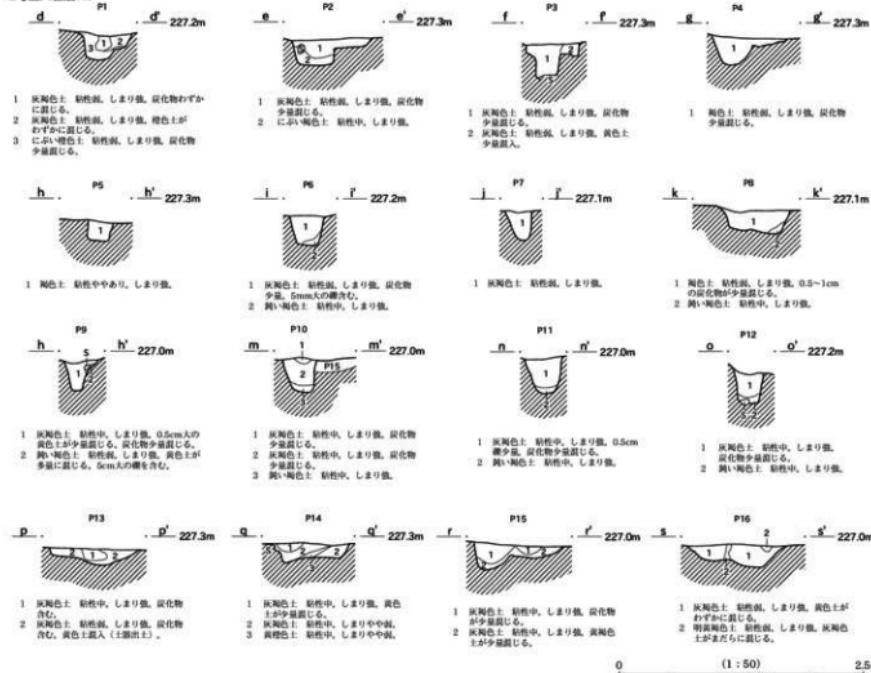
總覽



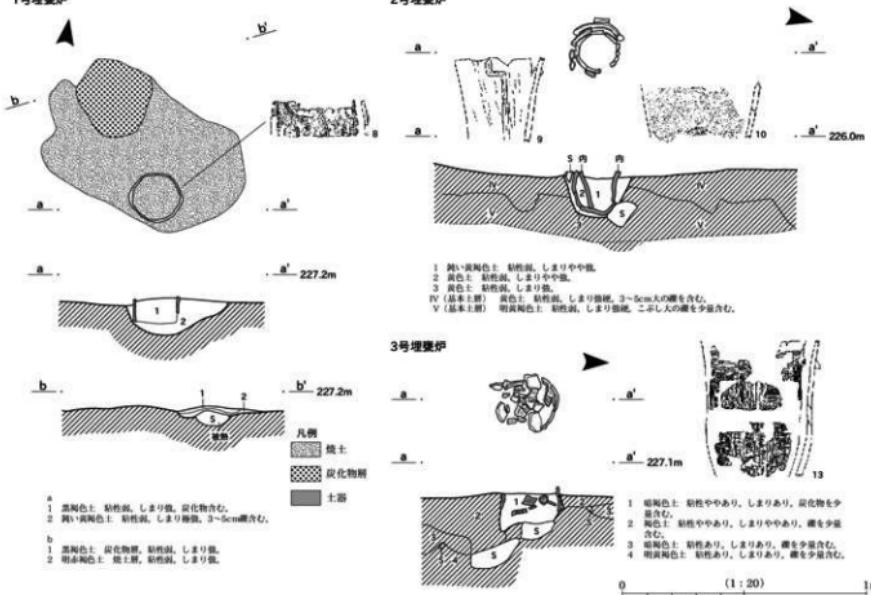
2号竪穴住居



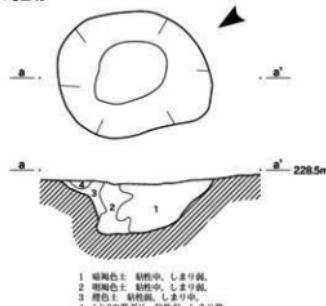
2号竪穴住居 Pit



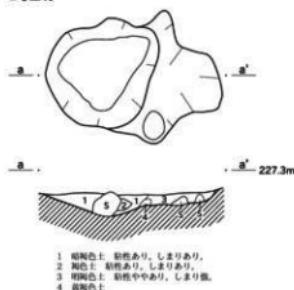
1号埋甕炉



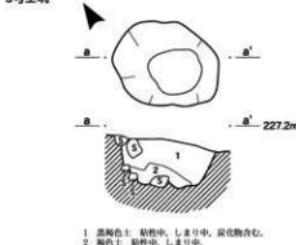
1号土坑



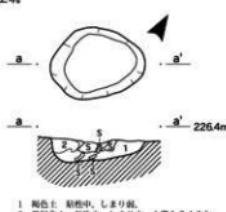
2号土坑



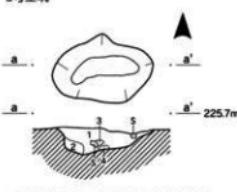
3号土坑



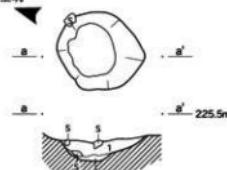
4号土坑



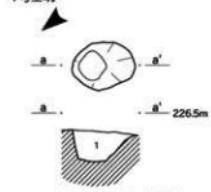
5号土坑



6号土坑

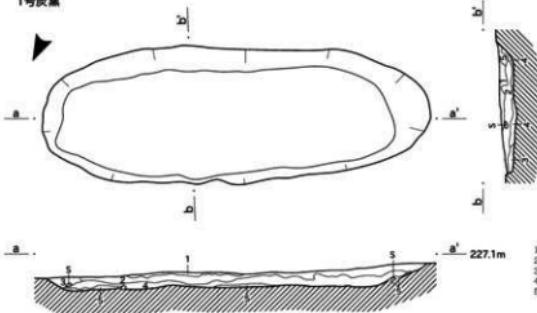


7号土坑

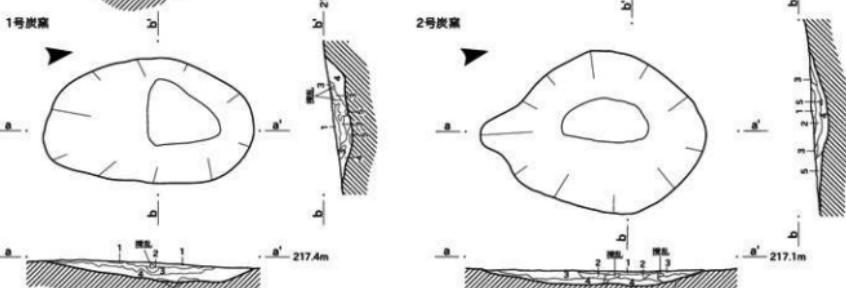
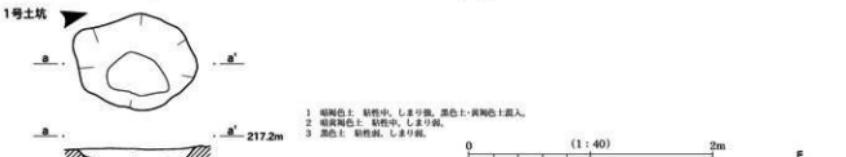
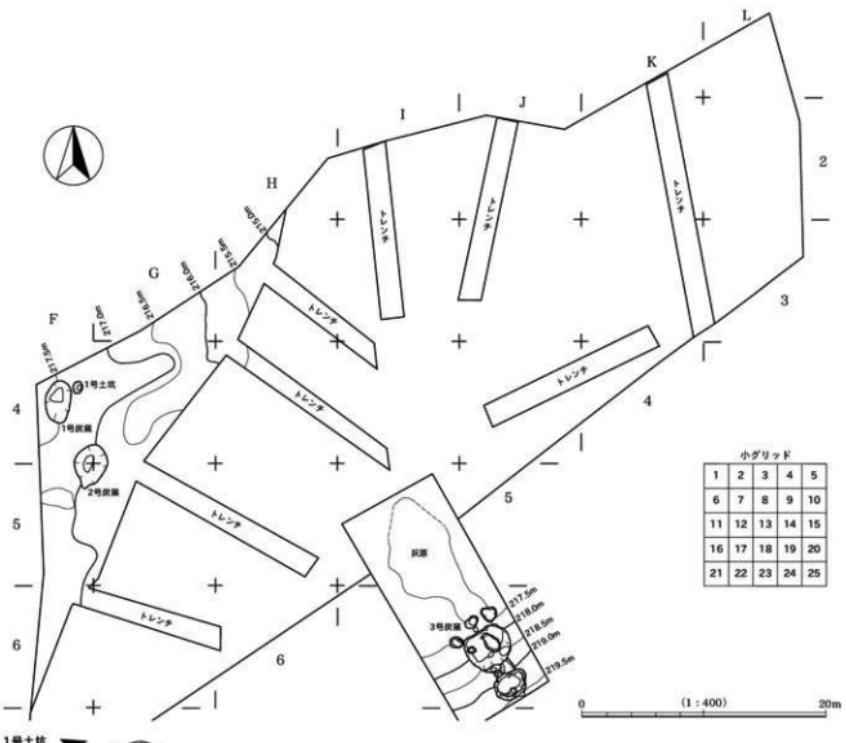


0 (1:40) 2m

1号炭窯



0 (1:80) 4m



1 堀切灰色土・火山区の層、粘性強、しまり強、全体に礫化物含む。

2 黄褐色土・粘性中、しまり強、火山区含む。

3 黑褐色土・粘性強、しまり弱、全体に礫化物含む。

4 堀切褐色土・粘性強、しまり弱、礫少量。

5 黑褐色土・粘性中、しまり強、礫少量。

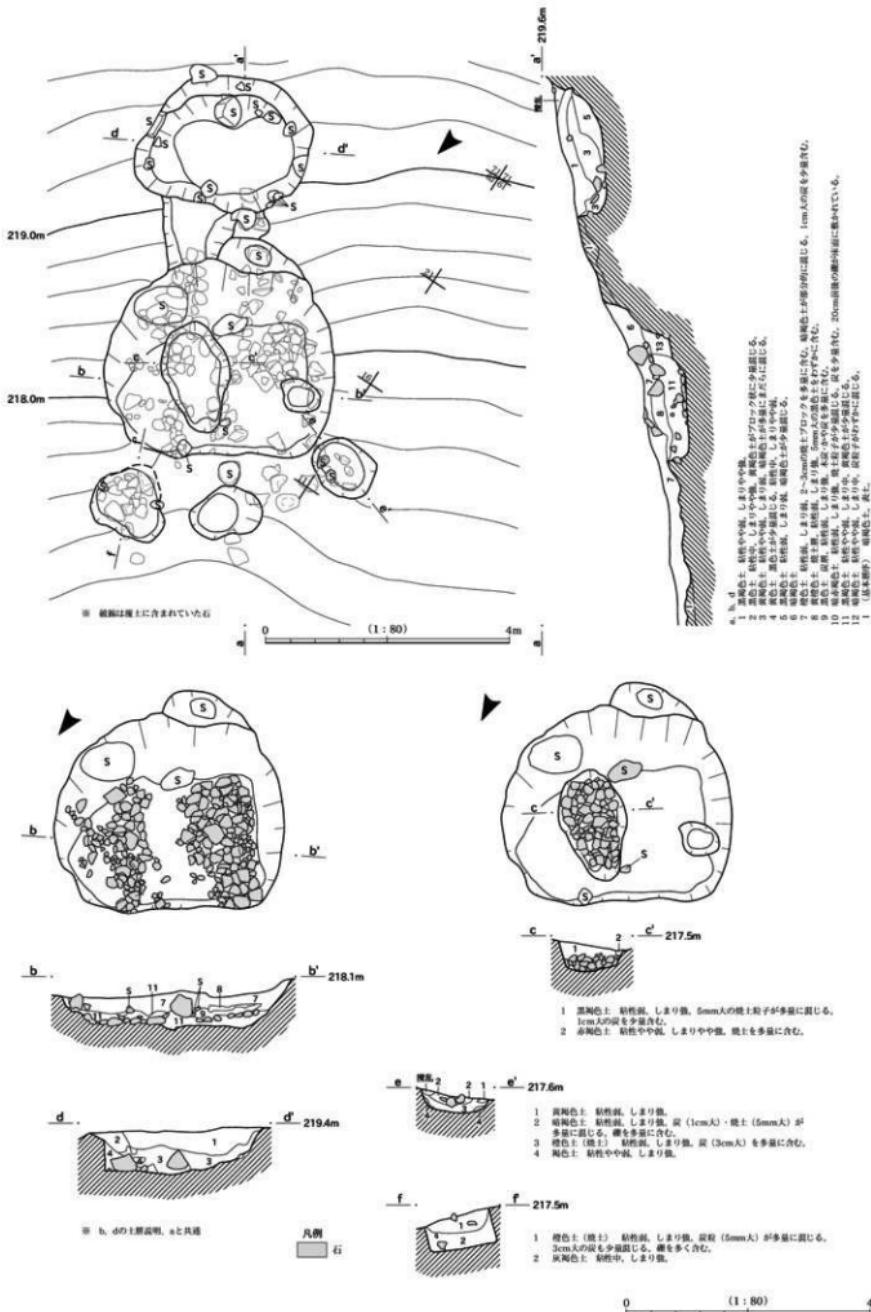
1 堀切灰色土・粘性中、しまり強、黒色火山区含む。

2 黄褐色土・粘性中、しまり弱。

3 黄褐色土・粘性強、しまり中。

4 堀切褐色土・粘性強、しまり弱、礫少量。

5 黑褐色土・粘性中、しまり強、礫少量。

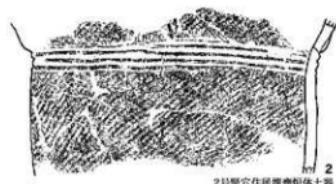


1号整穴住居

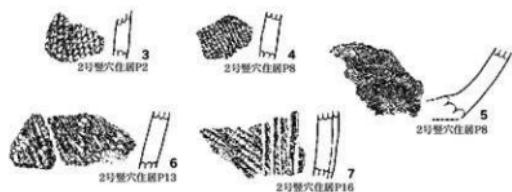


1号整穴住居埋甕

2号整穴住居



2号整穴住居埋甕炉体土器



2号整穴住居P8

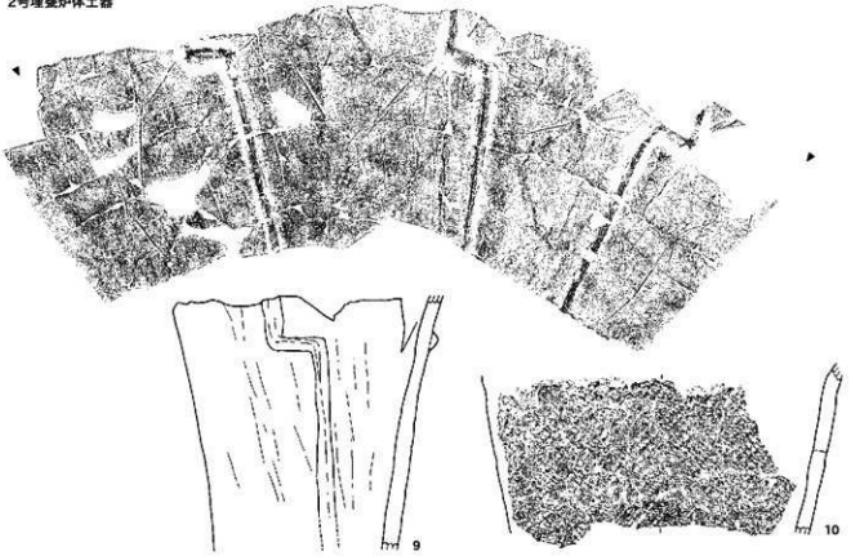
1号埋甕炉体土器



8



2号埋甕炉体土器



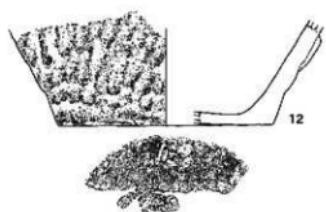
9

10

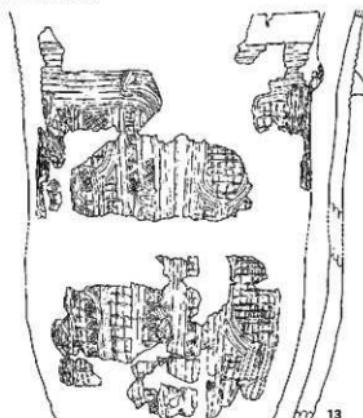
0 (1:3) 15cm

0 (1:4) 20cm (8)

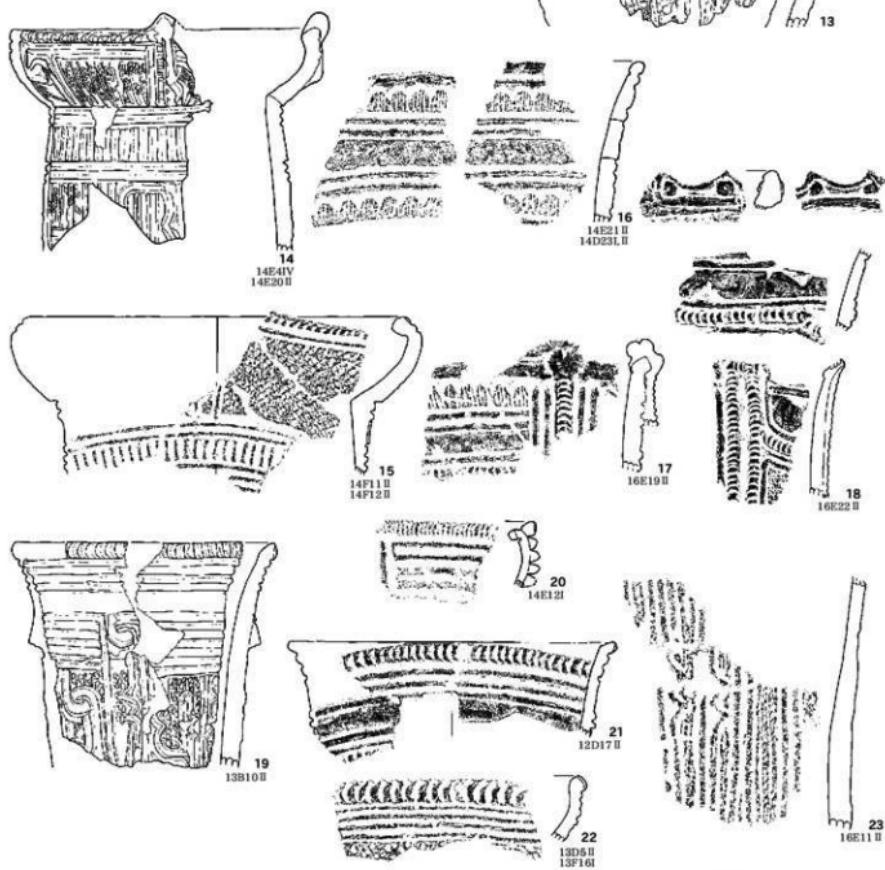
2号埋壺炉内



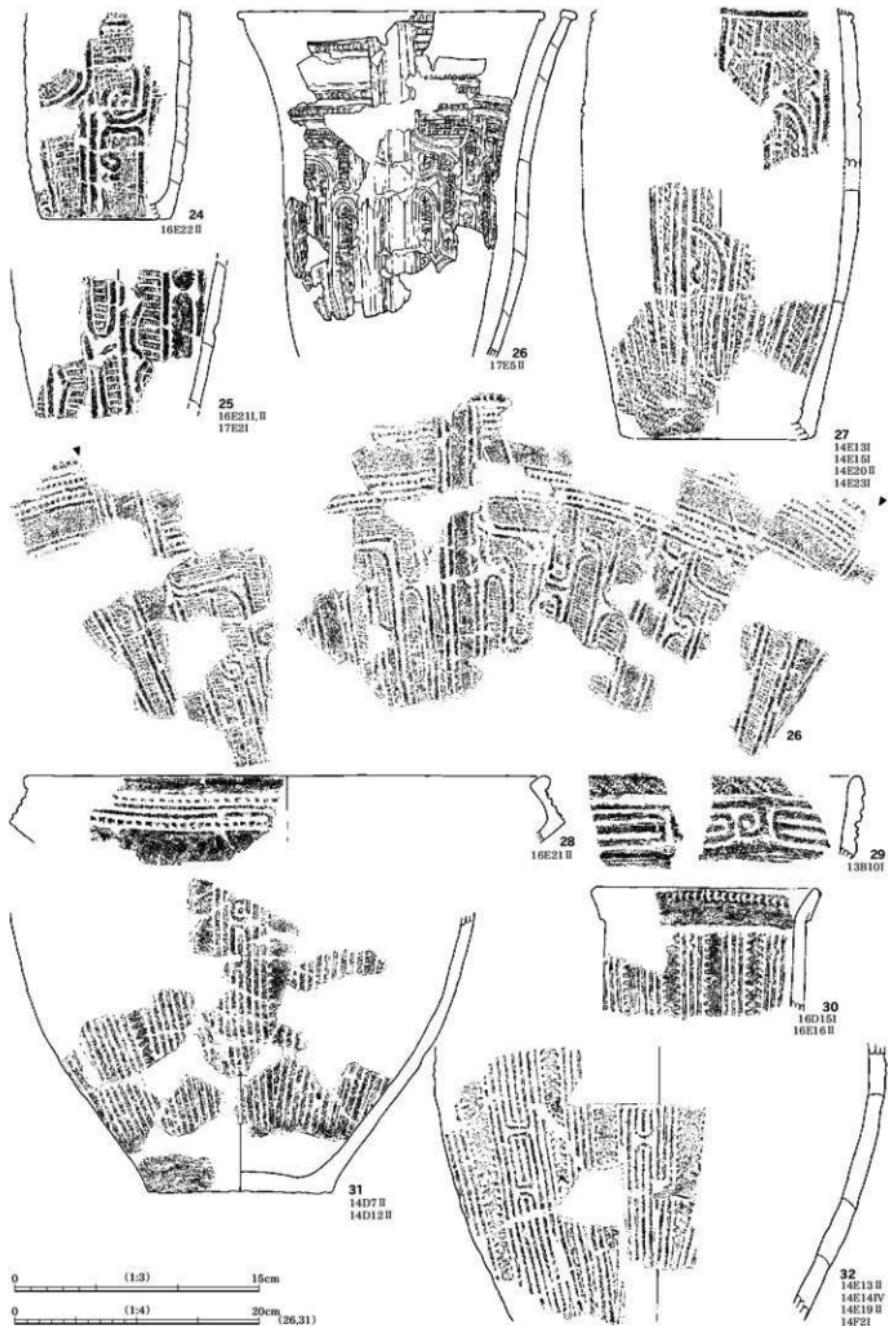
3号埋壺炉体土器

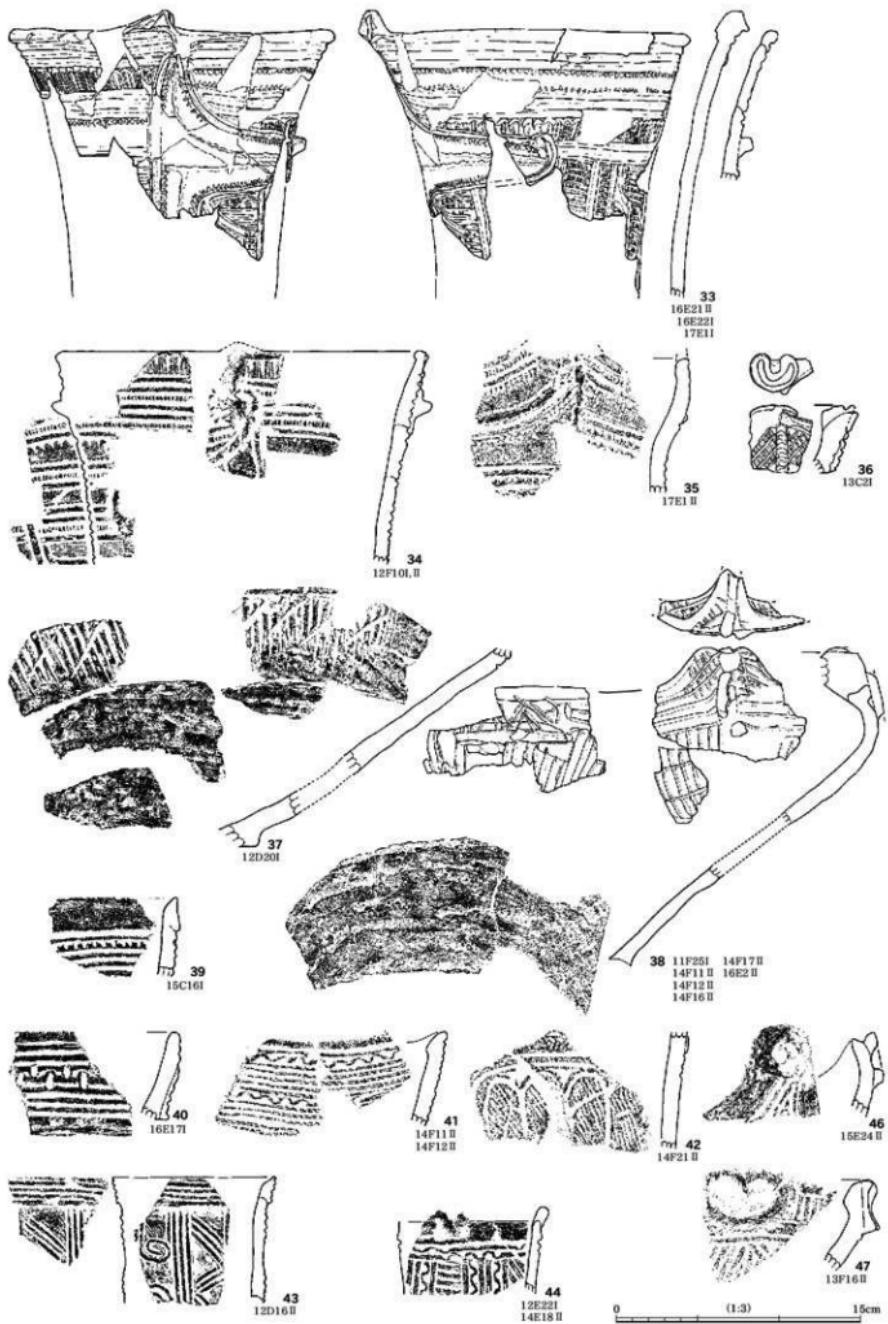


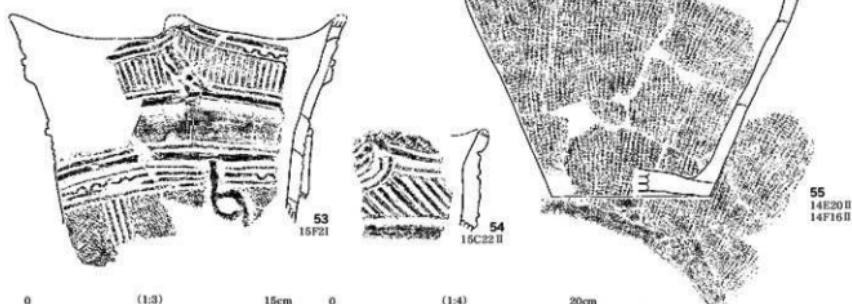
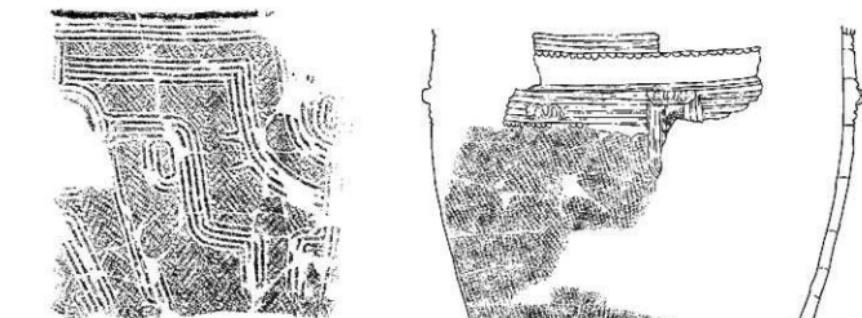
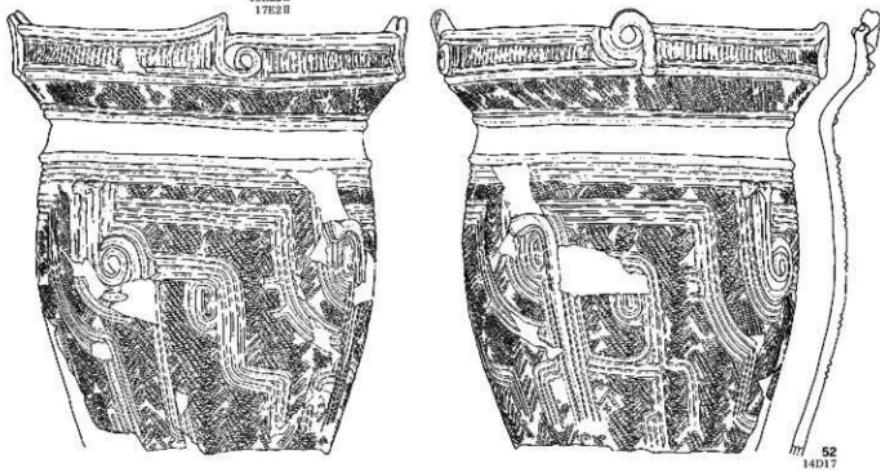
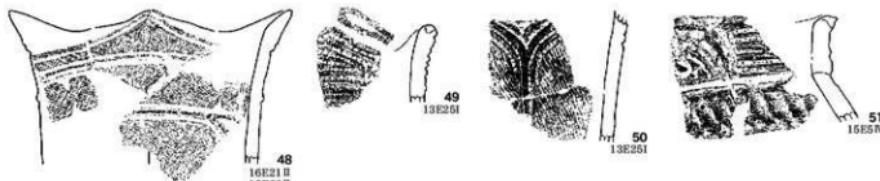
包含層出土土器



0 (1:3) 15cm 0 (1:4) 20cm (1:3)

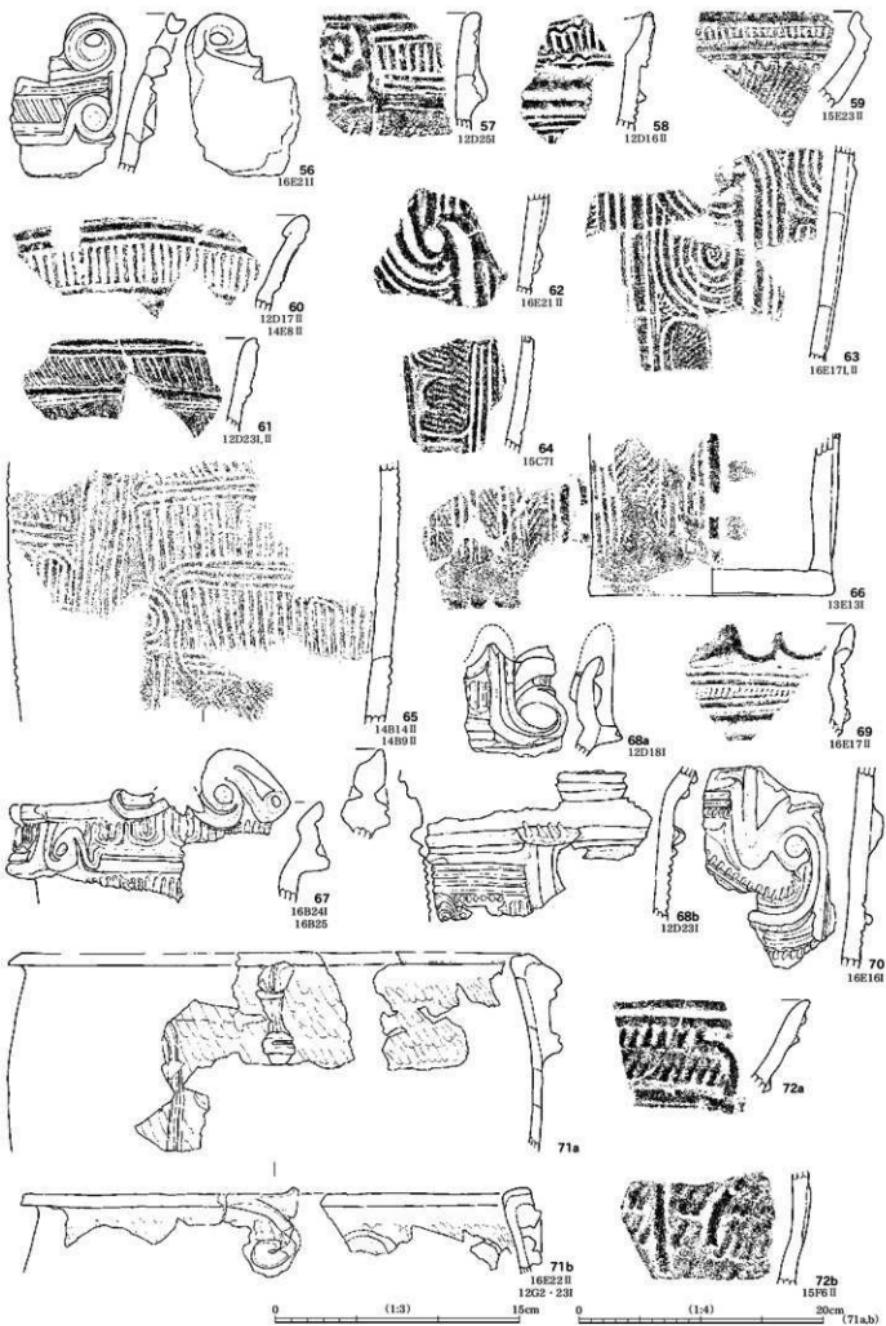


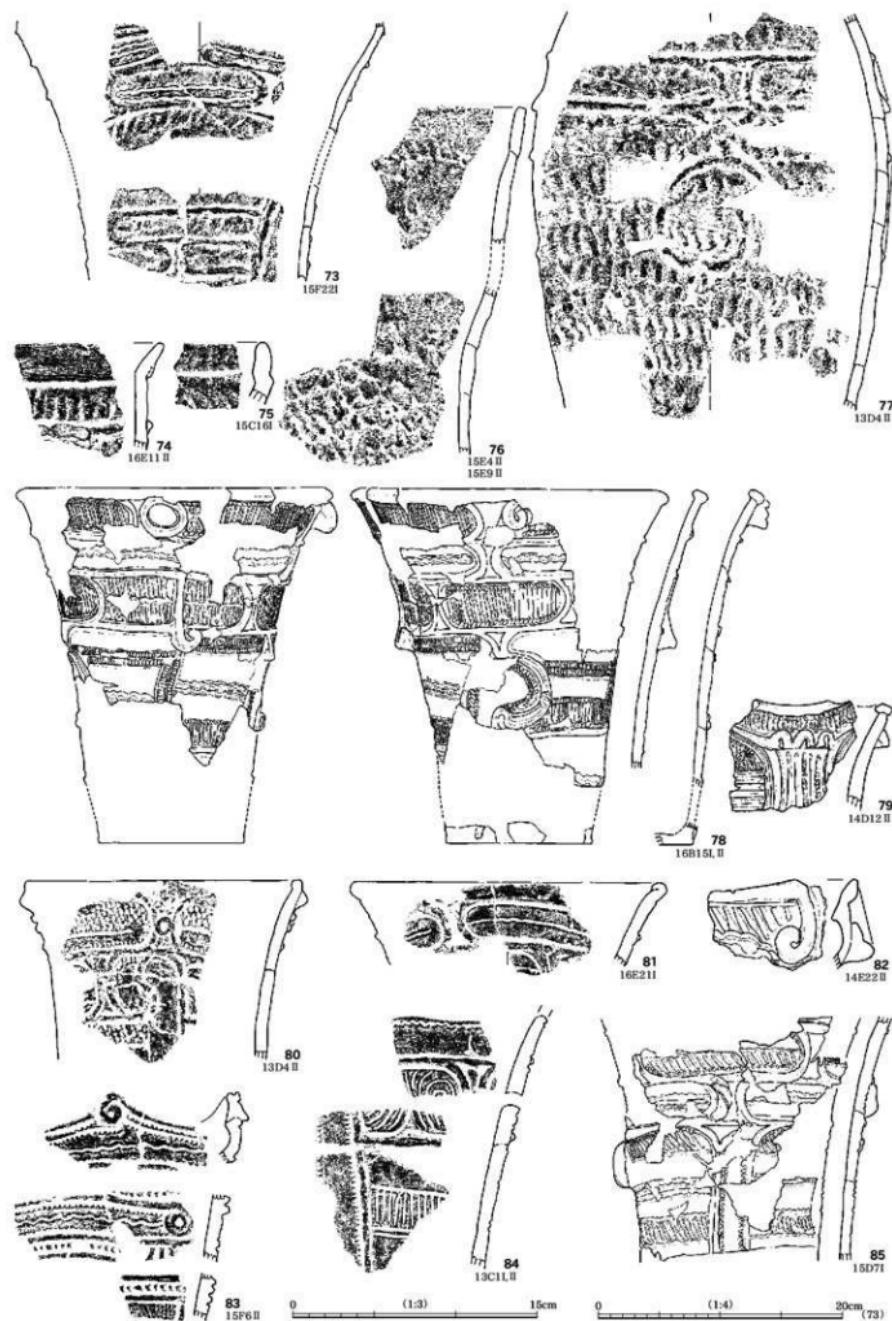


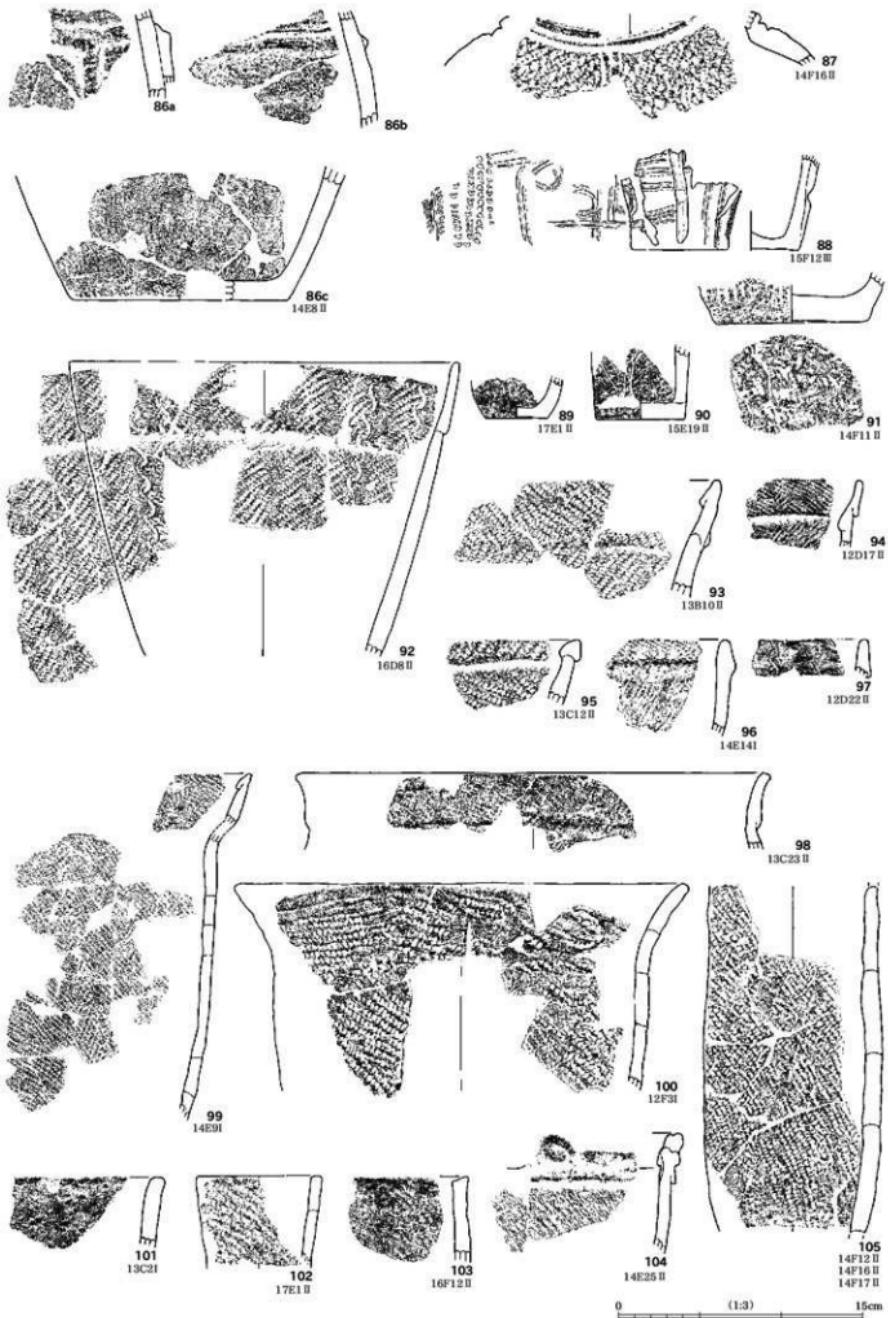


0 (1:3) 15cm

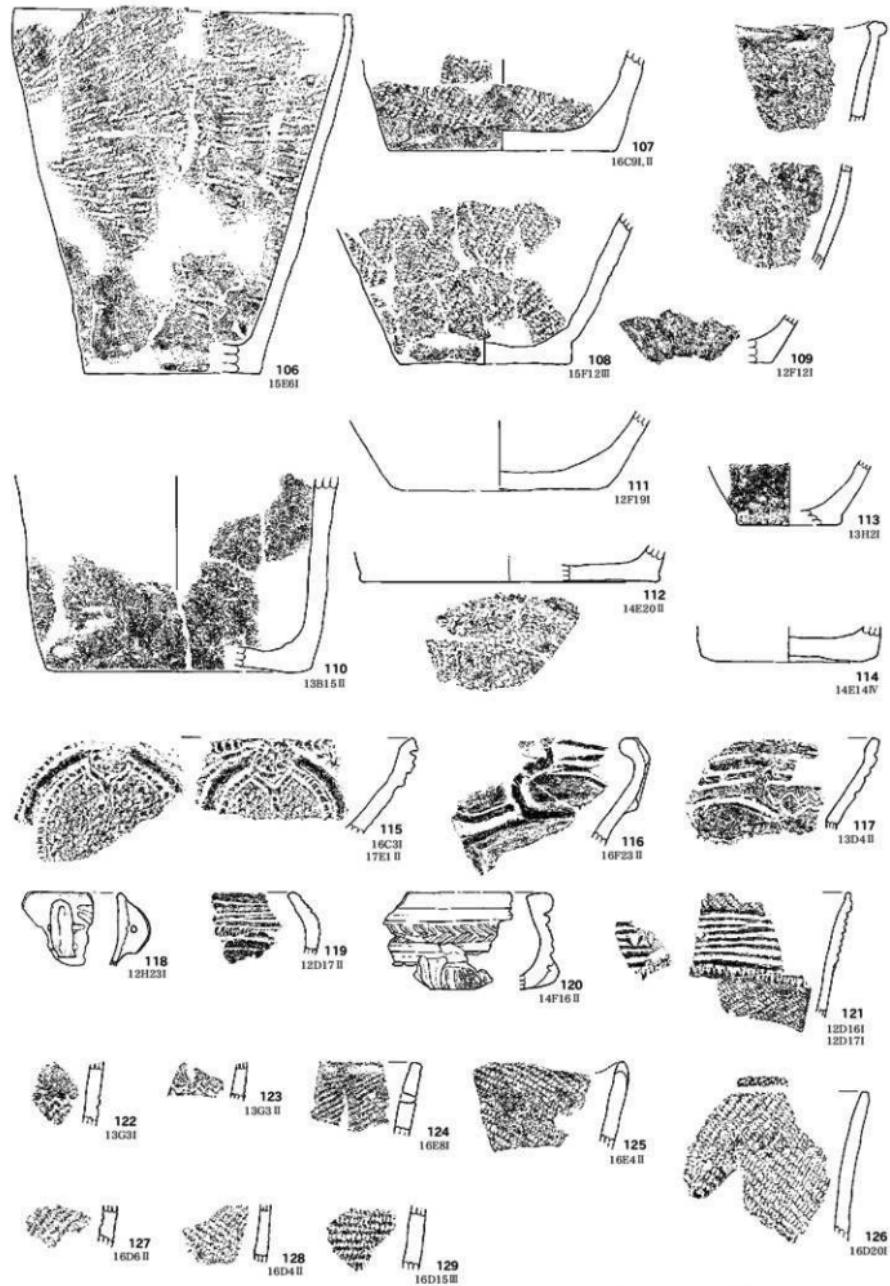
0 (1:4) 20cm (52,53,55)



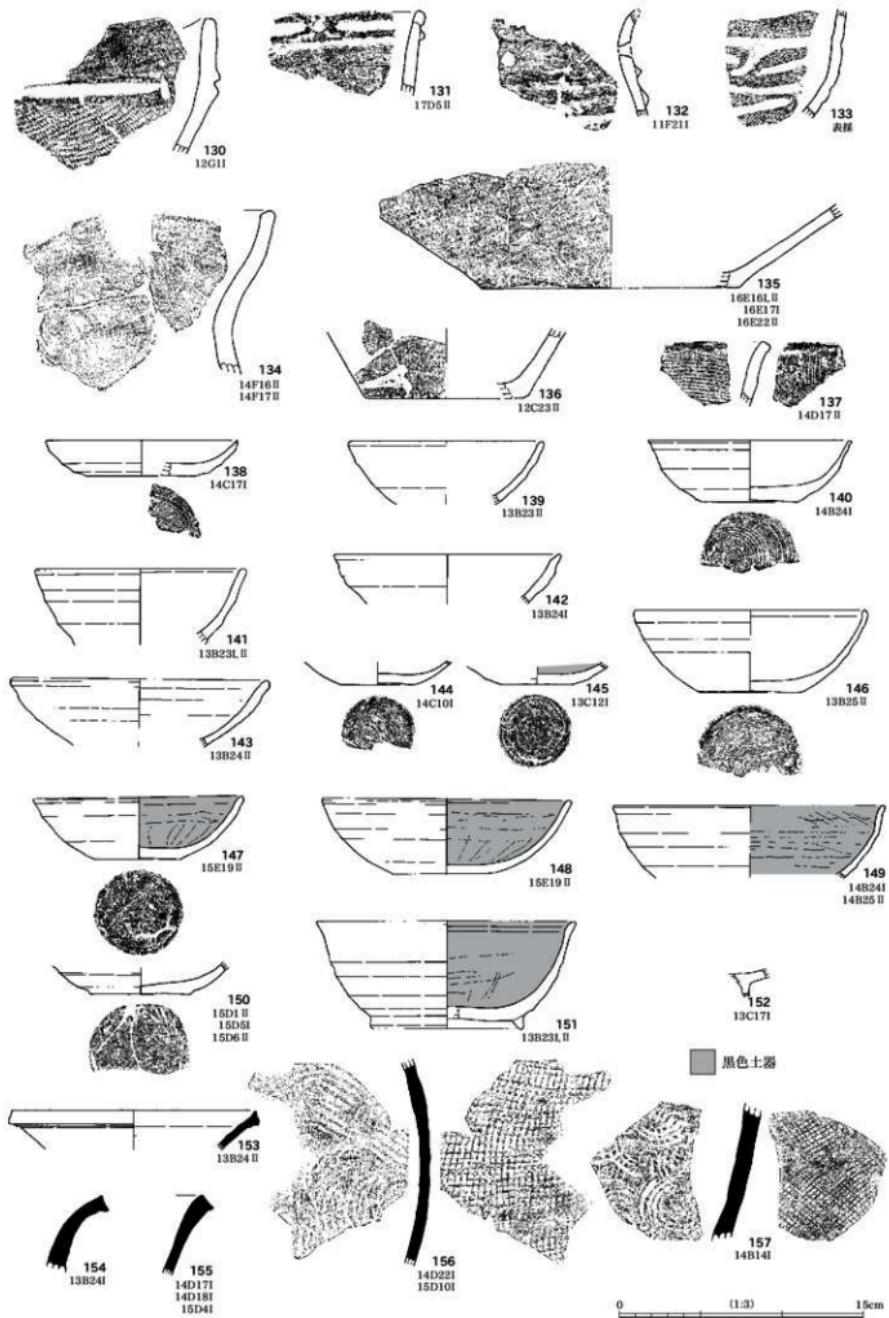


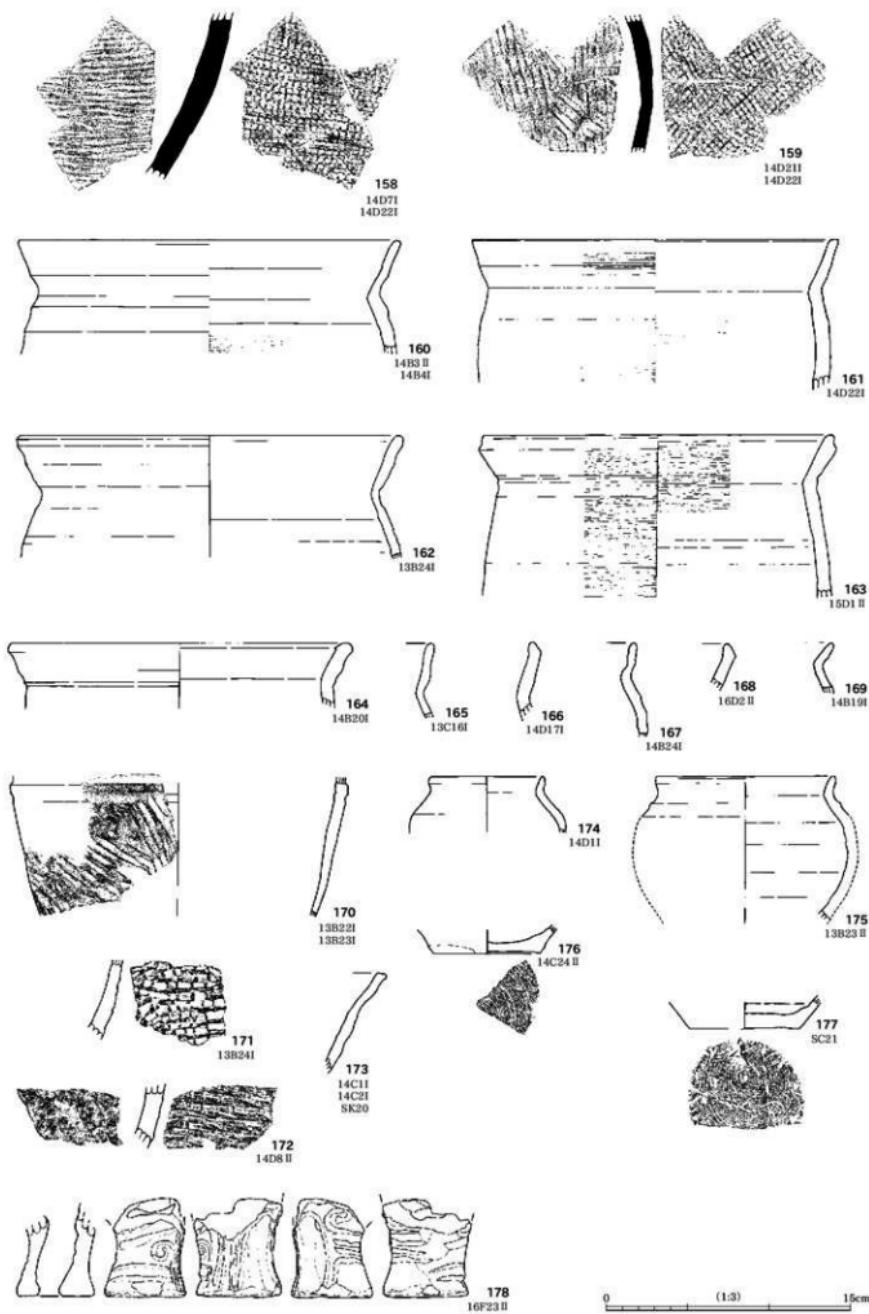


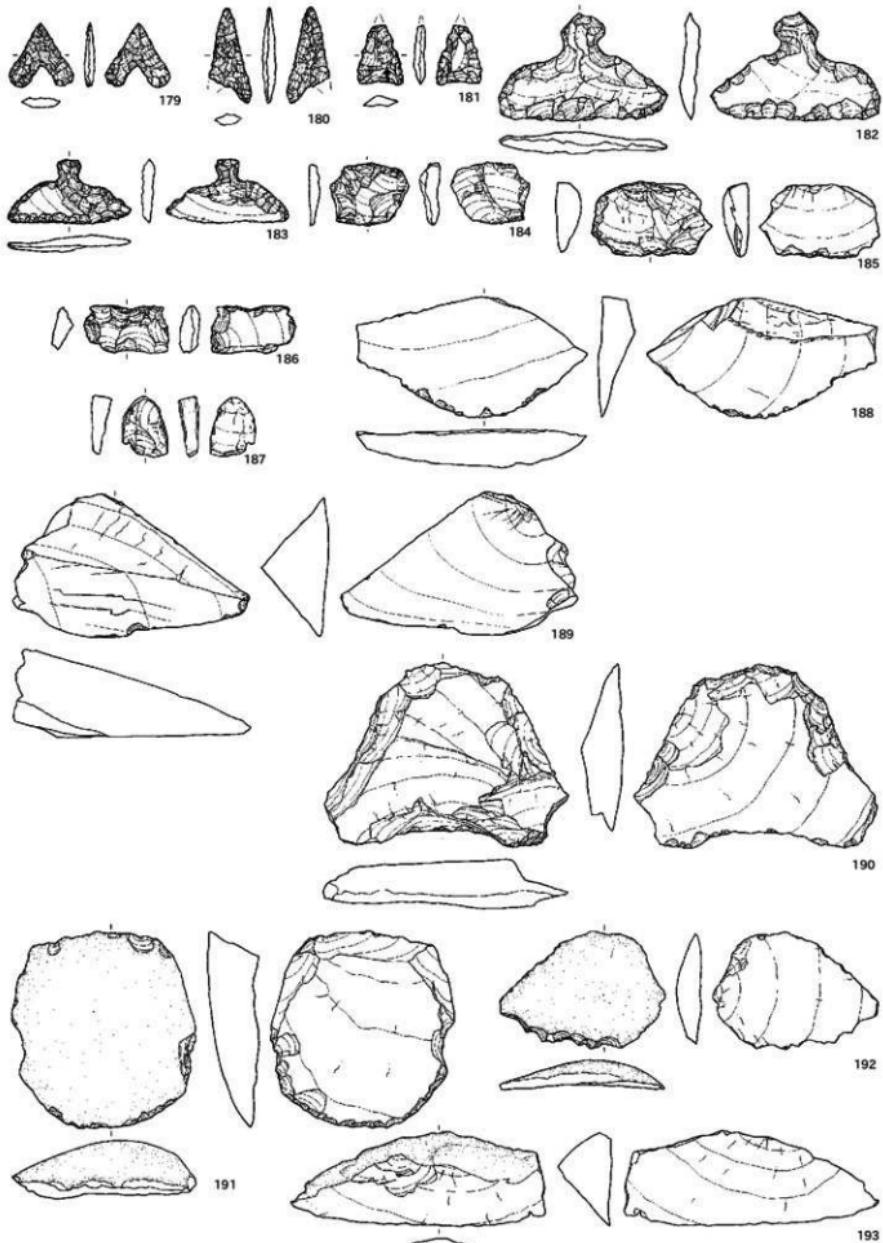
0 (1:3) 15cm



0 (1:3) 15cm







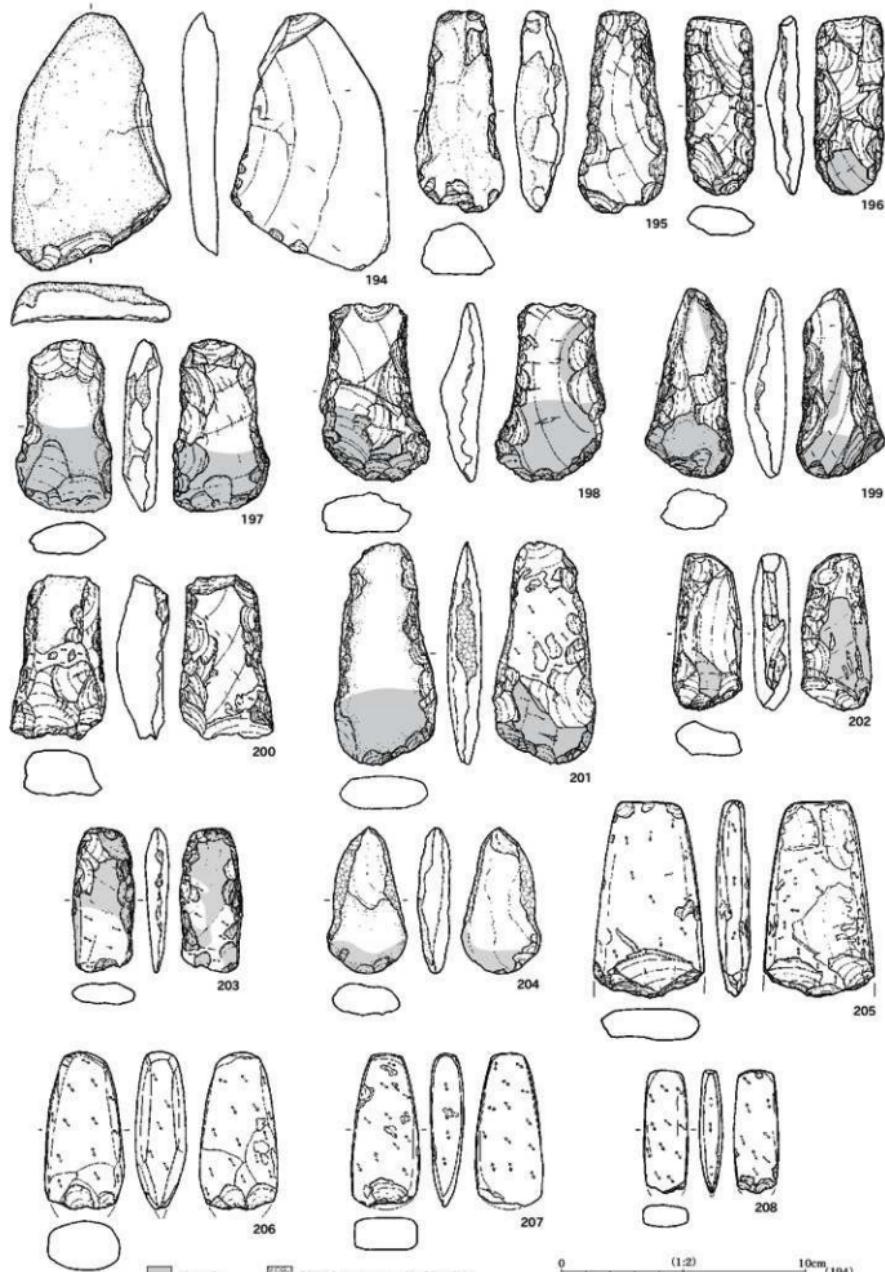
磨痕（石器）

アスファルト

石器 (179~181) 石剣 (182~183) 両種削離痕のある石器 (184~187) 不定期石器 (188~193)

0 (2:3) 5cm (179~181)

0 (1:2) 10cm (182~193)



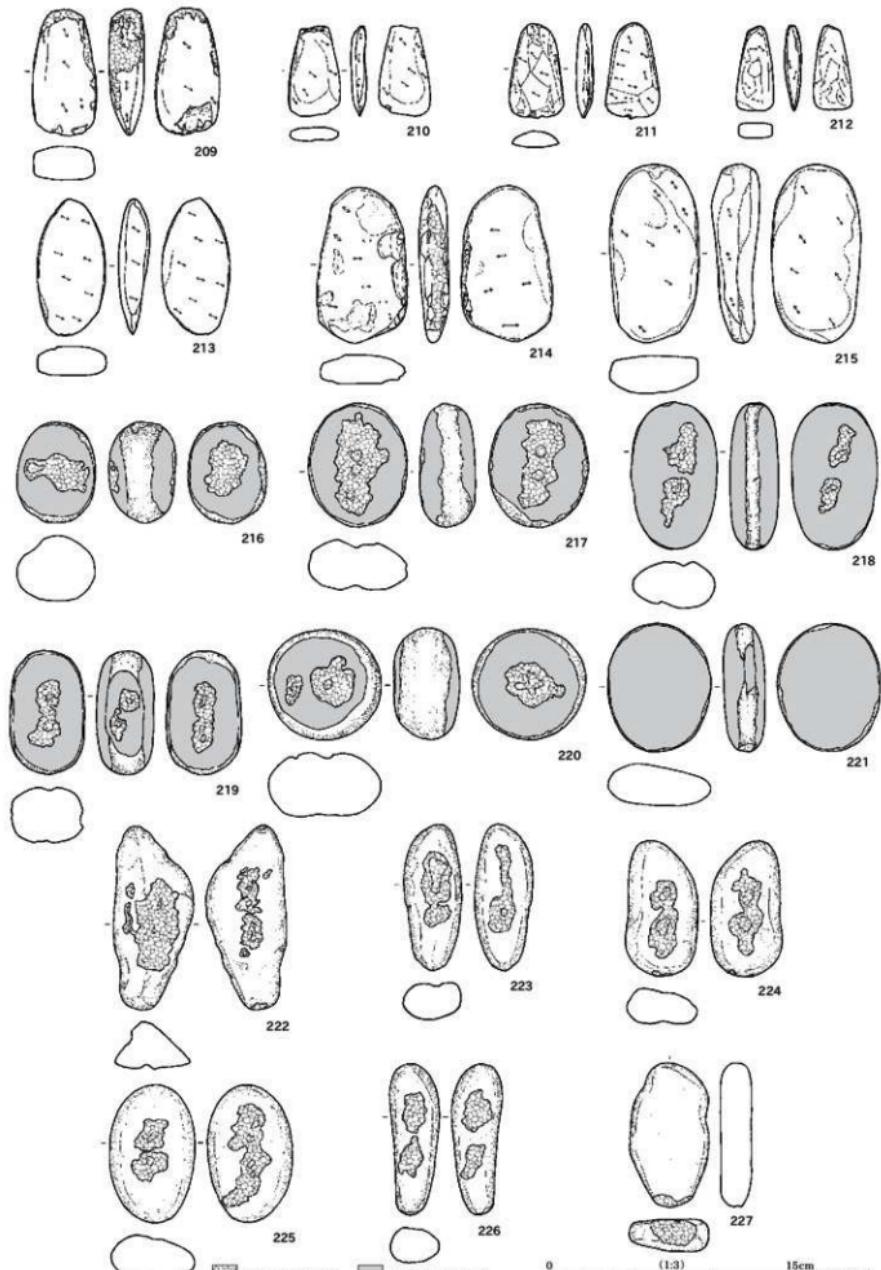
■ 使用痕

■ 敲打痕・つぶし (打製石斧)

不定形石器 (194) 打製石斧A類 (195~199) B類 (200~203) C類 (204) 磨製石斧A類 (205~208)

0 (1:2) 10cm (194)

0 (1:3) 15cm (195~208)



磨製石片A類 (209) B類 (210~212)
C類 (222~226)

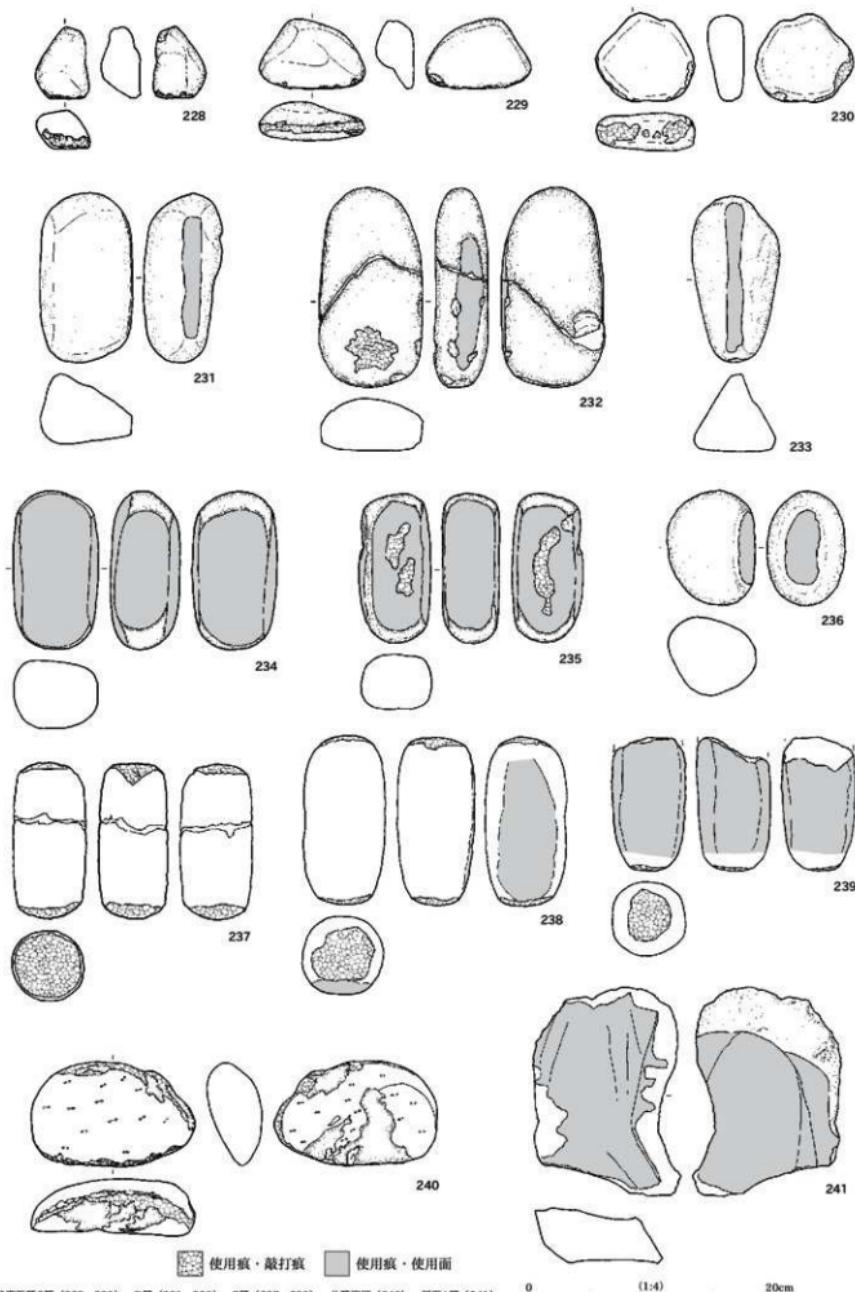
使用痕・敲打痕

使用痕・使用面

磨製石片未成品 (213~215)

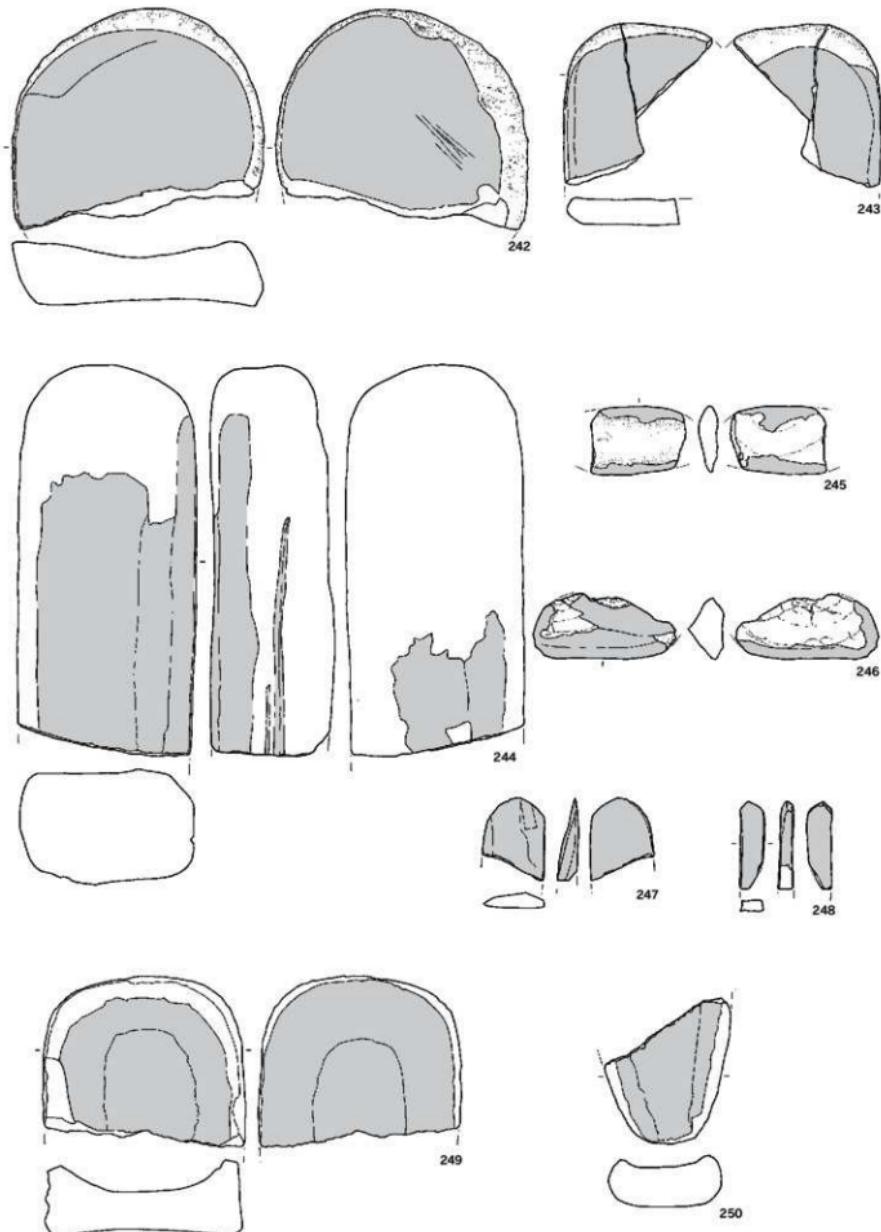
敲打痕A類 (216~221)

0 (1:3) 15cm (209~215)
0 (1:4) 20cm (216~227)



鉢形石核C類 (228~230) D類 (231~236) E類 (237~239) 分類不可 (240) 破石A類 (241)

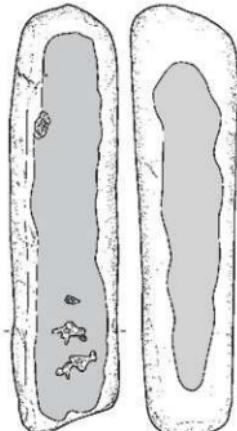
(1:4)



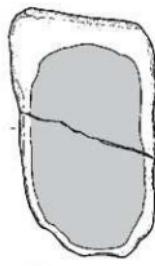
砾石A類 (242~244) B類 (245~248) 石刃 (249~250)

■ 使用痕・使用面

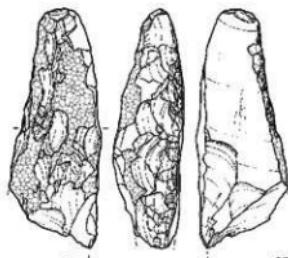
0 (1:4) 20cm (242~248)
 0 (1:5) 20cm (249~250)



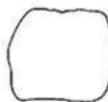
251



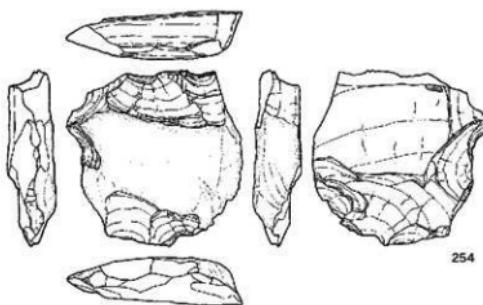
252



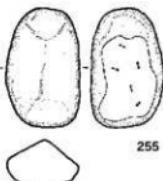
253



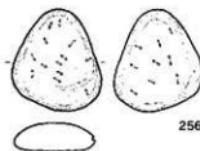
251



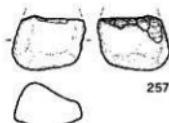
254



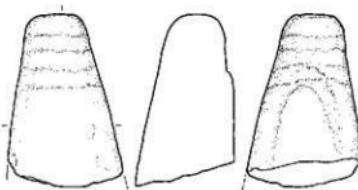
255



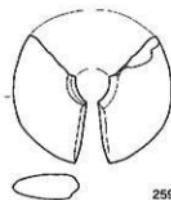
256



257



258



259



260

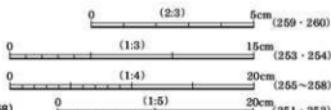
石盤 (251・252) 三角錐形石器 (253)

錐打痕

石核 (254)

使用痕

鏡面状の光沢を有する石器 (255～257) 石棒 (258)





道灌遺跡 遠景（南から）



道灌遺跡 完掘（北から）



道灌遺跡 No.2 基本土層（西から）



道灌遺跡 2号竪穴住居（西から）



道灌遺跡 2号竪穴住居 埋甕炉（西から）



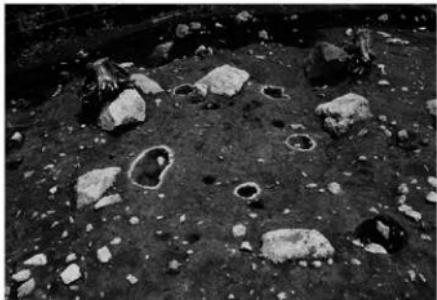
道灌遺跡 縄文土器（52）出土状況（東から）



向原遺跡 完掘（南から）



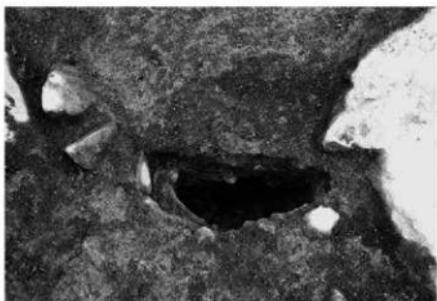
向原遺跡 3号炭窯（北から）



1号竪穴住居 完掘（西から）



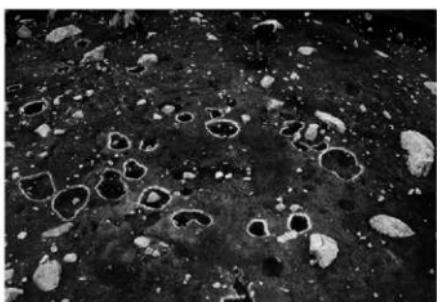
1号竪穴住居 埋甕（北から）



1号竪穴住居 P2セクション（西から）



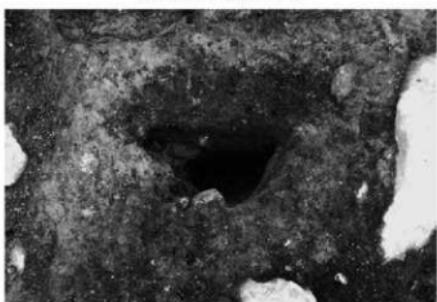
1号竪穴住居 P5セクション（北東から）



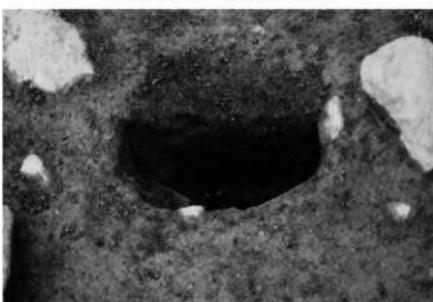
2号竪穴住居 完掘（西から）



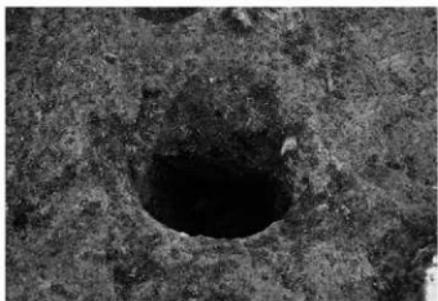
2号竪穴住居 埋甕（東から）



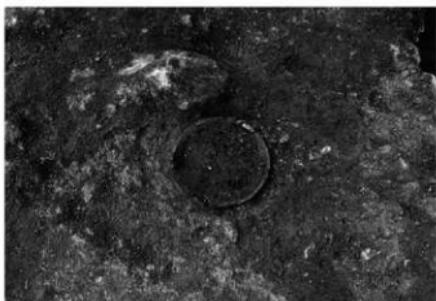
2号竪穴住居 P9セクション（西から）



2号竪穴住居 P11セクション（南から）



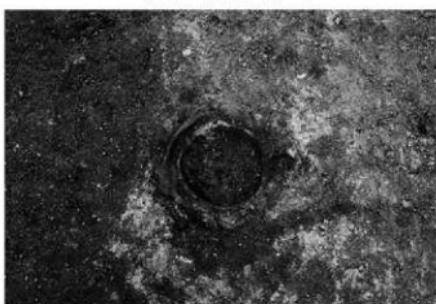
2号竪穴住居 P12 セクション（西から）



1号埋甕炉 検出状況（南から）



1号埋甕炉 セクション（南から）



2号埋甕炉 検出状況（南から）



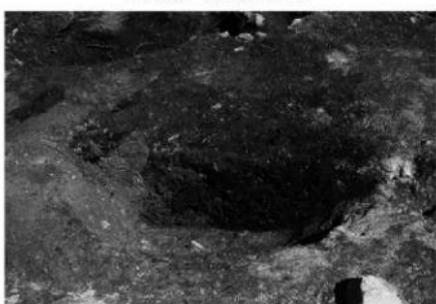
2号埋甕炉 セクション（東から）



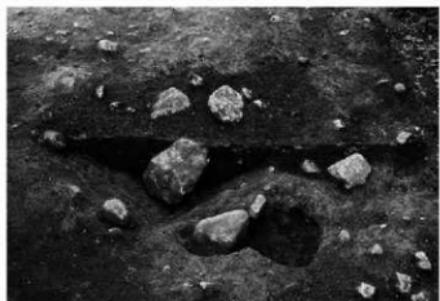
3号埋甕炉 検出状況（東から）



3号埋甕炉 セクション（東から）



2号土坑（北西から）



3号土坑（南から）



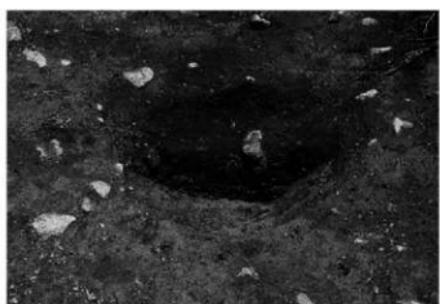
4号土坑（西から）



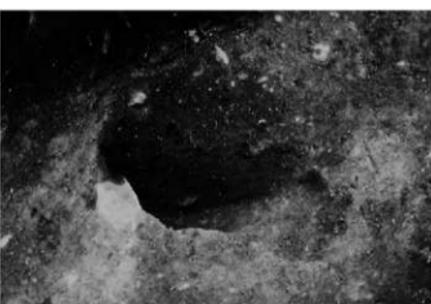
5号土坑（南から）



6号土坑（北から）



7号土坑（南から）



8号土坑（東から）



1号炭窯 セクション（西から）



1号炭窯 完掘（北から）



15E19 合わせ口状の土器器 挿 出土状況（南から）



13D4 繩文土器 挿 出土状況（西から）



16D8 石皿 挿 出土状況（北から）



作業風景



向原遺跡西側 完掘（南から）



1号土坑（東から）



1号炭窯 セクション（東から）



1号炭窯 完掘（東から）



2号炭窯 セクション（東から）



2号炭窯 完掘（東から）



3号炭窯（北から）



3号炭窯 上部土坑（東から）



3号炭窯 b-b'セクション（北から）



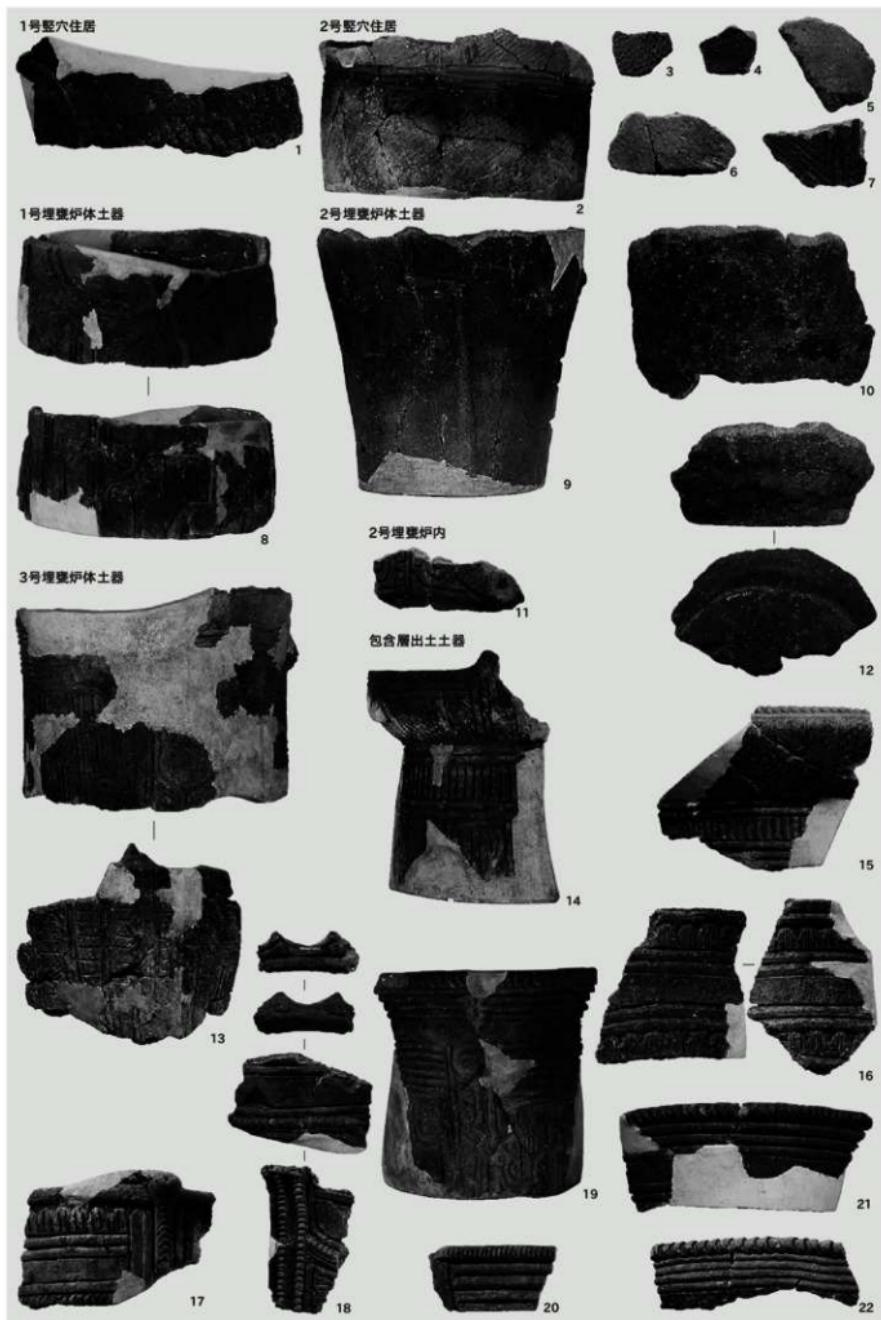
3号炭窯 b-b'セクション（北から）



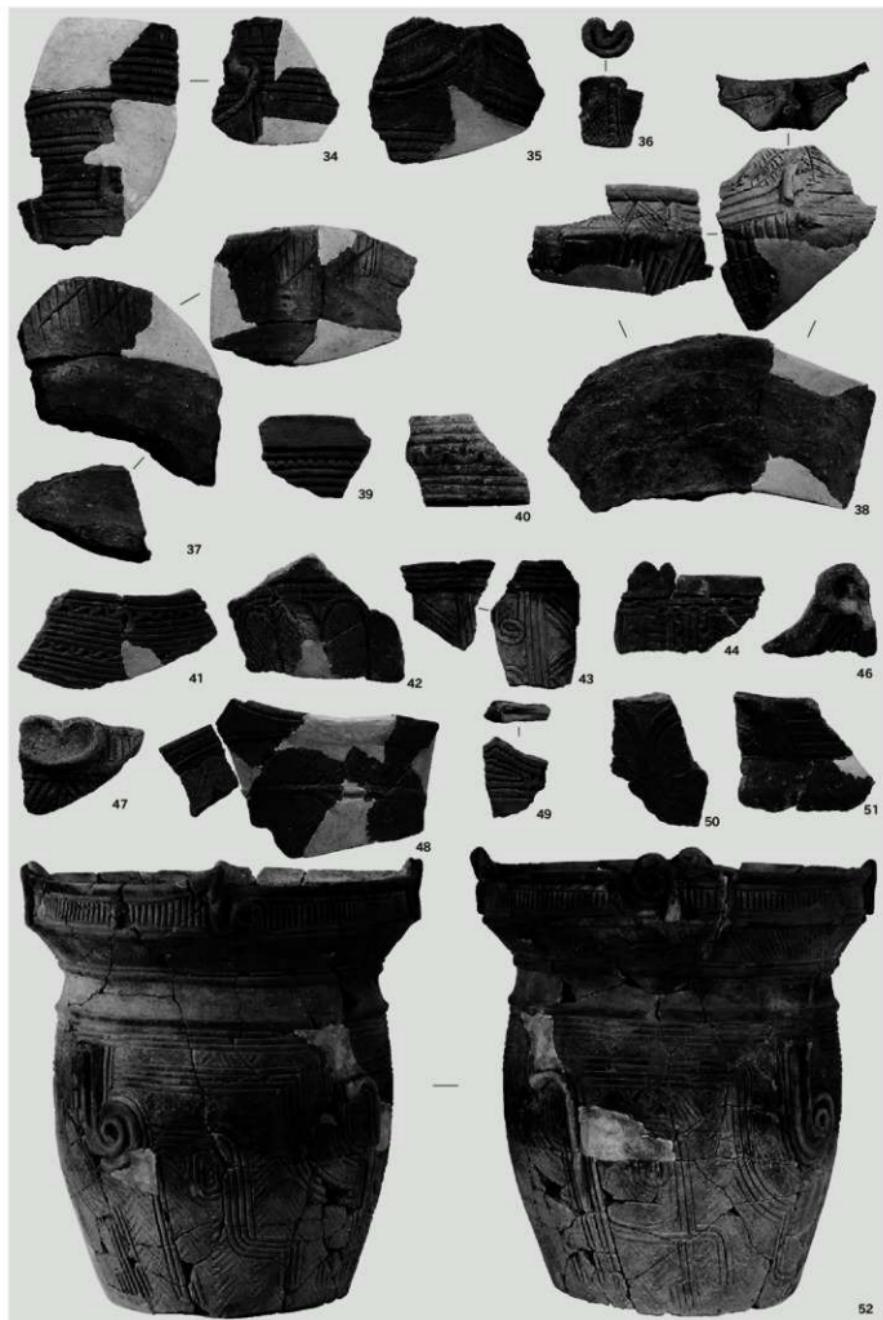
3号炭窯 底部礫検出状況（北から）



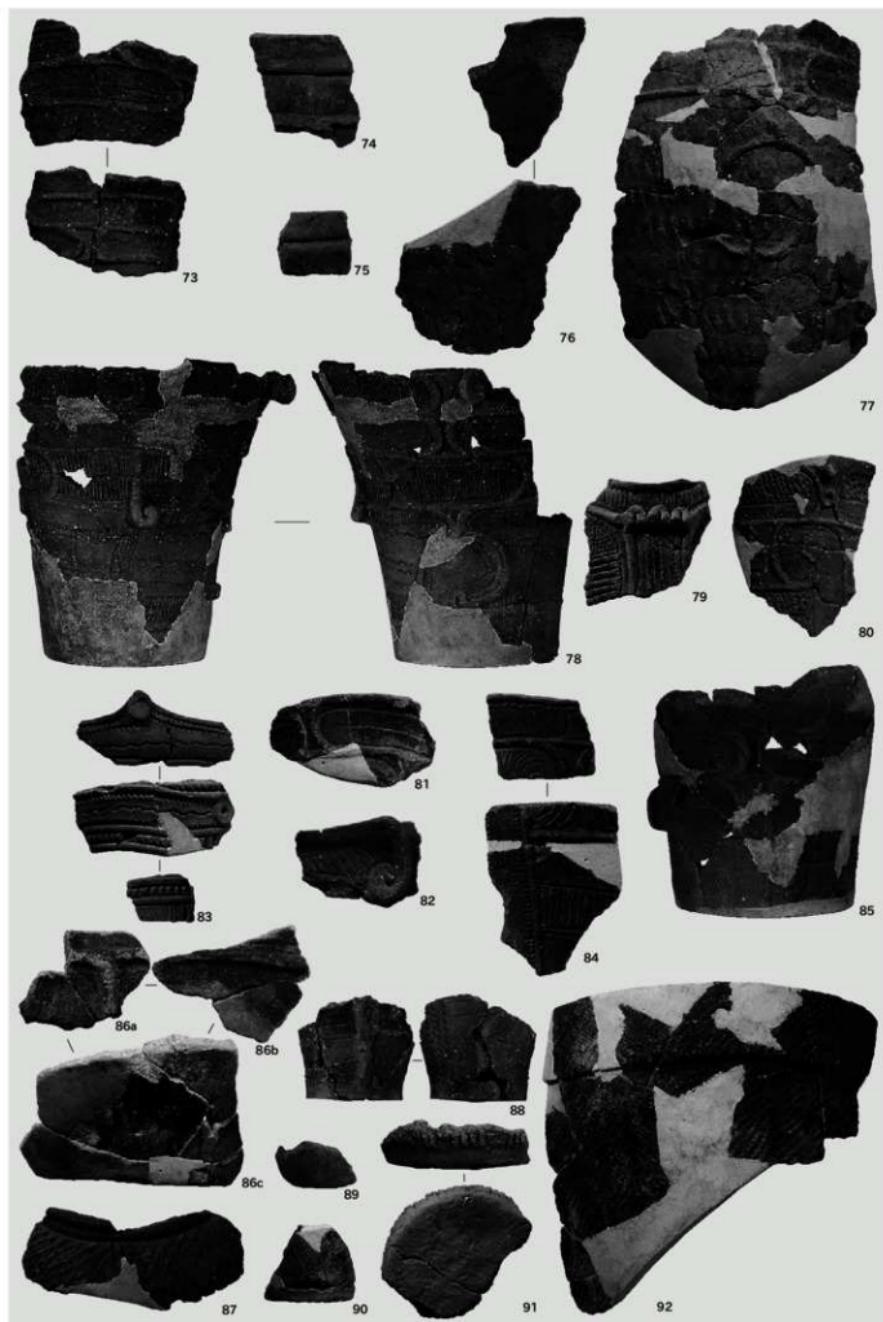
3号炭窯底部土坑 c-c'セクション（北から）

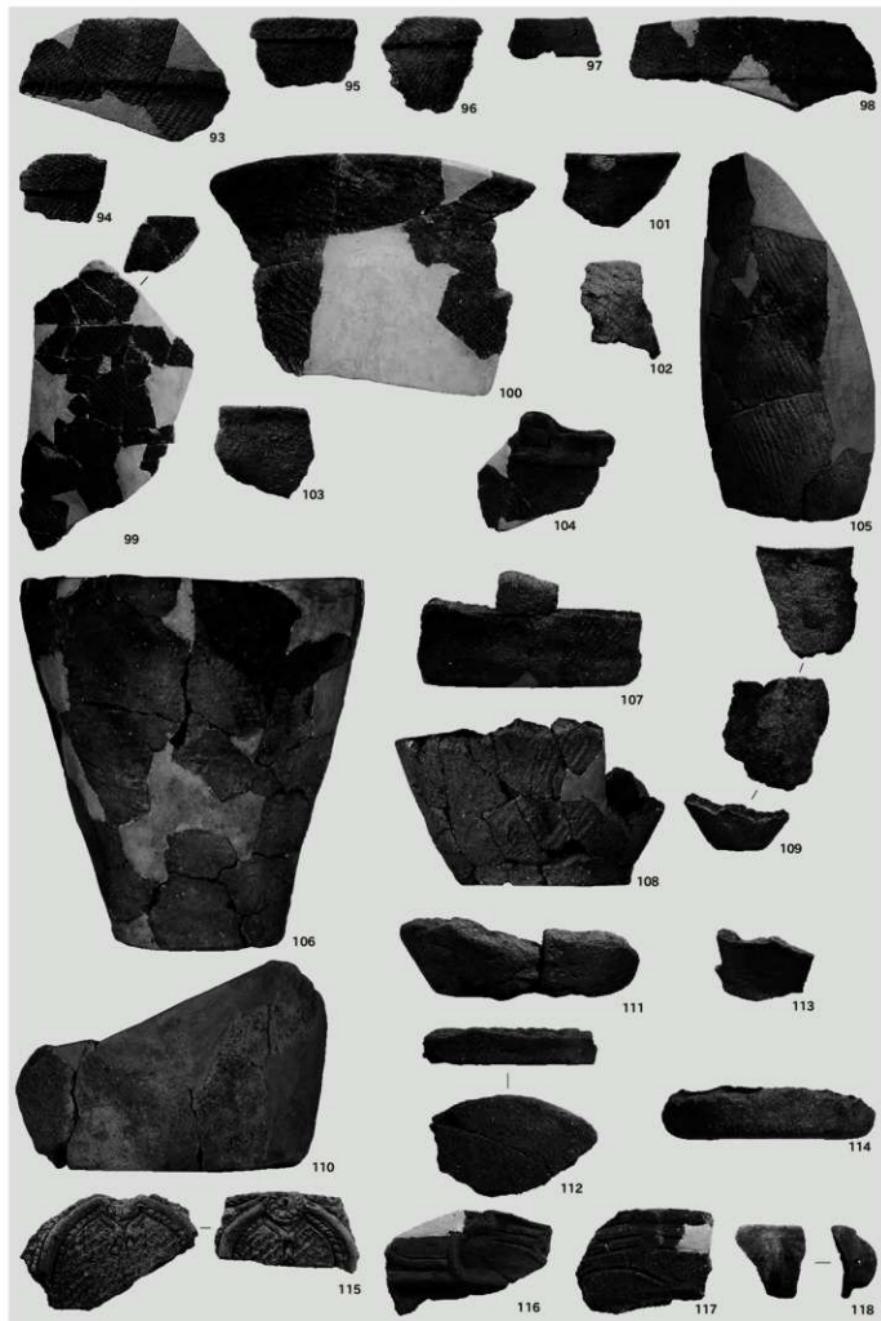


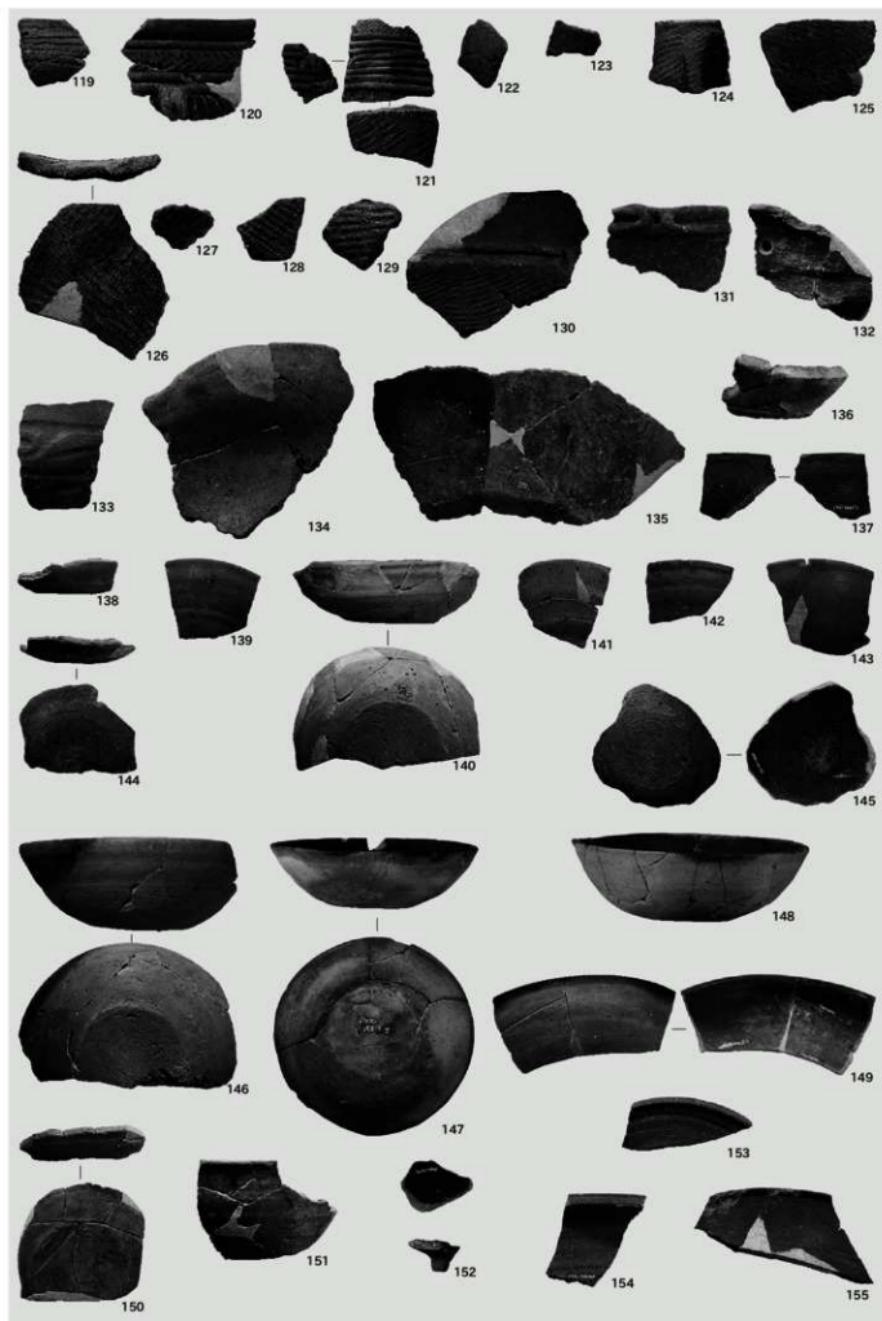










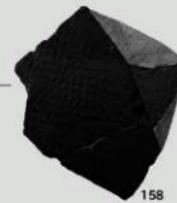
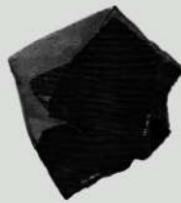




156



157



158



159



161



162



163



164



165



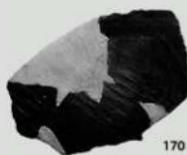
166



167



168



170



171



172



173



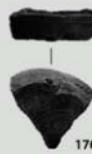
174



175



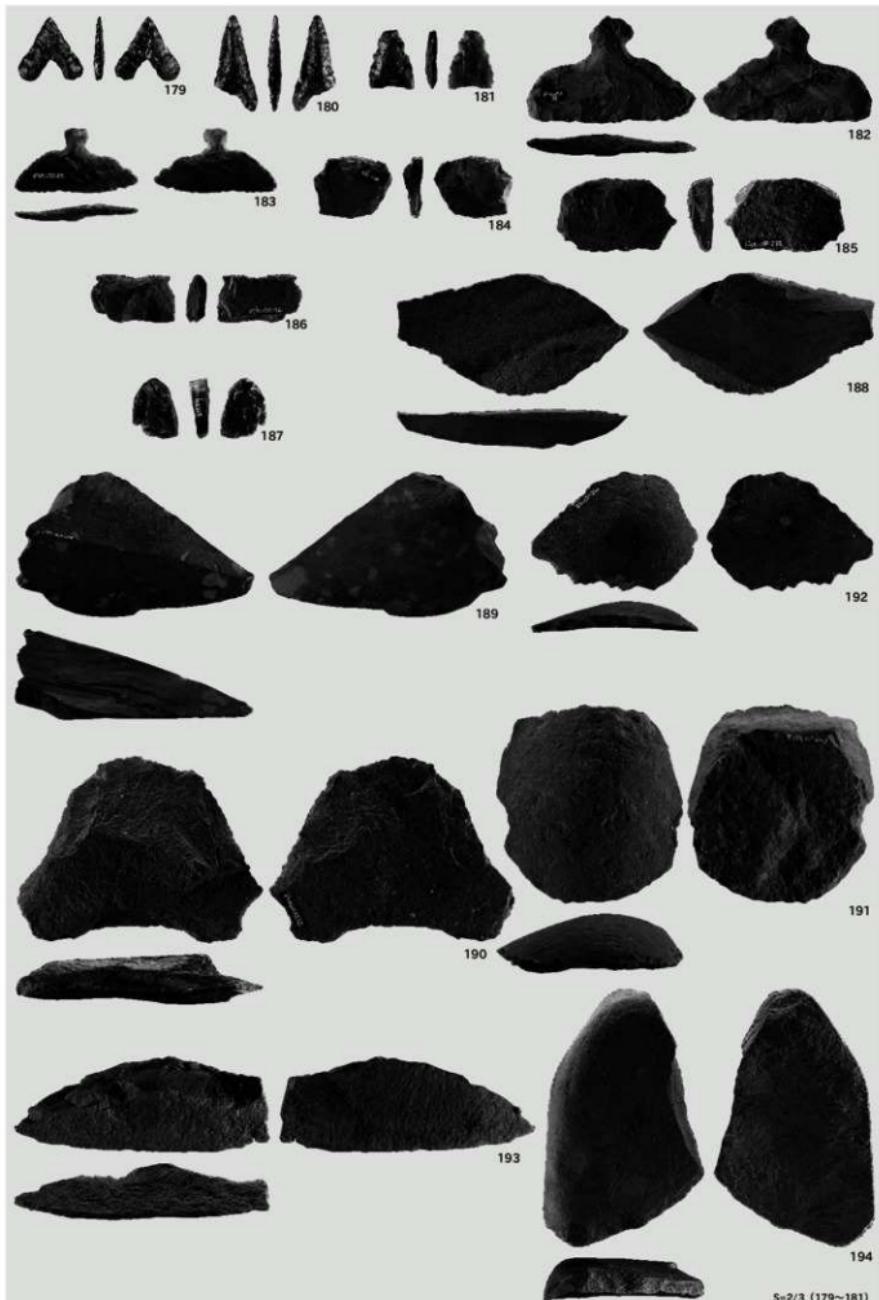
176



177

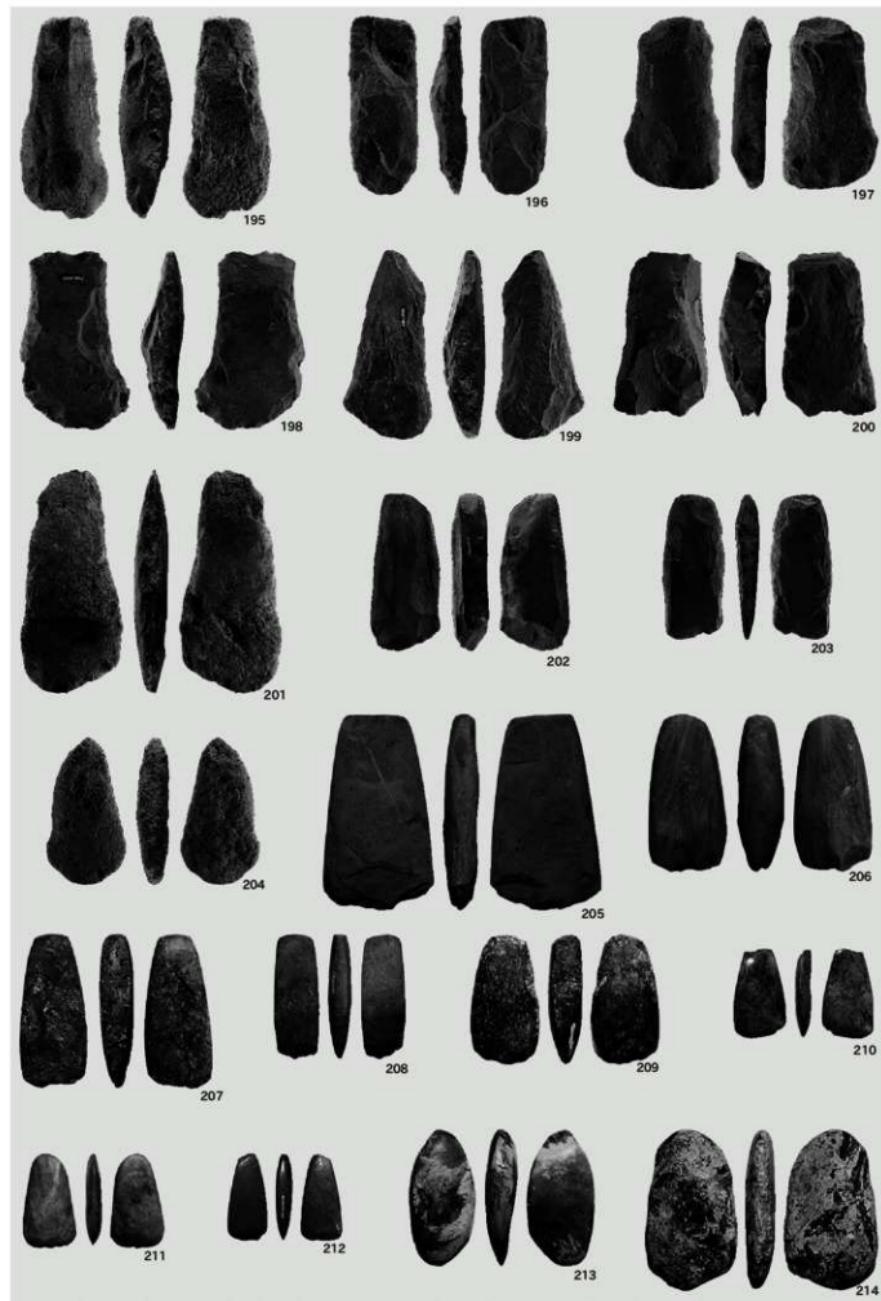


178



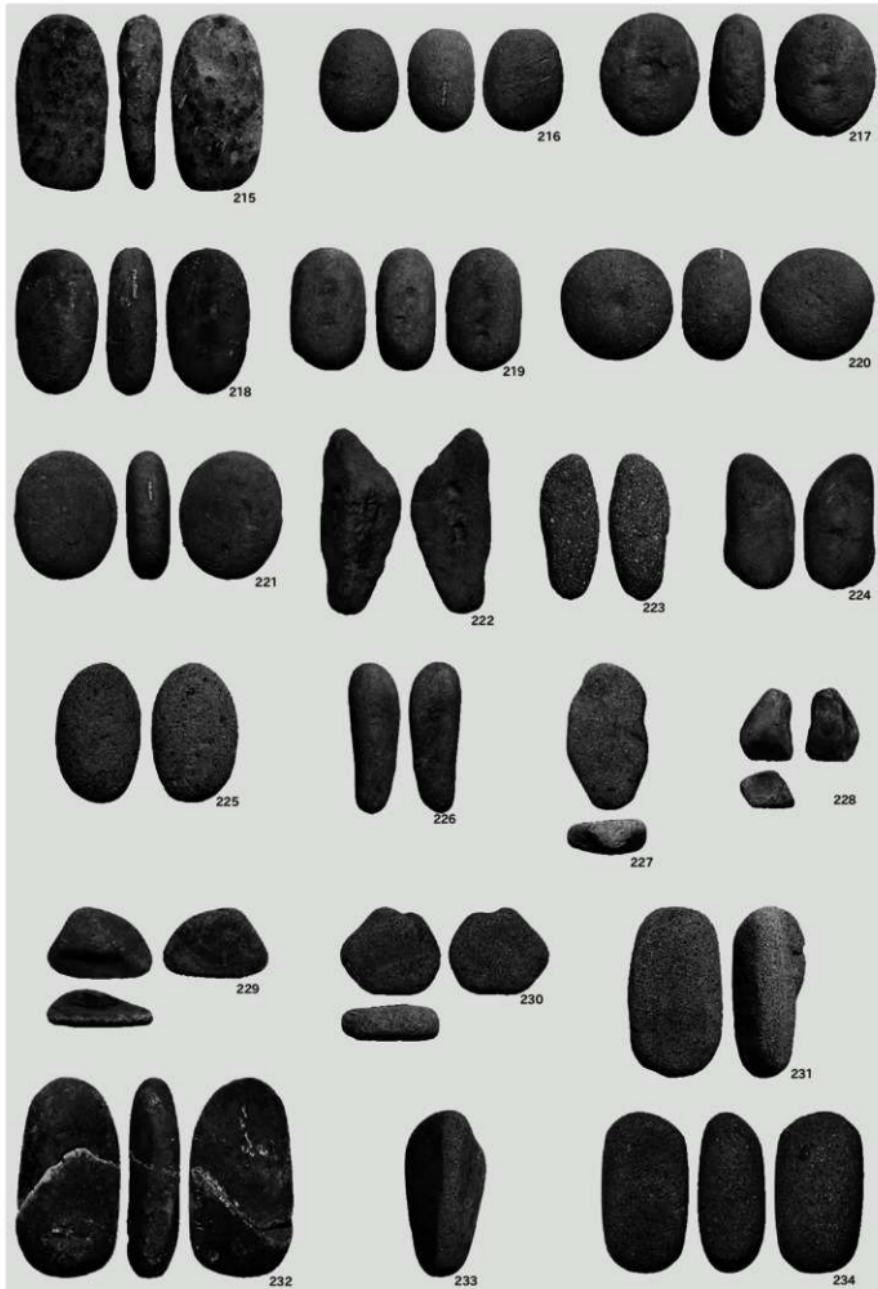
石頭 (179~181) 石剣 (182~183) 同様剥離面のある石器 (184~187) 不定形石器 (188~194)

S=2/3 (179~181)
S=1/2 (182~194)



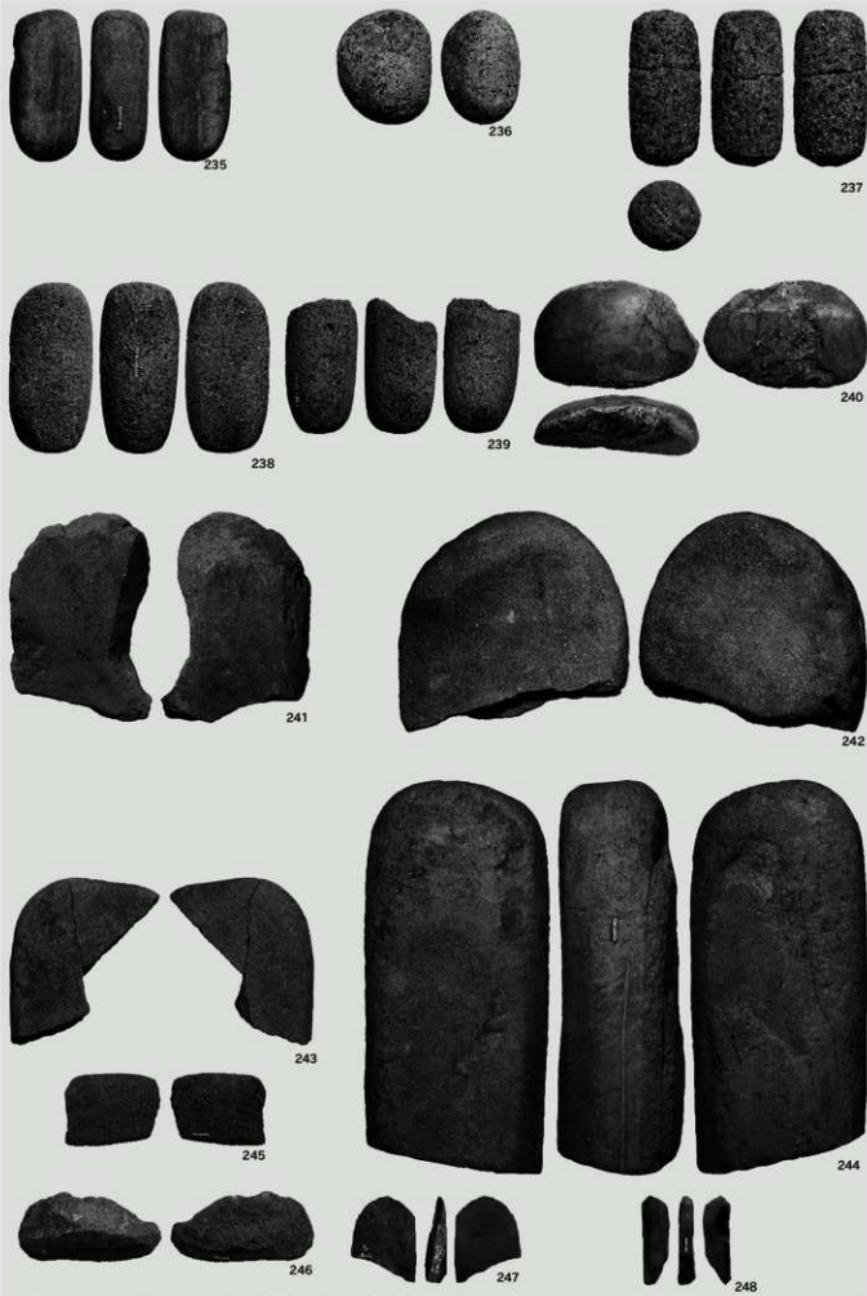
打製石斧A類 (195~199) B類 (200~203) C類 (204) 磨製石斧A類 (205~209) B類 (210~212) 磨製石斧未成品 (213~214)

S=1/3 (195~214)



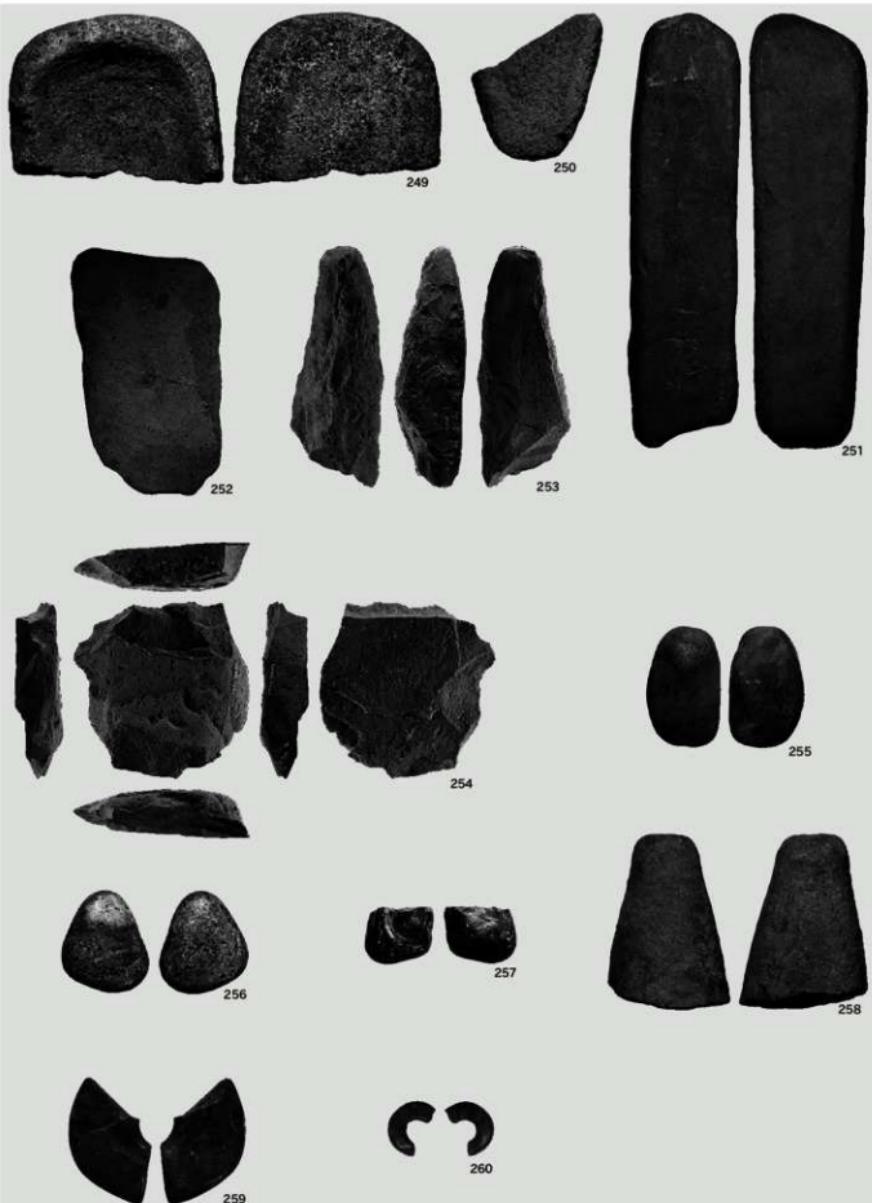
磨製石斧未成品 (215) 磨磨石類 A種 (216~221) B種 (222~226) C種 (227~230) D種 (231~234)

S=1/3 (215) S=1/4 (216~234)



敲撃石類D類 (235・236) E類 (237~239) 分類不可 (240) 磨石A類 (241~244) B類 (245~248)

5=1/4 (235~248)



S=2/3 (259・260)
S=1/3 (253・254)
S=1/4 (255・258)
S=1/5 (249～252)

石器 (249～252) 三角錐形石器 (253) 石核 (254) 鏡面状の光沢を有する石器 (255～257) 石棒 (258) 梗状耳飾 (259・260)

報告書抄録

| ふりがな | どうかんいせき・むかいはらいせき | | | | | | |
|--------------|--|--------------|-------------------|---|--|------------------------|---------------|
| 書名 | 道灌遺跡・向原遺跡 | | | | | | |
| 副書名 | 上信越自動車道関係発掘調査報告書 | | | | | | |
| 巻次 | XIV | | | | | | |
| シリーズ名 | 新潟県埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第136集 | | | | | | |
| 編著者名 | 小田由美子・高橋保雄 | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 | | | | | | |
| 所在地 | 〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1 TEL 0250(25)3981 | | | | | | |
| 発行年月日 | 2004(平成16)年8月27日 | | | | | | |
| ふりがな 所取遺跡 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 道跡番号 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| 道灌遺跡 | 新潟県新井市大字志道灌1724番地ほか | 15217 | 342 | 36°59'43"(新座標) 12°19"(新座標) | 138°12°19"(新座標) 19951127~19951208 19961007~19961018 二次調査 19970422~19970801 | 2,300 m ² | 道路(上信越自動車道)建設 |
| 向原遺跡 | 新潟県新井市大字菅沼字向原307番地ほか | 15217 | 341 | 36°58"(新座標) 12°16"(新座標) | 138°12°16"(新座標) 19951127~19951208 19961007~19961018 二次調査 19970414~19970610 | 1,800 m ² | 道路(上信越自動車道)建設 |
| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | | 特記事項 |
| 道灌遺跡 | 集落 | 繩文時代中期初頭~前葉 | 竪穴住居2・埋甕炉3・土坑7・焼土 | 繩文時代(新保・新崎式、深沢遺跡第2類・第3類土器、仮称後沖式、指頭丘眞文土器など)・土製品(土偶)・石器 | | | |
| | 生産遺跡 | 平安時代(10世紀前半) | 炭窯1 | 平安時代(土師器・須恵器) | | | |
| 向原遺跡 | 生産遺跡 | 平安時代 | 炭窯(伏窯) | | | | |
| | 生産遺跡 | 近世以降 | 炭窯(石積み窯) | | | | |

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第136集
上信越自動車道関係発掘調査報告書 XIV
道灌遺跡・向原遺跡

平成16年8月26日印刷　編集・発行 新潟県教育委員会
平成16年8月27日発行 〒950-8570 新潟市新光町4番地1
電話 025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 北越印刷株式会社
〒950-0034 新潟県長岡市福住1丁目6番27号
電話 0258(33)0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第136集『道灌遺跡 向原遺跡』 正誤表

| 頁 | 位置 | 誤 | 正 |
|----|---------|---------------------|---------------------|
| 抄錄 | 道灌遺跡 北緯 | 3 6 度 5 9 分 4 3 秒 | 3 6 度 5 9 分 4 6 秒 |
| 抄錄 | 道灌遺跡 東経 | 1 3 8 度 1 2 分 1 9 秒 | 1 3 8 度 1 2 分 2 5 秒 |
| 抄錄 | 向原遺跡 北緯 | 3 6 度 5 9 分 5 8 秒 | 3 7 度 0 0 分 0 2 秒 |
| 抄錄 | 向原遺跡 東経 | 1 3 8 度 1 2 分 1 6 秒 | 1 3 8 度 1 2 分 2 7 秒 |